

910.26-B12aウ



1200500754415

910.26

B12a



始





33.2. 3



2483

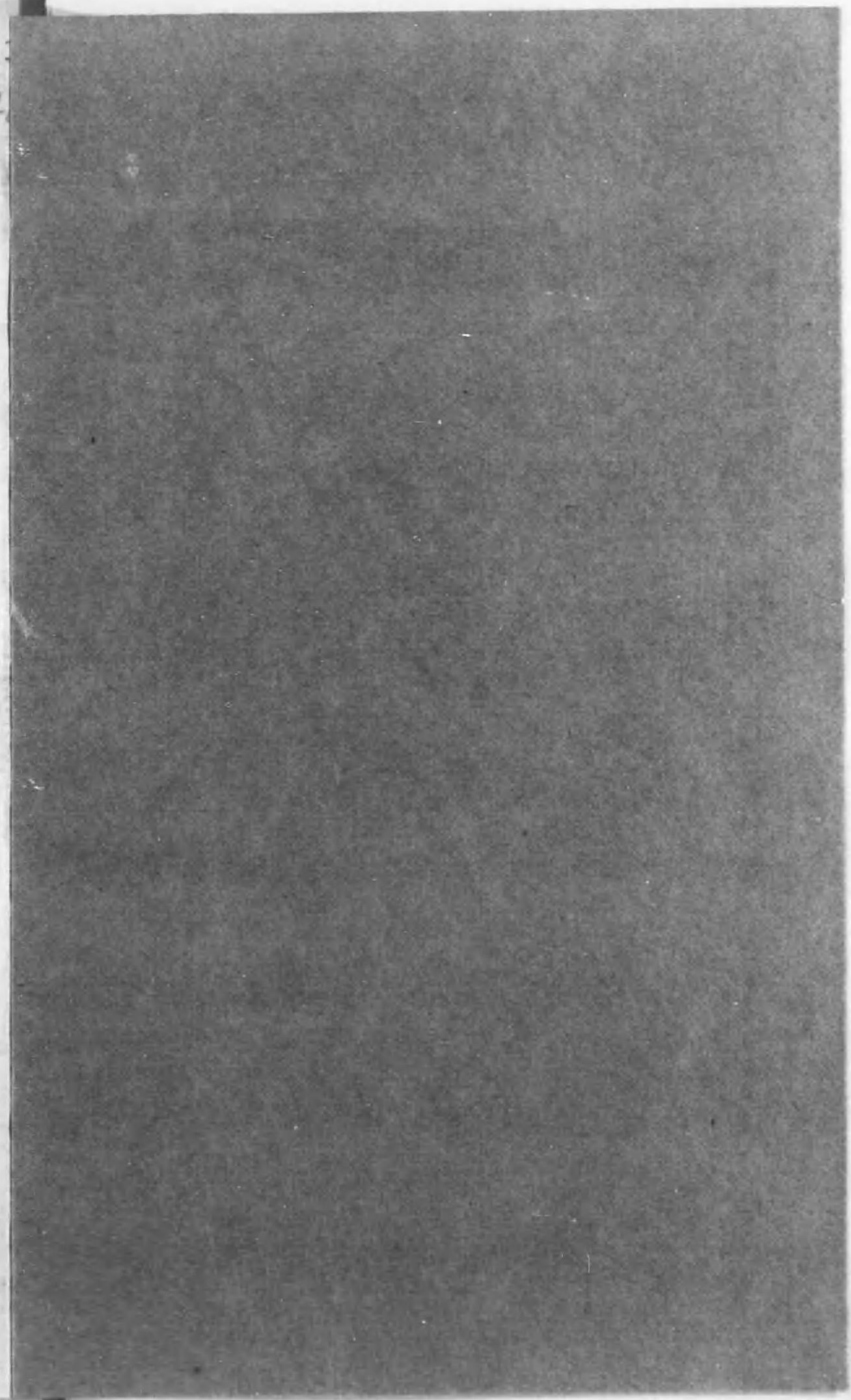
910.  
B12  
④



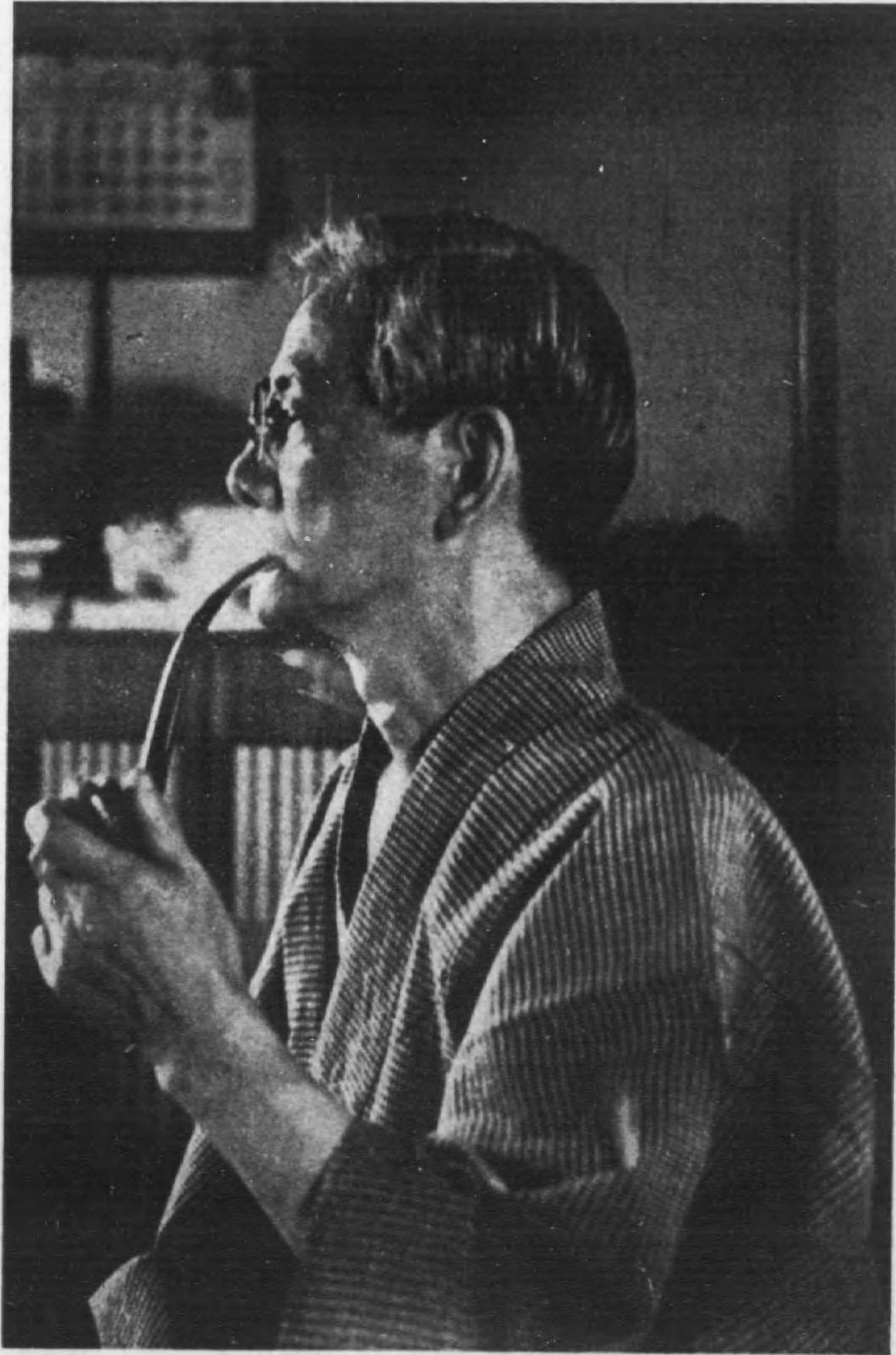
馬場孤蝶著

明治文壇の人々

東京 三田文庫子安版部







(てに齋書年五十和昭) 者著の年晩







者著の頭初正大



秋年七十二



月八年五十二



日七月六年四十二 歳三十二

者著き若



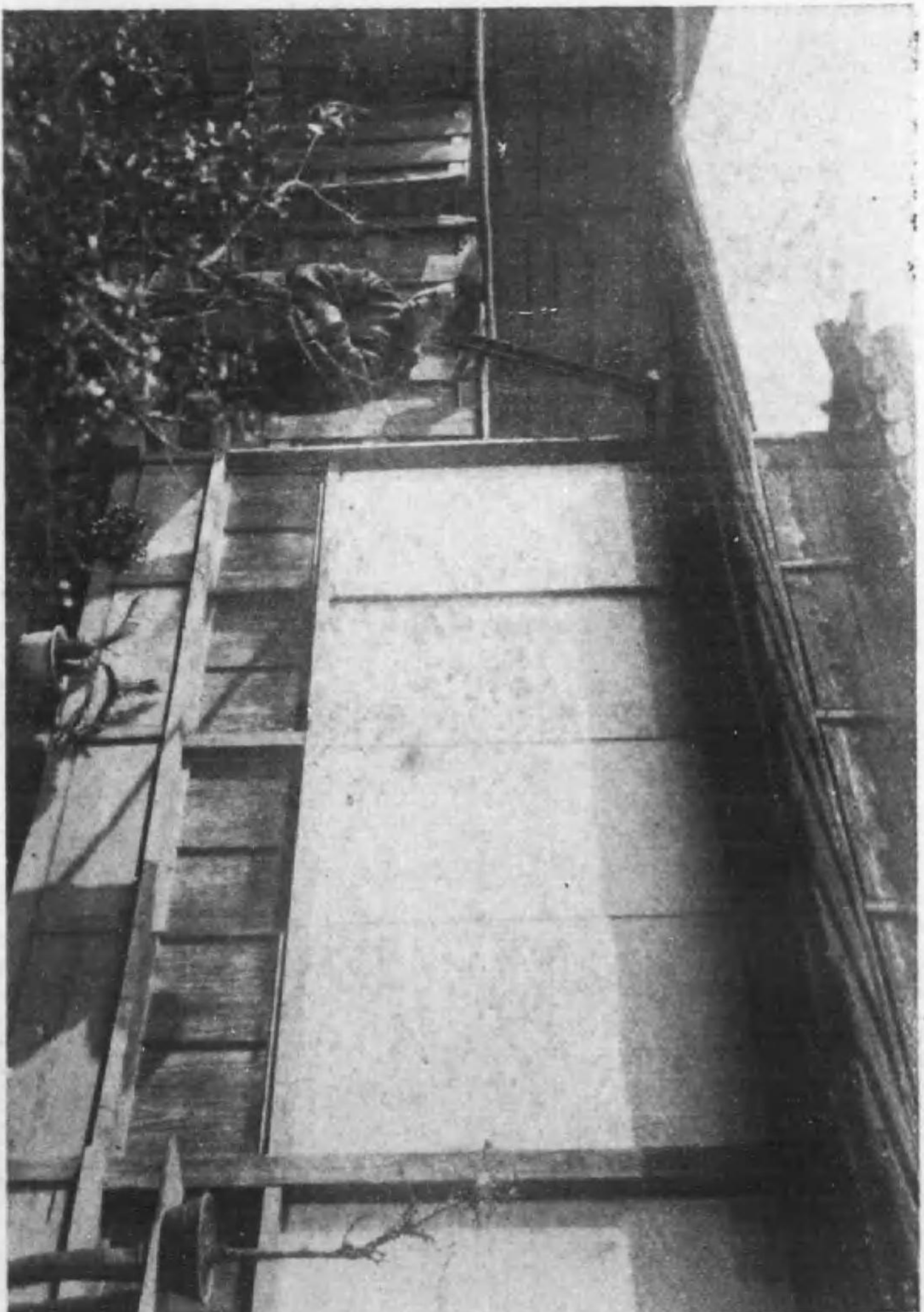


頃の界學文  
山眉上川・敏田上(列後) 村藤崎島・骨秋川戸・者著(リよ左列前)



(月四年七十二治明) 中社界學文  
木禿田平・者著・村藤崎島 (リよ左てつ向列後)  
影夕野星・骨秋川戸・知天野星・村柳田上 (列前)





家るめ住の葉一

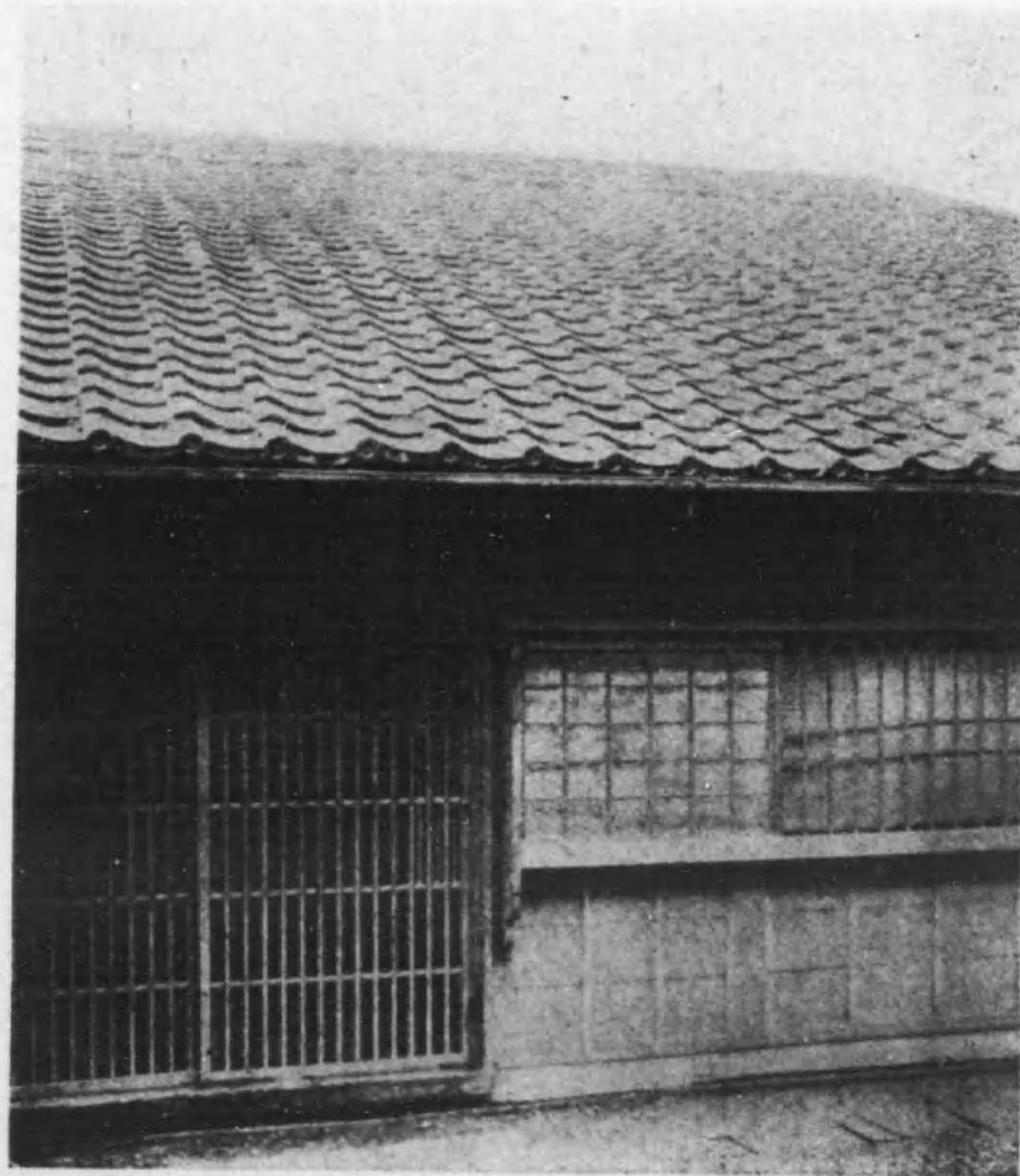


てに蘆舊の葉一  
 てい置人一・寛野謙興・燕内山小・代千八（内山小）田岡（リよ左列前）  
 樋はるけ抱を子・敏田上てい置人一・子晶野謙興・者著（列後）平草田森  
 江長田生・城大原栗・子邦口



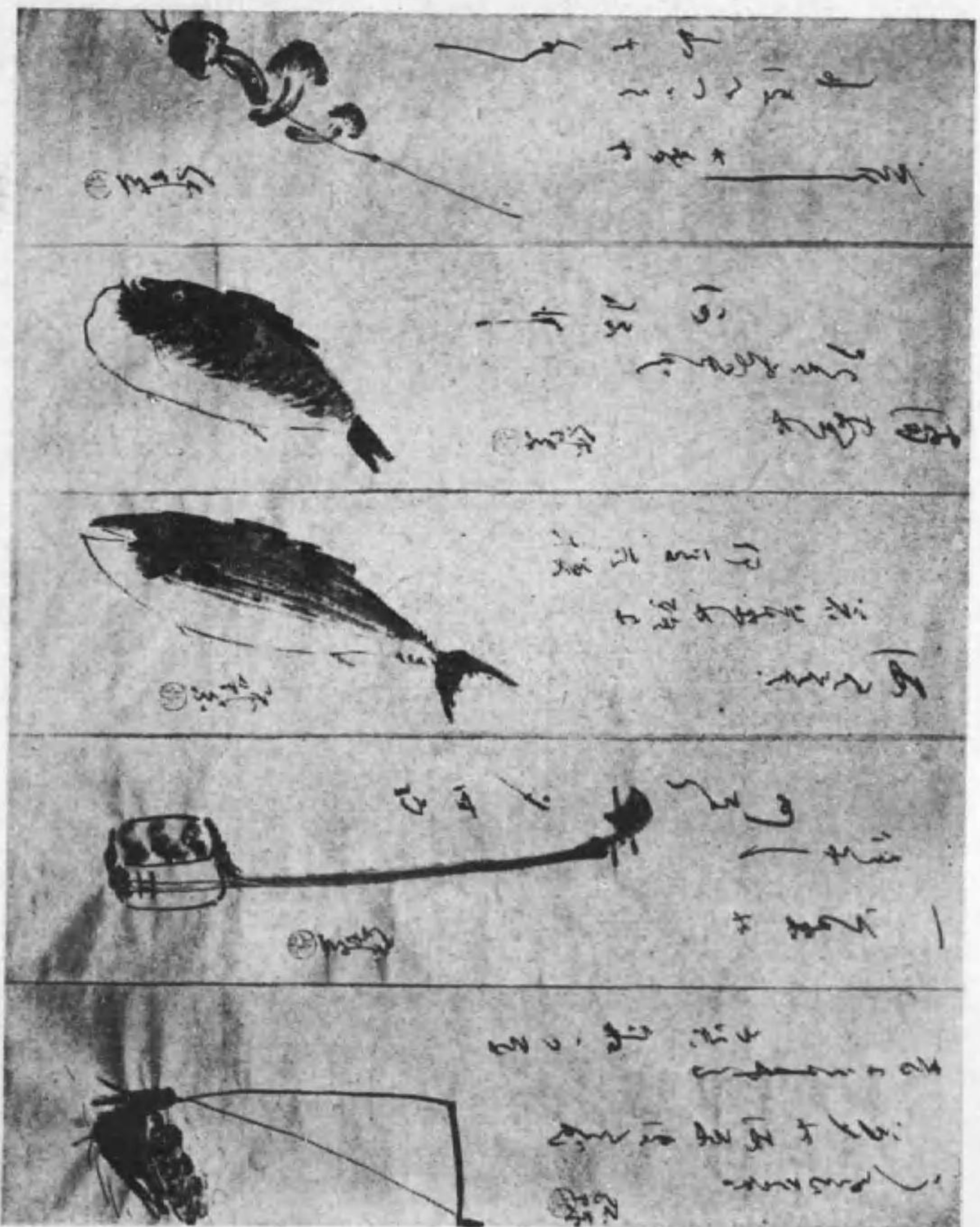


(てに村藤大年一十正大) 式幕除碑念記葉一  
子邦口種妹の葉一が後のそ・者著央中列前

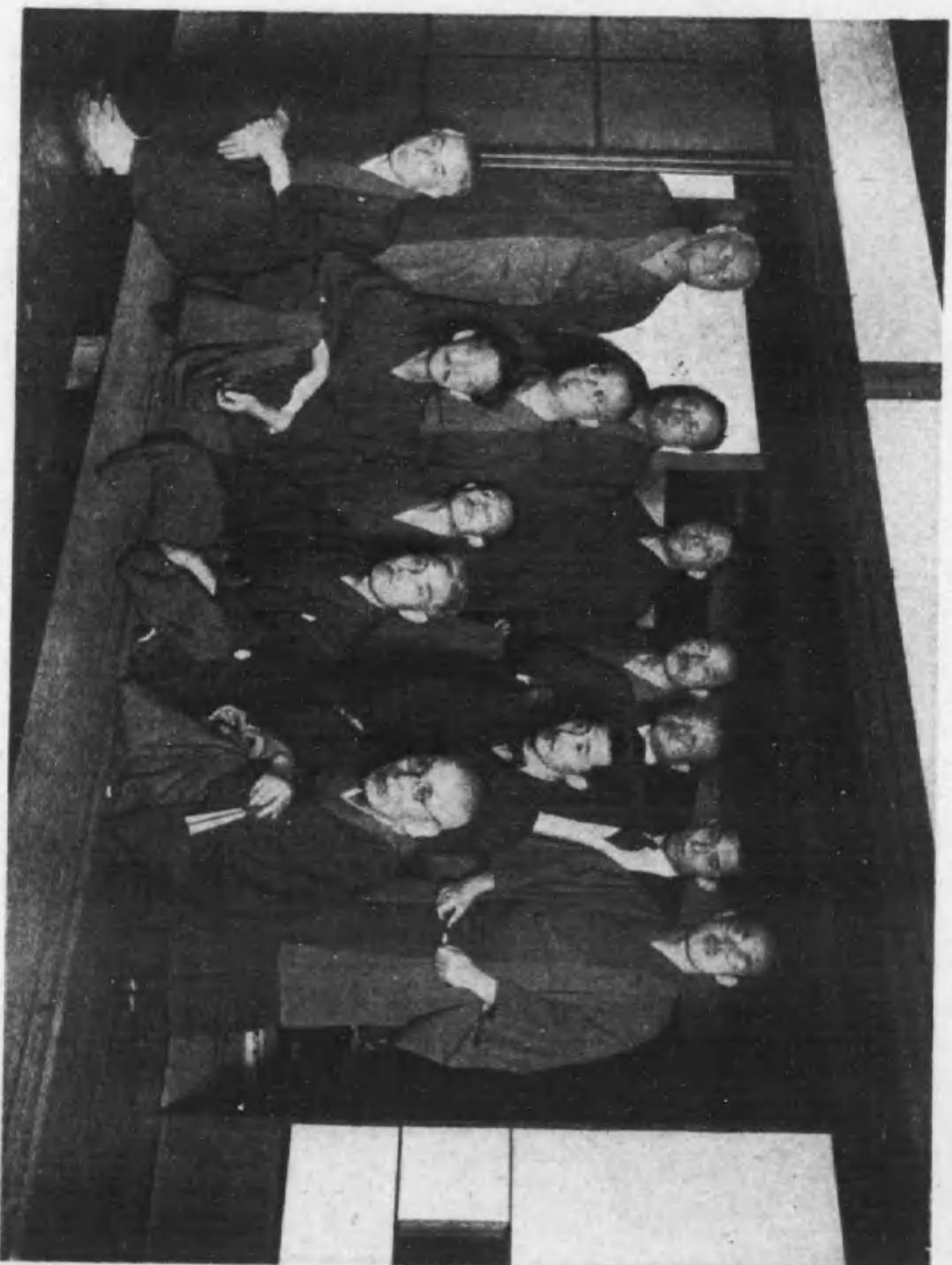


(地番七町網横所本) 家るけ逝の雨縁





畫書の技餘

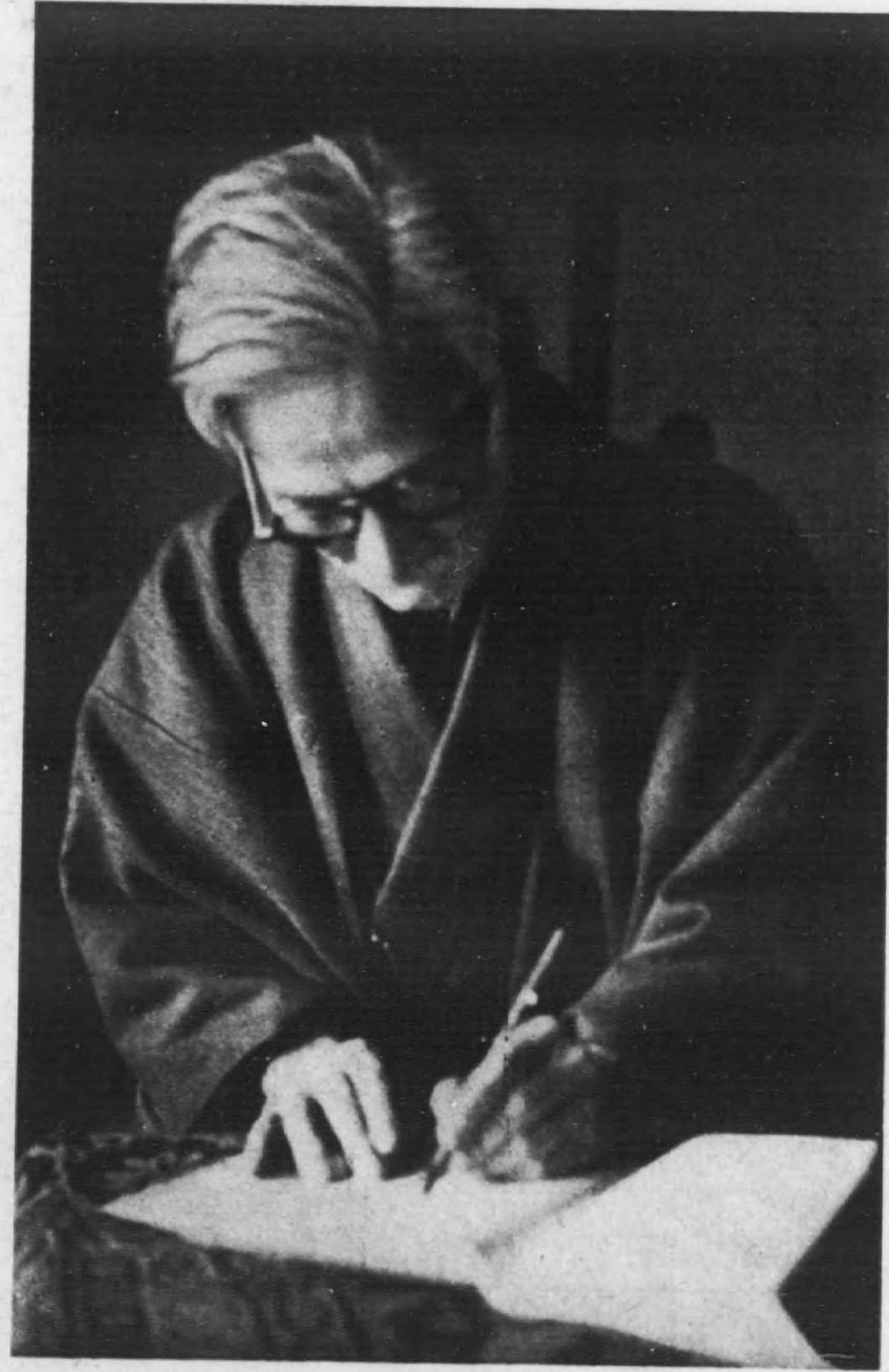


(てに寮茶阿ヶ星年三和昭) ひ祝啓還  
 十知野岡・蕪内山小・骨秋川戸・郎敏方生・平草田森・者著・村藤崎島(リよ左列前)  
 磨善岐土・黎野岡・郎太實中田・村雨下森・郎太瀧上水・郎太万田保久・袋花山田(列後)



948  
132

明治文壇の人々



(年二十和昭) 筆執ので手左



装幀 木村莊八

明治文壇の人々 目次

口 繪

自然主義を育ぐくむ文界	一
明治時代の閨秀作家	六九
北村透谷君	九四
上田敏君	一〇〇
鷗外大人の思出	一〇八



二

更に衰へざりし鷗外大人……………一一三

漱石氏に關する感想及び印象……………一二二

齋藤綠雨君……………一四一

山田美妙氏を憶ふ……………一八四

あの頃の川上眉山君……………一八七

霽降る夜……………一九五

若かりし日の烏崎藤村君……………一九九

樋口一葉女史に就いて……………二三五

綠雨と一葉……………二九〇

一葉の手紙……………三〇五

本所横網……………三二五

大音寺前……………三三九

「にぎりえ」の作者……………三五八

「にぎりえ」になる迄……………三八一

「たけくらべ」の跡……………三九三

劇になつた「濁り江」と「十三夜」……………四〇七

一葉舊居の碑……………四二七

山田美妙齋の二十五周年に當りて……………四三七

六角坂の家——紅葉君の片影——……………四四四

眉山・綠雨・透谷……………四五〇



一葉の日記……………	四
少し與太のやうだ……………	五〇二
「文學界」のこと……………	五一三

自然主義を育ぐくむ文界



教科書以外の書物と云つたところで、少年の時分のことだから、もとより娯樂の爲めの讀書であるのは勿論だが、さういふ書物を何時頃から讀みだしたものだか、時々大凡のところでも思ひ出してみやうとするけれども、何うもまるで記憶がない。しかし、推定して行けば、大抵明治十四、五年頃からのことだらう位には考へられぬことはない。そこで、それは先づそれにして置いて、一體何んなものから讀みはじめたものであつたらうか。



今日のやうな少年向きの單行ものとか、同じ向きの雑誌などのある時代でなかつたことは勿論であるのだから、大人の讀むもの——と云つたところで、少年が讀むのだから、小説とか、それに類似の物語り本に限るのだが——を讀むより外しかたがなかつたのだ。

その時分には、所謂大新聞と小新聞といふものゝ區別が形の上に判然と表はれてゐた。大新聞——東京日日、郵便報知、朝野<sup>てんや</sup>など——は四號活字で殆ど振假名の部分はなく、論説が全く主要部であり、次ぎには、法令とか、政治記事などが重要事項として、取り扱はれて居つたといふ風で、挿繪などは絶対にない、全くの政治新聞と云つていゝ位の體裁のものであつたが、小新聞の方は、五號の總振假名で刷つてあつて、續き物——小説と云へば云へるもの——のなかには、極く俗な挿繪があり、雜報——今でいふ社會記事——には、市井の出來事が幾分の文飾を加へて書いてあつて、全體の振り合ひから見れば、何うしても娛樂的の讀み物であつた。所で、僕のうちなどへは『繪入新聞』——これが一つの新聞の名であつたのだから、

唯これだけでも、當時の大新聞と小新聞との差違の一端が窺へるだらうと思ふ——といふのがはひつて居つた。僕は何うもそれなどから讀み始めて、娛樂的の讀書の習慣にはひつたのではなからうかと思ふ。

その時分には、前代出版の古い木版ものを重ねて高くしよつて、家庭を廻はつて歩るく貸本屋があつたので、さういふ貸本屋の本を何時の間にか讀みだした。

父は決して學者と云ひ得るほどの讀書人ではなかつたのだが、若い時分雜書は可なり讀んだことがあるやうであり、母も假名だけしきか讀めなかつたのだが、それでも古い小説は少し讀んでゐたやうであつた。僕には直ぐ上に兄があつて、これは十九歳位で死んだのだが、それが貸本屋からいろいろ借りて讀んだ。父も、母も、さういふ種類の本を讀むことには反對しないどころではなく、すべて書物を讀むといふことはいゝ事で、さういふ小説類を讀むのでもそれはそれで相當の益はあるのだと考へてゐたらしく、時々は斯ういふ本が面白いとか、これ／＼の本を昔讀んだことがあるとかいふやうな話さへする位であつたのだから、僕等のうちでは讀書の



自由だけは十分にあつた。其所で、僕も何時とはなしに、兄の借りた貸本を読みだしたのだ。兄は繪が好きであつたからかとも思うのだが、『三國志』、『水滸傳』、『八犬傳』、『弓張月』といふやうなものがうちへ入つて來たので僕はさういふものをぼつ／＼讀んだやうに思ふ。一九だの、三馬のものもはひつて來たのだらうと思ふのだが、その時分それを讀んだといふ覚えはない。恐らくは讀みかけても、少年にはその面白みが解らなかつたので、讀まずにしまつたのだらうかとも思ふ。兄の死後、遺物のなかから活字本の『滑稽和合人』を發見して、讀んで大笑ひをしたことは、それから何うしても三四年後のことであつたらう。

因みに云ふが、僕の此の兄は、僕に小説を讀む機縁をつくつて呉れたのみならず、本郷の若竹<sup>わかたけ</sup>へ度々僕をつれて行つてくれたのも、此の若い兄であつた。僕のやうな三文文士になることにさへ、何等かの家庭的感化が必要であるといふのであるのなら、さういふ感化の可なりの部分をば、僕は此の兄から受けたものと思はなければならぬ。

兄が死んでから後、少しの間は、僕自身が貸本屋から本を借りて讀んだやうに思ふ。馬琴の『三七全傳南柯夢』を借りたことだけは確に覚えてゐる。

## 二

さて、その時分からは、活版本を買つて讀みだしたのだが、それらは大抵古い本の翻刻ものであつた。日本紙へ活版で刷つて、色刷の表紙をつけたもので、半紙版のものもあれば、四六版位の大きさのもあつた。中には、原版の方の繪を縮寫か何かして入れた立派な翻刻などもあつた。『八犬傳』、『南柯夢』などが、さういふ本で出て居たのだが、その當時の代價では一冊五十錢にはついてゐなかつたと思ふのであるが、今あんなものを出せば、一冊何うしても二圓位にはなるであらう。さし繪だけでも『水滸傳』、『三國志』などの翻刻は立派なものであつた。前者の口繪は芳年<sup>よしとし</sup>であつた。『弓張月』は四六版位のものであつたが、繪は芳年門下の年恒であつた。その外、三十間堀の榮泉社といふのから、『古今實錄』といふ叢書が出た。半紙版



の一冊二十丁（頁にすれば四十頁）餘位の本で、これは、『大岡政談』とか、『伊達顯秘録』とか、『天草軍記』とか、『箱崎文庫』といふやう講釋の種本であつたやうである。その外に、『時代世話劇種本』かぶきのたねぞんといふ叢書もあつた。これは、『忠臣藏』、『妹背山』、『伊賀越乗掛合羽』といふやうな義太夫の丸本の翻刻で、色刷りの表紙の裏に、役々に當時の役者をあてたものが刷つてあつた。なかにもさし繪がある。繪は落合芳幾よしひの筆になつたものであつた。これも半紙版の本であつた。その外に『やまと文庫』と云つて、義太夫の丸本が合冊になつて出たことを覚えて居る。これは四六版の洋紙の可なり厚い本であつた。

要するに、明治十四年位から明治二十一、二年位までは、出版界では、翻刻が大勢力をしめて居つたと云つて宜からう。

明治十五、六年頃には、創作とか、新刊とかいふものは全く無かつたかといふに、全く無いのではなかつたが、その數は僅であつたのみならず、その質に於ても、前代——徳川時代のものとは比較にならぬものであつたので、その方から云つても讀

書界の渴を醫するためには、前代の書物を翻刻するより外はなかつたと同時に、當時次第に發達しかけて居た印刷界の印刷能力の方に十分の餘裕があつた爲めもあつたらうと思はれる。尙それ以外に、中學以上の文科教科書は大抵漢文であつたので、それ等の需要を満たす爲めにも、前代の木版物を活版で刷る必要があつたことは勿論である。詰まり、庶民が前代のやうに本とあまり關係のない生活は送くつて居られなくなつたところが、その需要をみたすには前代に印刷した本だけではトテモ足りないので、その翻刻を急ぐといふ譯であつたのだと思ふ。

今その時分の本を出してみるのに、總振假名つきのものであるに拘らず、本文ほんぶんは勿論のこと、振假名にも、誤植が殆どないと云つていゝ位だ。何と云つても當時はまだ印刷業が今日のやうな大商業になつて居なかつたので、文字の素養の幾らかあるやうな人間でなければ、活版工には採らないといふやうな風で、熟練工のみを使つて居られたのであらうと思ふ。それから又、何と云つても、活版所も今日のやうな大規模のものはなかつたのであるから、一體にさう忙がしくはなかつたので、自



然仕事が丁寧にし得られたのであらうと思ふ。

斯ういふところにも、近代的工業の發達の状態があり／＼と窺はれるのは、聊か興味ある事柄である。

八

三

ところで、その時分新作をした作者は何ういふ人々で、且何ういふ風な作物を公にしたかといふことも一言する必要があると思ふ。

徳川時代に於て既に作物を公にしたことがあるとか、さなくとも徳川時代の作家の作風を多分に傳へて居るとかいふやうな人々が可なりあつたらうと思ふのだが、吾々の聞いたところでは、その代表者として、たけさきのよき染崎延房、さんざんていありんど山々亭有人、かまがらうぶん假名垣魯文の三氏を數へるのが至當であらうと思ふ。

染崎氏は爲永春水たけながしゆんすいの弟子で、二代目か三代目の春水に當る人であつたらうと思はるゝ。『繪入新聞』の社員であつたやうである。春水の『いろは文庫』は『梅曆』

よりも廣く讀まれたやうに思はれるし、『梅曆』よりも作風その他がこみ入つて居ることは明かであるのだが、あへびくわうせん饗庭篁村氏の考證では『いろは文庫』は春水自身の作ではなくして、染崎氏の代作だといふのである。『いろは文庫』は今日のやうに活版で刷れば大して長いものではないのだが、あれでも木版物としては可なりの長篇であつたらうと思はれるので、或はその一部分などは、明治時代にはひつてからではないにしても、明治に近い時代に書かれたものかも知れぬと思はれる。さうすると、饗庭氏の説のやうに『いろは文庫』は全部、染崎氏の筆になれるものではなかつたにしても、終りに近い部分位は染崎氏の作であつたことは確かかも知れないであらう。それはともかく、明治十年代になつては、染崎氏の名で公にされた作物はもうなかつたやうに思ふ。或は『繪入新聞』に出た讀物即ち准小説のなかに、染崎氏の筆になつたものが幾つかあつただけけれども、作者の名が表はして無かつたか、又は表してあつても、僕などは氣がつかかなかつたかで、僕などは知らずじまつたのであるかも知れぬのである。

九



山々亭有人氏のものも、僕などは記憶してない。氏が後になつて條野探菊てうのさしきくの名で書かれたものゝ方を記憶して居る位である。

猫々道人めうめうだうじん假名垣氏にも纏まつた小説といふやうな作はあつたやうだが、今一寸それを何れとも指示し得るだけの材料が手近に出てゐないので、何ともいふことはできないが、何うもさう大したものがあつたらうとは思はれない。假名垣氏は、滑稽文とか、引札といふやうな短文を書かせては、全く獨歩の雄であつた。殊に引札に至つては、ことごとく稀有の名文であつたと傳へられるのであるが、その性質上皆散逸してしまつて、後に傳はらぬのは、好事の士の痛惜措かざるところであらう。

明治十年前後の短文家としては、成島柳北氏なるしやうほくを數へざるを得ないのであるが、氏にも後にまで感化を及ぼすといふやうな作物のなかつたことは確である。

此の時代の文藝的作品といふ點から云へば、よし、それは雜文といふ形式のものであつたとして如上の四氏よしのものを擧げるより外はないにしても、形式の上からいへば、又長さの方からもこれを云へば、小説と云はなければならぬ作品をとにかく

新作した人々が外に數氏あつたにはあつたのである。

兄の借りた貸本を讀んだ時代のことであるが、その時分位に出た新しい草雙紙式の小説を讀んだことを記憶する。一つは『冠松眞土夜嵐』といふ神奈川縣の眞土村といふに起つた農民暴動のことを書いた一篇三冊續きで、三編位になつてゐるもので、作者の名は竹田某とあつたかと思ふ。それから、も一つは河竹默阿彌の『霜夜鐘十字辻占』であつて、これは一篇が三冊づゝで五編位にはなつて居たかと思うのだが、兩方ともさし繪は芳年であつた。草雙紙と云つたところで、總假名ではなく、版下流はんしたりうの字ではあつたが、大抵字でそれに振假名がついて居たと思ふ。草雙紙型の本では、これ等などが最後のものではなかつたのではあるまいか。明治十六年頃の赤本の小説の作者としては伊東橋塘いとうけうたうを先づ擧げなければならぬであらう。敢て優れたる作家といふ意味ではないが、とにかく作物の多かつた點に於て、沿革的の觀方に於ては、その名を逸する譯に行かぬと思ふのだ。その作は大抵七五調で書いた通俗小説であつた。相政あひまさの名で通つてゐた相模屋政五郎の傳記とも見るべき『花春時



相政』、日本橋邊の商人某——吉安とか云つた——が同じく日本橋の藝者——歌吉といつたかと思ふ——と情死したことを書いた『日本橋浮名歌妓』、それから、五明樓玉輔の續き話を書いた『寫眞の仇討』といふやうな作があつた。これ等は皆半紙半切位の日本紙の本であつた。柳亭燕枝の續き話を書いた『島衝津津白浪』、春風亭柳枝の續き話を書いた『唐模様倭撫子』、何れも伊東氏の名で出たものであるが、これは半紙版の日本紙の本であつた。

此の時代に於て、注目すべき出版界の現象は所謂小新聞の擡頭である。所謂繪入新聞の發展である。自由黨の結黨以後、その主義の宣傳機關として『自由新聞』は大新聞として有識社會に對してアツピールする用に供せらるゝと共に、別に民衆に訴へる機關として、『自由之燈』なる繪入りの小新聞を其後發行することゝなり、それより少し後になつて、『朝野新聞』と何れだけの關係になつて居たものかそれは知らぬが、『繪入朝野新聞』といふのが、朝野新聞社の向ふ側——尾張町の北角、震災前山崎洋服店になつて居たところ——から發行せらるゝに至つた。『改進黨新聞』

の創刊も大凡それに近い頃のことゝ見て宜しいであらう。これ等の小新聞は、大新聞では無かつたに相違ないが、それでもそれ以前の小新聞即ち繪入りの新聞よりは、その體裁内容とも、ずつと進歩したものであつたのである。だから、從來の小新聞に比すれば、これは謂はば中新聞ともいふべきもので、小新聞が大新聞の領地へ一歩踏み入りかけたものと見る事ができるのであらう。思うに、これ等の小新聞即ち繪入りの新聞は大新聞より比較的發行部數などは多くつて、營業としては成功の望があつたので、次第に今日のやうな新聞にまで發達してしまつたのであらう。大阪の『朝日』、『毎日』といふやうな新聞は大新聞でありながら、始めから小新聞の形式を採つたのだらうかと思ふ。

『自由之燈』は、續き物に芳年門下の芳宗の筆になる可なり大きな繪を入れてゐた。沿革的に云へば、形式では小新聞——繪入りの新聞——が大新聞を侵略して現今の如き體裁の一般新聞を作りあげた譯である。



所で、『自由之燈』——直きに『繪入自由新聞』になつたかと思ふ——には、花はな笠かさ文ぶん京きやう（渡邊氏）の小説が幾つか出たと思ふ。『身を知る雨』、『濱の松風』とかいふやうな續き物が出たことを覚えてゐるのだが、作者の署名は無かつたかも知れぬが、大抵渡邊氏の作であつたらうと思ふ。宮崎夢柳みやざきむら氏の『鬼啾々』といふやうな露西亞虛無黨の時代のことを書いた小説やうのものも『自由之燈』若くは『繪入自由新聞』に出て居た。

さて、こゝまで舉げて來た作家も、そのうちに柳北氏などを除けば、徳川時代の戯作家及びその作物とさうした差違のあるものではないのであるが、明治十六、七年頃からは、もつとずつと知識階級即ち學者と云ひ得る人々の筆から小説若くはそれに類似の作品が世に問はれることになつたのである。さういふ作品の早いものゝ一例としては、坂崎紫瀾さかざきし氏の『肝血千里駒』を舉げるべきであらうと思ふ。これは、

幕末の志士坂本龍馬の外傳と見るべきものであつて、土陽新聞どやうか何か新聞の續き物で出たものを、更に東京で、半紙半切位の日本紙刷の二冊本にしたものであつた。但し、作そのものゝ傾向としては、その時分から萌芽しかけて居た明治前期の新文學にさしての影響を及ぼし得べき性質でなかつたことはいふまでもあるまい。

けれども、學者の著作に就て書く前に、一般讀書界の知識程度若くは傾向を大凡指示するものとして、翻譯書の小流行を録して置くのが宜しからうと思ふ。

井上勤いのうえつとむ氏の翻譯が一番多かつたやうに記憶する。ジュール・ヴェルヌの『空中旅行』、『海底旅行』、ラムの『沙翁物語』——これは『マアチャント・オブ・ヴェニス』が『人肉質入裁判』といふ名で出て——それから續いて袖珍本で數種の劇が物語として譯されてゐた。外には『狐の裁判』と『亞刺比亞物語』（アラビアン・ナイト）が井上氏によつて譯されてゐた。その外、牛山某氏のスコットの『アイヴアンホオ』の抄譯が『梅蕾餘薫』の名で出てゐたと思ふ。

その外、ペカンフィールドのものや、リットンのものなど一二翻譯されたやうに



も思うのだが、さしかゝつて、判然といふことのできるまでの記憶がない。  
唯こゝで一言して置き度いことは、これ等の翻譯書は皆四六判の洋紙刷りのものであつたことである。

科學、政治、などの書は既に洋紙になつてゐたのだが、文學ものゝ書が洋紙に刷らるゝやうになつたのは、これ等の翻譯書から追々一般に及ぼしたものと見られよう。斷はつて置くが、これ等の本は出版年月は、多分伊東橋塘の作品その他當時でさへ舊派と見なさざるを得なかつた作者の著作の出版年月といろくゝに入り組んで居るので、年月だけで劃然と區別ができるといふ譯には行かなからうと思ふのだ。

例へば、速記をもとにして作つたもの、或は速記そのまゝのものといふやうな小説は、その内容に於てはさまでの意味はなかつたにしても、速記といふ割合に新しい技術の一般的應用といふ謂はゞ新しい著作方法によつたものであるといふ性質上、從來の著作方法によれるものより幾らか後になつて出たのは當然であらう。

桃川如燕（桃川かほせん）の講談を速記か筆記かしたものに基いて書いたらしい『曉星五郎』――

執筆者は伊藤橋塘――は、前記の燕枝の續き話、柳枝の續き話によつて同じ人の書いた『冲津白浪』『倭撫子』などよりは少し後で出たものゝやうに思ふ。若林珮藏（わかばやしんざう）氏速記の圓朝の『牡丹燈籠』が出たのはまたそれよりも少し後かと思ふのだが、若しそれが前後して居つたにしても、年月の違ひは何れにしてもいふに足る程の隔りはないに違ひない。圓朝（えんてう）の『松操美人生埋』や、『業平文次』の出たのは、そのまた少し後であつたらう。『松の操』は本を見なかつたが、『業平文次』と『曉星五郎』とは半紙判の本で幾冊にも分冊されて出版された。『牡丹燈籠』も分冊で逐次に刊行された點は前二者と同じだが、型は半紙半切位の大きさであつた。何れも半紙本のことであるから、厚くなるのが印刷能力などの關係からも不便であつたのと、代價――當時一般のかういふ風に分冊することになつたものであらう。本の體裁から云――の關係などでさういふ風に分冊することになつたものであらう。本の體裁から云へば、『曉星五郎』のは、表紙挿繪等に、その前の赤本の體裁が――色刷りではなかつたけれども――まだ残つて居り、『牡丹燈籠』にも表紙は餘程單純になつてゐ



たとはいへ、幾らか赤本たちのところがなかの挿繪の風に残つて居たのだが、『業平文次』になると體裁がもう一層單純で裝飾がすつと減つて居つたやうに思ふ。

## 五

坪内逍遙ついでらちせう氏の春廼舍臚はるのやまぼろの名で公にせられた『書生氣質』、『内地雜居未來之夢』の二小説は確に明治前期の新興文學——硯友社の勃興から明治二十五、六年位迄の時代のものを指してさういふことにして——に對しての曉鐘であつたものと見るべきであらうが、その出版年月は前記の舊傾向の出版物の勢のまだ衰へぬ最中であつたらうかと思ふ。少くとも本の體裁は半紙全紙の分冊もので、圓朝の速記本の系統に屬するものであつた。その發刊が何うしても明治十七年より後ではなかつたことだけは確である。

坪内氏の『書生氣質』には、所謂る文政、天保時代の傳奇的趣向が全く排けられて居たといふのではないが、殺人とか、強盜とかいふが如き日常生活にはさう度々は起らない事件を趣向のなかゝら全く排除したる點や、學生としての日常生活を可なり如實に描いた點や、それまでの普通の小説とは異なつて、作中の人物をば何れを主人公とは定め難いといふ描法を執つて居た點や、作中の人物にはそれ／＼幾分かモデルがあつた點などで、當時の作物としては確に異彩あるものであつたと共に、従つて可なり新味のあるものであつたことは疑ひない。それで、さういふ新味の點、即ち謂はゞ幾分の前期的寫實傾向が、その後には表はれた諸小説——例せば、硯友社同人の初期の作物など——に多大の影響を與へたことは拒み難いであらう。

氏の小説はさういふ風に、小説の主義、技巧の點に於て著るしき影響を當時の文壇に及ぼしたことは疑ひを容れざるところであると共に、坪内氏の如き當時の最高學府に於て修學を卒へた謂はゞ學者がまだ當時では何處までも戯作と考へられてゐた小説なるものを書いたといふ事實だけが、讀書界——それは今日の讀書界に比べては霄壤も雷ならざる位極く狭いものであつたことはいふまでもないが——に及ぼした影響は決して輕視するを得ないものであつた。



當時の帝國大學は名實共に確に最高學府であつたし、その課程を卒へた人士は、當時の智識界の水準から云へば、確に學士であり、學者であつた。これは世間もさう思つて居り、當人等も自らさう任じてゐた。男は十五歳からはもう大人として扱はるゝことになつてゐた封建の時代を去ることまださう遠くはなかつたので、當時二十四五にでもなるやうな若者は對世間的にも、今日の同じ年齢の人々よりすつと大人者びてゐたので、世間から如上のやうに厚く遇されることがさう可笑しくはなかつたのだ。當時要路にゐた人々も大抵五十以下であつたのを見ても、その時代が何の方面に於ても若者の世であつたことは想見するに難くはないであらう。

さて、さういふ風に世間から尊重せられるべき位地にゐた若き學者が小説を書きだしたのであるから、小説といふものに對する讀書界の考に多少の影響を及ぼすに至るのは自然の數であつた。平俗な言葉を以つて之を言へば、あゝいふ學者ですら小説を本氣になつて書くのであつて見れば、小説なるものは決して輕んずべきものでなく、従つて、相當學識ある者が小説を書いても決して自ら恥づるに及ばぬ譯で

ある。といふやうな考が讀書界に起されたものと見て宜しからうと思ふ。

坪内氏が『小説神髓』を著して、氏の小説に對する主義を闡明せられたのも、小説の著作後さう年月を隔てたことではなかつたと思ふのであるが、これは當時生れ出ようとしてゐた若き文學者に取つての小説作法教科書の役を勤めたことは疑ひを容れざるところであらう。

即ち作家としての坪内氏の出現は、後の青年文士の出現に對しては、春の青草をはぐくむ慈雨の如き觀があつた。山雨の來らんとするに先だつて樓に滿つる涼風の趣があつたと云つても宜しいであらう。

作風その他の點に於て、坪内氏の先蹤を追つた硯友社の勃興は、坪内氏の諸作の刊行に對しては殆どその直後と云ひ得る程までに、年月に於て相接してゐるのではあるが、硯友社の勃興を叙するに先だつて、便宜上、所謂學者の筆になれる小説——これは坪内氏の場合とは事かはつて、何れも素人わざと見ざるを得ざるものではあつたけれども——に就て、數言を費して置かうと思ふ。



先づ思ひ出づるのは矢野龍溪（文雄）氏の『經國美談』のことである。これは、古希臘のテエペがスバルタと戦つて、民主國が專制國に勝つといふ傳奇であつて、小説と云はんには餘まりに事を語るのが主だつた作物であつた。しかし、作中の大立者たる民主主義の政治家エバミノダスの言行などが、當時の民主主義的傾向の思想を持つてゐた青年等の人氣に投じて、可なりに廣く讀まれたものであつた。本の體裁は四六版の洋紙で、挿繪の有無は記憶せぬが、あつたにしてもさう多くはなかつたらうと思ふ。

末廣鐵腸（重恭）氏の、所謂る政治小説『雪中梅』、『花間鶯』の二連小説が出たのは、少し遅くなつてであつて、多分明治十九年か二十年であつたと思ふ。國野基といふ民間政治家が、政府の壓制と戦つて、遂に立憲の時代を來して、議會の大立者となるといつたやうな趣向のものであつた。作中の人物にも幾分のモデルがあるやうに想像せしむるやうな描法を用ゐたものであつたので、可なり讀書界の人氣を集めたと傳へられた。二十年頃になつての末廣氏の洋行費が此の二連小説の印税か

ら出たといふ巷説はあつたものゝ、四六版の洋紙で一冊精々一圓にはならぬ定價の本であつたのだから、何れ程よく賣れたところで——當時の本の賣れ高で見て——とても、著者にそれほどの収入はなかつたことは明である。此の二連小説は四號活字で刷つてあつたやうに思ふ。

文章に於ては確に明治の文章であり、題材に於ても、確にその時代のもものではあつたのだが、技巧に於て何等の新味の殆どないものであつたので、純文學史的に之を見れば、さまでの價值のあるものではなかつた。唯題材の點から云へば、須藤南翠氏が『改進黨』に書いた所謂る政治小説に幾分の影響を及ぼし、作に對する暗示を與へたことなどはあらうかと思はれるまでである。

東海散士（芝四朗）氏の『佳人之奇遇』は何うしても明治二十年より早くはなかつたらうと思ふ。漢文崩しの如何にも華麗な文章が讀書界の人氣を呼んだ。これは、半紙へ四號活字で刷つた裝飾の少しもないものであつた。何年もの間に亘つてぼつぼつと卷を逐つて出版されたのであるが、遂に未完に終はつたかと思ふ。



これも元より傳奇的の作であつて、純文學としては價値を認めがたいものでもあつたことは勿論である。

須藤南翠氏が『改進黨新聞』へ連載した長篇小説は、その水準に於ては矢張り『雪中梅』程度のもので見て宜しからうと思ふ。趣向に於ても、文章に於ても、末廣氏の二連小説よりは、小説としての資格が幾らか多く備はつたものではあつたが、要するに矢張り事を語るのが主になつて居つて、作中の人物の心理とか、場面の描寫などに注意を拂ふといふやうな傾はまだ少しも見えてゐなかつた。須藤氏のさういふ小説のなかには、ドイツケンスの『オリヴァー・ツイスト』の翻譯案などもあつたやうに思うのだが、それとても、原作とは餘程違つて、話の筋を運ぶのが主になつて居たやうである。

これ等の諸作は皆舊時代の傳奇的の臭味の多分に残つたものではあるが、それでも尙、題材とか、文章などの點では、その時代の色彩を可なりにもつて居つたので、舊き傳奇には飽きはてゝ、何等か幾分でも新しいものを、前時代の系統を追つたものとはとにかく幾分でもかはつたものを求めてゐた讀書界からは可なりに歓迎されたのである。何時の時代でも俗衆には餘まり新しくては迎へられない。實體は古くつて、外觀だけが新しく見えるといふやうなものが一番一般に迎へられるものである。前記の諸作の迎へられたのは善く此の間の消息を語るものと云はなければならぬ。

社會何れの方面を問はず、新しい改革が起る場合には、新しいものと、その前からあつた制度などが、重なり合ふやうになつて、新しい物と古い物とがしばらくは并存して行くものであつて、思想とか藝術とかいふものゝ世界にあつては、尙一層さういふ傾向が常であるのだから、明治文學の初期の新興時代にあつても矢張その通りで、坪内氏に始まつたと見做し得べき當時での新興文學の進行即ち硯友社の諸氏その他の活動などが可なり顯著に始まりだした時代に於てさへも、前記の如き舊套を脱しきらざる文學が可なりに并存して居たことは已むを得ない現象である。



硯友社の勃興は、坪内氏によつて始められたと見るべき謂はゞ明治の新文學の運動を直ぐに受けて起つた現象と云つて宜しからうと思ふ。創作の主義は坪内の主義と全く同じな客觀主義、前期寫實主義と云つていゝものであつた。その社中の重なる人々が皆當時大學豫備門に籍を置いて居た點などから云つても、ともかくも坪内氏が當時の最高學府卒業者の位置から身をその當時では世人から全然度外視されてゐた小説の創作界へ投じたことの影響を受けたものであることは明だと思はるゝ。

硯友社が團體となつたのは何年頃であるのか正確には今知るを得ないのだが、僕自身が『我樂多文庫』といふその機關雜誌——四六四倍版位の折りッばなしの新聞形のもの——を手にしたのは、明治十九年以後ではなかつたやうに思ふのである。それはその雑誌の十號とか二十號とかいふやうなものではなく、少くとも印本になつてから僅に數號たつたものであつたやうに記憶してゐる。その號には、何ういふ人

人が執筆してゐたのか、それも今はもう何等の記憶もないのだが、唯山田美妙齋の『夏木立』か何かの批評が載つてゐたかと思ふ。硯友社創立の當初には美妙齋もその加盟者の一人であつて、間もなく何かの事情で脱退したといふ譯ではなかつたらうか。

とにかく『夏木立』は美妙齋の短篇小説集のやうなものであつたやうに思ふ。武藏野で討死する武士の話などがあつて、その挿繪か何かのところ、『古里に今宵限りの生命ぞと知らでや人の我を待たらん』といふ歌が引いてあつたやうに思ふ。序に一言して置くが美妙齋は、長谷川二葉亭と共に、我國小説界での言文一致の創始者として、歴史的には忘るべからざる人である。二葉亭は『だ』とか『のだ』といふやうな章尾で、一種の文章體を採つたのだが、美妙齋の方は『ます』『です』といふやうな口語體を用ゐたのであつた。

勿論二葉亭も明治の新文壇へは早く出た作家の一人であつて、翻案の趣き——ツルゲエネフの『餘計者の日記』などからの——のあらはな『あぢけなし』といふ小



説の出たのは、矢張り明治十八、九年の頃であらうと思ふ。系統——親近した先輩から筋を引くだけのものだが——から云へば、二葉亭と嵯峨の家おむろは坪内氏の系統に屬する人々と云つて宜しいのであつて、硯友社とは別派であつた。當時不知庵と云つた内田魯庵氏も、坪内氏の方へ近い人で、硯友社とは別派であつたと思ふ。

所で、硯友社では、尾崎紅葉、川上眉山、江見水陰、石橋思案、巖谷澗山人、春亭九華、などといふ人々がその重なる作家で、刑法學者の岡田朝太郎氏も虚心亭といふ號で、その一員であつた。廣津柳浪氏の加盟は少し遅かつたのではなからうかと思ふ。

『我樂多文庫』は間もなく、四六四倍判位の、赤で落款の形を幾つか刷つた表紙つきの雑誌になつて、數號刊行されたと思ふ。紅葉の二宅某といふ女學校の習字の教師が女生徒のうちの美人——少し足りない生れの娘——に懸想するといふ筋のものが載つてゐたことを記憶する。他の小説も大抵男女の學生の生活を題材にしたものであつた。勿論、坪内氏の『書生氣質』よりは、描寫の幾分複雑なものであつた。その時分でさへ、紅葉の作物は、その筆致に才氣の溢れてゐる點や、固よりまださう大したものではなかつたが、人生知識ともいふべきものゝ、社中の人々よりは幾分多かつたらしく見える點などに於て、一派の主領たる勢を可なりに示してゐたやうに思ふ。

『我樂多文庫』は、やがて『文庫』と改題して、菊判になり、それが又『閨秀文學』となり、『江戸紫』——これは別紙の表紙を用ゐない折りッばなしの菊判位の大きさの雑誌——になつた。

ところで、淡島寒月氏なんださうであるが、愛鶴軒といふ名で西鶴のことが紹介されたのは『文庫』の誌上であつたやうに思ふ。

井原西鶴の諸作、續いて江島屋其磧（自笑）などの所謂八文字屋本に、當時の新文壇の人々が接觸した結果が、それ等の諸作から殊に西鶴の忌憚なき人生に對する觀察及び人間の肉慾に關する透徹せる描寫からは固よりのこと、その含蓄に富め



る簡潔——時には遒勁の域にも達したる——の筆致から、當時の文壇に於ける俊秀の人々が學び得たるところの多かつたことは、今更こゝに贅するには及ばぬと思ふ。さういふ風な所謂元祿文學が創作家の思想及び文體に影響を及ぼし得る力は、明治二十八、九年頃までは、確にその勢を持ち續けたことは明である。

## 七

硯友社の『我樂多文庫』によつての旗上後は明治小説界の行路は殆ど坦々たる平路の如き觀があつたと云つて宜しからう。

硯友社の外の文學團體としては、可なりルーズな團體ではあつたらうが、饗庭篁村、森田思軒、條野探菊、前田叢雪（健次郎）、南新二氏などの『新小説』派を擧げて宜しいであらう。

雜誌『國民の友』の發刊が何時頃であつたか明かには記憶せぬが、大抵二十年頃であつたらうとは推定せらるゝ。始めは勿論、政治の論議専門のものであつたのだが、

直きに發行者徳富氏の炯眼は當時長足の進歩を示し始めた純文學が我文化の現象の一として決して輕視し得べきものでないのを看破したる爲めか、それとも、當時の正典派とも目すべき森鷗外、落合直文氏等が、英國流進歩派の機關として、青年間に可なりの勢力を有してゐた『國民之友』の一部をば、文學的機關として活用するの目的を以つて、森氏等の方からして、進んで徳富氏を動かしたものであるのかその孰れであるかは、此所では判じ得ないが、森氏、落合氏などの筆になつた譯詩集『おも影』（新聲社輯）といふやうな署名の下に、『國民之友』の附録のやうな形で出たのは、明治二十二年頃のことかと思ふのだが、それには、ゲエテの『ミニヨンの歌』バイロンの『マンフレッド』などが譯出されてゐたことを記憶する。

鷗外氏の『しがらみ草紙』の旗上げは、確に此の『おもかげ』を先驅としたものと見て宜しからうと思ふ。

坪内逍遙氏を盟主とし、島村抱月、後藤宙外、水谷不倒等の諸氏に加ふるに、遊撃の意味で饗庭篁村氏を加へた『早稻田文學』の發刊も『しがらみ草紙』と殆ど同



時位と見て宜しからう。

小説専門の雑誌『都の花』が金港堂から發刊されたのは、明治二十二年頃であつたらうかと思ふ。初號には、美妙齋の『花車』といふのが卷頭に出て居たと思ふ。二葉亭の『めぐりあひ』、『あひゞき』嗟哦の家の『初戀』が出で、露伴氏の『露園々』が出たのは、此の雑誌であつた。ずつと後になつてのことであるが、二葉亭の創作小説『浮きくも』が矢張り此の雑誌に出た。

硯友社の諸氏の作物は『都の花』には殆ど出なかつたやうに記憶する。

饗庭氏等の據つた『新小説』が春陽堂から出たのは、幾分『都の花』に對抗したやうな意味かとも思はれるのだが、後者の方が新進の作家を紹介する主義であつたやうなので、後者の方がはるかに賑かであつた。そんなところを見ると、前者の執筆の方では、別に對抗といふ程の心持もなかつたらうかとも思はれる。春陽堂が饗庭氏が讀賣新聞へ書いたものだらうと思はれる短篇を集めた『むら竹』を刊行したのも、大凡その時分であつたらう。

工學士(?) 吉岡氏經營の吉岡書店から『新著百種』といふ創作小説の叢書が出たのは、二十二年より遅くはなかつたやうに思ふ。第一卷は、紅葉の『色懺悔』であつた。筋は傳奇的の戀愛物語の部に屬すべきものであつて、當時に於てさへ決して推賞すべき程のものではなかつたが、文體——それも未だ熟したものとは云ひがたかつたけれども、——に於て、如何にも若々しい華やかさと、氣鋭の作家に共通な幾分新味の試みの含まれて居る點に於て、若き讀者の心を魅した傾があつて、作家の文壇に於ける位置がこれではよほど確保されたことは疑ひないと思ふ。

『新著百種』の第二卷は饗庭氏の『掘り出し物』であり、第三卷が巖谷氏のものであり、廣津柳浪氏の『殘菊』はそれから少し後になつて出たと思ふ。これは肺病の女か何かを取扱つた極くデミな小説であつたと記憶するが、柳浪氏の文壇への出現は大凡此の作の發刊からと見ても宜しいであらう。岡田虛心亭(朝太郎)氏のももそのうちの一卷として出たのであるが、今はその内容は勿論、表題までも憶ひ出し得ない。



『新著百種』は四六判の、色刷りの紙表紙二百頁かそこらの小さい本であつた。『むら竹』も同じ型であつたが、『むら竹』の方が先きであつたやうに今は記憶して居る。その時分には、さういふ型のものが新小説界では稍流行を始めた傾きでもあつたのだ。

## 八

少し話が後戻りする嫌ひはあるかも知れぬが、明治二十五、六年頃から以後の文壇の新潮流を語らんが爲めには、こゝで是非とも言及して置かなければならぬ出版界の現象がある。

明治十四、五年から始まつた翻刻のことは前に挙げたのだが、明治二十一、二年頃からもまた盛に翻刻が行はれた。前の時代の翻刻は、文學の方面で云へば、主として、文化、文政頃の小説であつて、先づ民衆に娯樂的讀物を供するといふだけ位の目的を以つてしたに過ぎなかつたのだが、後の時代の翻刻は、出版者が讀書

界の進歩に着眼して、謂はゞ日本文學の研究資料となり得るやうなものを供給するといふやうな意味があつたと見做して宜しいと思ふ。固より、なかには稍や稀觀書になつて居るものを翻刻してみるといふやうな考の出版者のあつたことはいふまでもないことではあるが。

それらの有意義な翻刻のなかで、吾々の今も尙記憶して居るものゝうち、第一に擧ぐべきは、神田宮本町の武藏屋といふ小さい本屋から出た近松門左衛門の丸本であるが、これは四六版で大抵一篇が一冊になつて居るのであつたから、極く薄いパンフレットであつた。大近松のものゝみならず『大塔宮曦鏡』とか、『心中二河白道』とか、『末廣十二段』といふやうな出雲、海音の曲も二三篇出た。西鶴ものゝ翻刻も武藏屋が一番早かつたと思ふ。『五人女』と『一代男』が小冊型で出た。挿畫はなかつた。

『一代女』は大阪の本屋から出た。其所からは『西鶴置きみやげ』の外に、『古著百種』の表題で、其積の『傾城曲三味線』、『傾城禁短氣』その他の收められたもの



が刊行された。これは、四六版假り綴ぢの本であつたが、表紙にも何か模様のやうなものがあり、なかには原畫が複刻してあつた。『文反古』も、少しも飾りのない四六版の本で出たが、今出版者を記憶してゐない。春陽堂からは、紅葉の校訂で『本朝若風俗』（男色大鑑）が出た。無論、四六版の假綴ぢの本であつたが、印刷、校正の具合など可なり丁寧なものであつた。

當時文學青年であつた吾々はさういふ翻刻を通して、所謂元祿文學に接したのであつた。

尤も、熱心な人々は、もう既に原本の蒐集を始めてゐた。物價の安い時分であつたので、今日數百圓を以つてせずば何うしても手に入らないやうなものが、五圓足らずで大威張りで買へたのであつた。現に西鶴の好色本が一部（六冊もの）が五圓だといふのであつたが、その時分にはその五圓が吾々には可なりな金高であつたので、買ひ兼ねたのであつた。今日になつては全く夢のやうな話ではないか。

それでも、島崎藤村君などは、原本を買ひ集めてゐたやうであつた。薬研堀あた

り、あれはもう濱町何丁目かになるのであらうが、小柄なコチ／＼と瘦せた爺さんの京屋常七（京常）といふ店主の小さい和本屋があつたが、島崎君はそこから古い和書をよく買つたやうであつた。

島崎君から『武家義理物語』の一冊缺けた本を貰つて、今尙保存してゐるが、この本も右の濱町の京常爺さんのうちから出たものではないかと思ふ。

僕自身もその店で、丸本を少し買つたことを覚えてゐる。

日本の古典の翻譯が安い叢書になつて出始めたのも、矢張り明治二十一、二年頃からだと思ふ。博文館から出た『日本文學全書』『續日本文學全書』『日本歌學全書』『續日本歌學全書』——前二者は落合直文、小中村（池邊）義象二氏校訂、後二者は佐々木信綱氏校訂で、各四六版の十二冊から成つてゐた——は當時の讀書界に取つては、極めて便利なものであつた。

大阪からであつたと思ふのだが、『湖月抄』——これは二三他の註釋書の加はつたものであつたやうだ——が四六版の五六冊本で出た。



『萬葉集略解』——これは菊版——が翻刻されたのも、大凡同じ頃であつたらう。  
『百家説林』(正續)——菊版で——十二冊が吉川書房から出、『温知叢書』——四六  
版で十二冊が博文館から出たのは、それより幾らか後になつてである。

俳書の翻刻も幾つか出た。これは四六版で無論洋紙に刷つたものではあつたが、  
大抵和書の體裁を模したものであつた。『芭蕉一代集』『俳諧七部集』はまだそれ程  
和書型ではなかつたが、『本朝風俗文選』、『俳諧寂楽』、『鶉衣』、『俳諧畸人傳』な  
どは、更紗の帙に入つて居た。

念の爲めに、記して置くが、明治十四、五年の徳川文學の翻刻は大抵日本紙であ  
つたのだが——當時の文學的新刊書が大抵日本紙刷りであつたと共に——こゝに云  
ふ明治二十一、二年頃以後の一般書籍は洋紙刷りになつてしまつたのであるから、  
以上に擧げた翻刻書は皆洋紙刷りであつた。此の時代では、餘程特殊な書籍でなく  
ば日本紙には刷らなくなつてゐた。又之を装釘の方から云つても、前代の文學書の  
表紙に彩色畫を用ゐるといふやうなことはなくなつて、精々のところで、模様を描

いた表紙を用ゐる位になつてゐた。尙、さういふ風な装釘に進歩を來した結  
果、クロッスの使用が廣くなり、念の入つた装釘の書にあつては、前代よりはズツ  
と良質のクロッスが用ゐらるゝと共に、小説書の口繪——これのみは日本紙刷り——  
に刷り彩色に手數の加はつたものが附けられるやうになつた。尤もさういふ美裝  
小説は大抵春陽堂から出版されたのであつた。本文のなかの挿繪はさういふ謂はゞ  
高級出版物では最早廢されてゐた。要するに、本文のなかへ幾つも挿繪を入れる代  
りに、口繪に念を入れるといふ譯になつたのだ。

序に記して置くが、春陽堂からは、紅葉の『此のぬし』篁村の『勝鬨』などを收  
めた木版刷りの日本紙の叢書、それから紅葉の『七十二文生命の安賣り』ロビョウ緑雨の『か  
くれんぼ』などを收めたもう少し薄い叢書——これも日本紙の木版刷りが出た。

## 九

讀賣新聞が改進黨の機關紙となつた關係上、たかたさ高田早苗氏なえが同新聞の幹部になつた



爲めであらうと思はれるのだが、同新聞が文學に重きを置くことになり、坪内氏先づ一臂の力を貸し、次いで大學出身者であつた紅葉を社員として聘したので、硯友社の人々が自然讀賣新聞に據ることになつたのは、明治二十三年頃のことであつたらうと思ふ。

因みにいふ。尾崎紅葉、川上眉山、石橋思案（當時は思案外史と署してゐた）の三氏は、硯友社創立の當時は大學豫備門在學であつたのだが、石橋氏は退學し、尾崎、川上の二氏は大學の法科に進んでから、やがて文科（國文科？）へ轉じたのだが、直きに退學してしまつたと聞いてゐる。當時の文學者では、内田不知庵氏と石橋忍月氏とが豫備門に學んだ人であらうと思ふ。内田氏は途中で退學したが、忍月氏は法科に進んで卒業した。山田美妙齋も豫備門にゐたのではなからうかと思ふのだが、これは確には知らない。漣山人（巖谷小波）氏は獨逸協會の出身だと聞いてゐる。

硯友社の諸氏が文壇に於て十分に地歩を占めると共に、その作物發表の壇上としては讀賣新聞を有し、出版書肆としては、春陽堂をその藥籠中に收めるといふ勢に

なつて來たのであるから、前日の如く『我樂多文庫』その他のやうな意味の機關雜誌の必要はなくなつたのではあらうが、尙硯友社の風を望んでその傘下に集り來たらんとする後進の爲めとでもいふのでもあつたらうか、一、二の小雜誌が發行された。その一つは『千紫萬紅』といふので、會員組織といふやうな風になつてゐたので、僕は或る日、金富町の石橋思案氏を訪ふて、入會の申し込みをしたことがある。何でも三ヶ月か、六ヶ月分かの雜誌代を持つて行つたと思ふ。誰だか先客が座に在つたやうに思ふのだが、石橋氏から、

『何かお出來ですか』

と云はれたことだけは覚えてゐるが、何んな話をしたのだから、何ういふ風にして、別れたのだから、その邊の記憶になると唯座敷から瞰下する町の眺めのよかつたことの外には何も彼も全く夢のやうに朧氣である。多分さしたる事は語り得ず、又問ひも得せず引きさがつたに違ひなからう。

尾崎氏との初對面の方はそれよりはズツと明に記憶してゐる。



時は明治二十四年の八月上旬、場所は相州の酒匂さかまの松濤園しょうたうえんに於てゝあつた。

親類の者が病氣であつたので、その附添ひに行つて松濤園の離れの二階に泊つてゐた僕は、病人が晝寢のひまに、ゾラの『ナナ』の英譯を持つて、松濤園の母屋の庭の松の根方に腰をかけて、頁をめくり出したが、一寸ちよつと一間位離れたところに二十六七位に見える、眼の鋭い、如何にもキリ、と引き締まつた顔だちの若い男が、跣はだかがんで砂を握つては指の間から滾ころぼし、又握つては滾ころしゝて、如何にも無聊らしい風で居る。着てゐるのは宿の借し浴衣か何かで、別段注意を引くやうなものではなかつたが、締めてゐたし、ごきは當時の僕のやうな全くの書生には、一寸眼につくものであつた。濃い納戸色か何かの豆絞りであつたが、何うも縮緬ちぢみではなく、羽二重のやうなものではなかつたかと思ふ。

『ゾラをお読みですか？』

と先きから言葉をかけられたので、

『えゝ、面白いものだと聞きましたもんですから、友達四人程で云ひ合せて「ナナ」

を四冊取つて読むことにしたんですが、私は今それを読み始めたところです』  
と、答へると、

『それは惜しいことでしたな、同じものをお買ひなさらずとも、皆さんがちがつたものを一冊づゝお取りなすつて、交換してお読みなすつたら、よかつたでせうに』  
と、いふやうな意味のことを云つてから、ゾラの作物の話をいろ／＼してくれだ。坪内氏からもゾラの諸作物の話を聞いたのだが、何とかいふ作は斯ういふのださうで、又何とかいふ作は母子の不倫の戀を取り扱つたものだといふやうな話であつたと記憶する。

話の様子で考へると、その人は文學の知識を可なり豊富に持つて居るらしいのであつたが、何ういふ人であるのか、まだ一寸と見當がつかかなかつた——當時はまだ新聞は勿論のこと、雑誌にも文學者の肖像などの出ることはなかつたのだ。

勿論、話はおもに先きからのみ語り續けられるのであるが、それでも、何となく親しみは加はつて行くやうな感は増して行くので、それが如何なる人であるか、此



方から聞くか先方から名乗るかしなければならぬやうに、だんぐなつて行くのであつた。

此方からも『貴下はどなたですか』とブツキラボウに聞くのも、何だか我殺なやうな気がしたし先きも又、『實は私はいふ者だ』とちかづけに名乗るのも何だか不遜のやうな感じを起すかもしれぬといふやうな遠慮もあつたものか、自分の身の上を暗示するやうなことはなかく、云はなかつた。さうなつて來ると、此ちらからは少しづつ話を進めて、先きの身分を言ひ當てる範圍を次第に縮少して行つて、『あなた誰それ君でせう』と云ひ得るやうな點に達することに骨折り、先きは先きで、又少しづつ此方からさう云ひ得る點に達するのに便利な材料をそろ／＼と供給しなければならぬやうになつて行くのであつた。

文壇の話が始まつた序に、僕は『千紫萬紅』のことで石橋氏を訪うたことを話した。けれども、それは話の始まつたすつと始めの時なので、その時はまだ先きを誰だとも少しも見當のつかなくあつた時であつたと思ふ。

そのうちに或る新聞から頼まれて、奥州の方へ或る史實を調べに行つたが、その史實に就ての重野（安釋）さんの意見はかう／＼であつたといふやうなことを、先きから話した。

『では讀賣に御關係ですか』

と僕がいふと、先きは

『えゝ、さうです』

と、答へた。

もう大抵分つたやうな気がしたけれども、まだ何とも云はずにゐた。

やがて、話が西鶴の作品のことに轉じて、西鶴の好色本に淫畫の挿繪のあるものがあつた。それは可なり高價なものであるといふ話もしてくれた。それから、西鶴が作中の人物の肉交に至るまでの描寫の段取りともいふべきものゝ見事なのを激賞した末に、遂にかう云つた。

『西鶴の文中には師匠の西山宗因にしやまそういんの俳句が大分使つてあります。私が或る本屋から



頼まれて「男色大鑑」の校訂をやつた時にも、方々に宗因の句が使ひ込まれてゐるのに氣がついたので、註でも入れて置かうかと思つたのですが、私の氣の着かぬのが若しあつては、それもせんのないことだと思つたんでやめました』

其所で、僕は笑ひながら、

『あなたは尾崎さんですね』

と云ふと、先きでも、

『え、さやうです』

と、云つて、快く笑ひ出した。やつと、それで双方とも重荷をおろしたやうに感じたのだ。

その晩、尾崎氏の部屋——母屋の二階の一室——を訪うて、雑談をしたが、尾崎氏はサイフホンのラムネを飲みながら、僕の質疑に答へてくれた。正直正太夫の名で、短文の諷刺を讀賣へ書いてゐた齋藤のことを聞いてみたのだが、

『あれは唯あゝいふ皮肉なことを書くだけの男で、何でもありません』

といふやうな答へであつた。緑雨がまだ眞伎倆を發揮しない時分のことであつたので、此の評はさして無理ではなかつたであらう。

その外の話では、越路こしぢと綾瀬あやせとの優劣論とでもいふやうなことを一寸やつたことを覚えてゐる。尾崎氏は、ひどく綾瀬を擧げたが、僕は承服しなかつた。

翌朝になると、病人に附いて箱根へ行くことになつたので、出發の挨拶に來た女中頭のやうな女に、

『母屋の二階のお客さんに宜しく云つてください』

と頼むと、その女中頭が、

『彼の方は一體何ですね』

と云ふので、僕は唯、

『新聞に關係のあるエライ人なんだ』

と、云つて置いた。

僕は八月末に東京へ歸つて來ると、職業をさがすのに忙殺され、それからその年



の十二月に、高知の私立の英語学校の教師の口を得て、土佐へ行つたので、尾崎氏を訪ふ機会がなかった。

## 一〇

時代は大方飛ぶことになるけれども、序だから、尾崎氏に關する話だけを此所で書き終はつて置かう。

僕はもう一遍尾崎氏に逢つたことがある。

明治二十九年の一月であつたが、川上眉山君のその頃住まつてゐた小石川の上富坂町の家へたづねて行つて、訪なうと、内で、『來た、來た』

と、云つて二三人の笑ひ聲がする。座敷へ通ると、尾崎氏が年始廻りらしい袴羽織の出で立ちで、戸川秋骨、平田秃木など、笑ひ話の最中であつた。

松濤園では何か事件があつたことは、兼ねて大體川上氏から聞いてゐたのだが、もつとくわしく尾崎氏の口づから聞いてみたかつたので、その話を持ちだすと、

『イヤ、あの時は大しくじりさ』

と、尾崎氏は軽く笑つて、それから、翌朝になつてみると、財布が紛失してゐる。隣の部屋に何うも怪しげな者が泊つてゐたのだが、そのことを尋ねると、もうとつくに立つてしまつたといふ。實は讀賣新聞のかういふ者だが、勘定は東京へ歸つて送くるまで待つて貰ひ度いと云つたが、宿では承諾しない、それでは昨夜來たむかふの離れの客が、私の身分を知つてゐる筈なんだから、あの人の證明を得て呉れと云つたところが、あのお客はもう立つてしまつて居ないといふ、それで何うにもしやうがないので、持つてゐた時計をかたに置いて、宿を出た。といふ話をして、

『イヤ、その宿を出て來る時なんぞは騙りの面をよく見てやれといはんばかりの風で、家ぢう帳場まで出て來ましたね』

と、云ふ。

『それでね、あんまり癪に觸はつたので紀行を書いて、あの宿屋をこッぴどく退治



てやらうと思つたんだが、後でこつちの身分を誰れかに聞きでもしたものと見えて、むすこが菓子折を持つてあやまりに來ました』

と、話を結んだ。

それから、讀賣新聞社の關如來君が折角自分の好みを盡くした正月着が出來後れたので、社の二階か何かに引つ込んで何處へも出ずに居たのだが、着物が出來てくると、早速まんべんなく年始廻りを始めたといふ話をし、

『着物が出來たら、やつさぞ方々廻るだらうと思つてゐたところが、果せるかな、知り合ひを一軒残らず廻はつてゐる』

といふ口調で、一座を笑はした。

そのうちに、戸川氏が揮毫を頼んでゐたと見えて、

『僕に書けといふのは何ですか』

と云つて、戸川氏が『マアロオ詩集』——昔の版のマアメド叢書の分——を出して、これへ願ひますといふと、

『よし、早速書かう』

と、如何にも勢好く早口に云つて、焦茶色のズツクの革靴のなかゝら、簾卷の筆と銅の墨池を出して、詩集の見返しへ、

『お目出たいものを書きますぜ』

と、云ふが早いか、直ぐすらくくと、如何にも達筆に書いて、戸川氏の前へ詩集を軽く突きやつて『狼の人喰ひし野も若菜かな』

と、讀んで聞かした。

適勁と優美を兼ね具へたクリストファー・マアロオの詩集の見返しに書いたものとしては、如何にも適切な句だと云つて、戸川氏はひどく喜んだ。

僕は此の時きり尾崎氏に逢ふ機會がなかつた。

右のマアロオ詩集は、平田氏の手もとへ行つてゐて、明治三十一、二年頃、神田明神裏の平田氏の下宿が火事に逢つたのでその時焼けてしまつたとか聞いてゐる。

此所まで書いて來ると、『新著百種』のなかに幸田露伴氏の出世作と云つて宜し



い『風流佛』が入つてゐたことを書き漏らしたことに気がついた。當時の讀書界は露伴氏のあの作をあの叢書の光りと見なしたのであつた。

博文館から『日本之文華』といふ菊判の雑誌が出たのは、矢張明治廿一、二年頃だらうと思うのだが、露伴氏の『縁外縁』が載つたのはその紙上であつた。その作は後で『對鬪體』と改題されたのだと思ふ。『五重塔』はもう少し後になつての作であらう。露伴氏は新聞『國會』の社員になつたやうに聞いてゐる。

## 一一

明治二十五、六年頃の文壇は勿論小説が中心であつて、その小説壇の中堅となれるものは硯友社の諸氏であつたのだが、客觀主義に基いて作くらるゝ紅葉氏の小説にあきたらずして、もう少し主觀を以つて讀者に臨み得る文學の他の形式はなからうかといふ風な考を持つた文學青年がだん／＼出來だしたと共に、文學者の評傳とか、作品の批評とか思潮に對する評論などをもとむる氣運が讀書界に生じて來た。

『早稻田文學』創刊の當時に於て、坪内氏が唱へた『沒理想主義』、それに對して森鷗外氏が『しがらみ草紙』に於てなしたる駁論、さういふ論争は評論界に非常な活氣を吹き込む効果のあつたものである。坪内氏の『沒理想論』は勸懲主義排斥といふ位の意味のものであつたので、議論の陣立が十分でなかつた爲めに、森氏との取り組みではとかく受太刀の觀なくばあらずであつた。その他森氏が『しがらみ草紙』に據てなしたる諸種の美學的論議は、當時の文壇に取つて多大の刺戟と指導になつたことは疑ひなきところである。

所謂新體詩即ち新邦詩の曉明期も此の時分であつたと見て宜しからう。

中西梅花道人なかにしばいけくわだうじんは専門の新詩人であつたが、専門でない人々の間にも、新詩に對する努力が致され始め、山田美妙齋氏の如き、前記の『おも影』に執筆した諸氏の如き、十分尊重すべき態度を示してゐた。

北村透谷きたむらとらこく氏の劇詩ともいふべき『蓬萊曲』といふ長篇が刊行されたのは、明治二十五年頃であつたであらう。



第一に擧ぐべきは、前に云つた硯友社の一團、次ぎは、早稻田文學の一團、それから、春陽堂の『新小説』を機關誌としてゐた森田、饗庭、條野氏などの一團、新聞派ともいふべき半井桃水、右田寅彦、村井弦齋、村上浪六、遅塚麗水などの諸氏、遊星とみるべき内田魯庵、幸田露伴、山田美妙齋、齋藤綠雨——もうその時分には、綠雨の『かくれんぼ』も『油地獄』も出てゐたと思ふ——長谷川二葉亭、嵯峨の家おむろの諸氏、森鷗外氏の『しがらみ草紙』の一團、それから最後には、民友社の『國民之友』の文學的色彩が濃くなつて其所に集まつた山路愛山、人見一太郎、塚越停春樓などの評論家諸氏の一團、先づ大凡さういふ風に分れて居つたと思ふ。

所で、當時の思想界ではまだ基督教界の人々が新思想家であつたのだから、准基督教文士と云つて宜しかつた徳富蘇峯氏の傘下に集まつた山路氏等の意氣はなかなか盛なるものであつたが、當時の基督教界での花形の觀のあつた巖本善治氏は明治女學校を經營する傍、『女學雜誌』を發行してゐて、巖本氏はその雜誌を以つて、『國民之友』に並んで、基督教界の思想兼文學雜誌にまで發達させよう——『國民

之友』よりももつと深みのある、もつと情味のある雜誌にしよう——といふ考があつたのだらうと思はれるのだが、明治二十四、五年頃から、基督教に關係ある若い人々を明治女學校の教師として迎へ、傍ら『女學雜誌』への執筆を獎勵するやうにしたのであつた。

『文學界』の同人のなかでは、星野天知氏が一番早く明治女學校へ迎へられたのはなからうかと思ふ。島崎藤村氏は巖本氏には少し前から接近して居つたやうであるが、明治二十四年の秋頃から『女學雜誌』に執筆し——僕の記憶してゐるのは、アデイソンの『ヴィジョン・オブ・マアザ』の譯と、セキスピアの『ヴィーナス・アンド・アドオニス』を近松振りの淨瑠璃體に譯したるものであつたが——て居るうちに、明治女學校で教鞭を執ることになつた。所で、島崎氏が二十五年の秋になつて、教師を辭したあとへ、北村透谷氏が入り、二十六年になつて北村氏が退いてから、戸川秋骨氏がその後を襲つたとしてもいふ順序かと思ふ。

それはとにかく、二十五年になつては『國民之友』の純文藝に對する態度が極ま



つた——鷗外氏の創作小説『舞姫』が『國民之友』で發表されたのはその少し前であつた位で、夏期附録と云つて當時の一流の文人の作を三四篇程集めて載せることはまだ始めてゐなかつたかも知れぬが、何れにしても、純文學を誌面へ取り入れる意向は顯著になつてゐた——のであるから、それに對抗の意味もあつたのであらうが、『女學雜誌』でも文藝欄を豊富にしたし、それが次第に進んで、星野、島崎、戸川、平田の諸氏に戸川殘花氏（がはざんくわ）を加はへて、一大活動をしやうといふことになり、矢張り『女學雜誌』の一部をその機關に使うといふ議に始まつて、中頃から別に新たな雜誌を女學雜誌社から出す方がよからうといふ議になり、最後にはとうとう社名も別にして、發行所をも外に設けることに決してしまつたのだと聞いてゐる。

『文學界』創立の諸氏は、みな一度は基督教信徒であつたのだが、文學をやり出してからは、基督教の信條とか、基督教の道德觀などの範疇外へ、思想がだん／＼踏みだして行つて、殘花氏を除いた他の諸氏の書いたものは、『女學雜誌』に載つたものでさへ、既に巖本氏が基督教界の名士である立場からいふと、極めて迷惑なものがあつたらしいので、新たな雜誌發行の時分になつては、尙一層累を巖本氏に及ぼす虞が深くなつたらしかつた。さればと云つて、巖本氏に遠慮して、おだやかなもののみを書いてゐるといふ氣分などには到底なれようはなかつたので、一同『女學雜誌』とは袂別して、『文學界』といふ雜誌を發行することになり、出資と經營とには、星野天知、星野夕影（男三郎）の兩氏が當ることに決したのは、二十五年の末頃であつたらうと思ふ。

雜誌『文學界』の初號が出たのは、明治二十六年の一月の末だと思ふのだが、人の重なる人々は、この結社は、單なる文藝の創作を目的とするのではなくして、文藝をとほして、精神界への突入、物に生きずして靈に生きる努力といふやうなことを主義とし、主張するものであるといふ意氣であつたやうに見える。

島崎藤村君は當時は古藤庵無聲（ことうあんむせい）といふ號であつたが、同君は不意に、同じ年の二月に、高知にゐた僕のところへたづねて來て、『文學界』發行の主旨や、藤村君自身（みづか）の藝術及び人生に對する態度を詳細に物語つてくれた。



露西亞の作家アレクサンドル・クウブリンの評傳を見るといふと、その小説のなかに、

『今日までに王國と王があつた。けれども彼等のものとして残つてゐる遺跡は唯沙漠の風のみである。多くの長い無殘な戦ひがあり、その終りには、將帥の名が星のやうに輝いた。けれども、時が彼等の記念をことごとくかき消してしまつたけれども葡萄園の哀れな娘と大なる王との戀は、決してかき消されずに、常に人間の心のうちに生きるであらう。何となれば、戀は眞正に美しくいからである。何となれば戀するところの有らゆる女は女王であるからである。何となれば、彼女は死よりも強いからである』

といふ言葉があるといふのだが、藤村君のその晩の言葉が餘程それに似たものであつたことを記憶する。

『文學界』の始めのうちは、島崎君は随分よく書いた。初號から二三號は確に續いた『秘曲琵琶法師』といふ詩——一行十七字のもの——から同じく劇詩の『茶のけ

むり』、『朱門のうれひ』、外に『かたつむり』、『馬上人生を懷ふ』、『刀工堀井胤吉』の如き散文といふ風に、驚くべき健筆であつた。

けれども論争家としては、北村透谷が最も世人の注目をひいた。山路愛山氏の『文學は人生に相渉るを要す』といふ、文學功利主義、物質主義の論議に對して、北村君が駁撃を加へた『人生に相渉るとは何の謂ぞ』いふ論文などは、今日これを見ても、唯少しく用語が古いと感ずるのみで、尙その力は少しも失つてゐないものであると思はざるを得ない。

愛山君が、文學は事業なり、何となれば、第一、爲すところあるが爲めなり、第二、世を益するが故なり、第三、人生に相渉るが故なりと云ひ、文章の事業たり得ざるものゝ條件を擧げて、第一空を撃つ劍の如きもの、第二、空の空なるもの華辭妙文の人生に相渉らざるものと云ひたるに對する駁論のうちに、北村君の次のやうな言がある。

『極めて拙劣なる生涯の中に尤も高大なる事業を含むことあり、極めて高大なる



事業の中に尤も拙劣なる生涯を抱くことあり。見るを得る外部は見るを得ざる内部を語り難し。盲目なる世眼を盲目なる儘に睨ましめて、眞摯なる靈劍を空際に撃つ雄士は、人間が感謝を拂はずして恩澤を蒙むる神の如し。天下斯の如き英雄あり。爲すところなくして終り、事業らしき事業を遺すことなくして去り、而して自ら能く甘じ自ら能く信じて、他界に遷るもの、吾人が最も能く同情を表せざるを得ざるところなり。

吾人は記憶す、人間は戦ふ爲めに生れたるを。戦ふは戦ふ爲め戦ふにあらずして、戦ふべきものあるが故に戦ふものなるを。戦ふに劍を以てするあり、筆を以てするあり。戦ふ時は必ず敵を認めて戦ふなり。筆を以てすると劍を以てすると戦ふに於ては相異るところなし。然れども敵とするものゝ種類によつて戦ふものゝ戦を異にするは其の當なり。戦ふものゝ、戦の異なるによつて勝利の趣も亦た異ならざるを得ず。戦士陣に臨みて敵に勝ち、凱歌を唱へて家に歸る時、朋友は祝して勝利と云ひ、批評家は評して事業と云ふ。事業は尊ぶべし、勝利は尊ぶべし。

然れども高大なる戦士は斯の如く勝利を携へて歸らざることあり。彼の一生は勝利を目的として戦はず、別に大に企圖するところあり。空を撃ち虚を狙ひ、空の空なる事業をなして、戦争の中途に何れへか去ることを常とするものあるなり。

斯の如き戦は、文士の好んで戦ふところのものなり。斯の如き文士は斯の如き戦ひに運命を委ねてあるなり。文士の前にある戦場は、一局部の原野にあらず、廣大なる原野なり。彼は事業を齎し歸らんとして戦場に赴かず、必死を期し原頭の露となるを覺悟して家を出づるなり。斯の如き戦場に出て、斯の如き戦争をなすは文士をして兵馬の英雄に異ならしむる所以にして、事業の結果に於て大に相異なりたる現象を表はすも之を以てなり。』

所で、此の一節は、今にして思へば、透谷君自身の數奇な生涯を説明したものゝやうになつてしまつたので、今日これを讀んでは感慨いとゞ深きものがある。明治二十六、七年頃は、まだ出版界も讀書界も極めて狭いものであつて、新文學の使徒が唯一枝の筆のみで生活しようといふには、實に困難な時代であつた。妻あり、子



ありといふ透谷君の生活上の苦心は察するに餘りがある。北村君は、外には思想の爲めに戦ひ、内にあつても生活の爲めに戦はなければならなかつたのであらう。僕は北村君の夭折をば、北村君のさういふ苦しい戦ひの爲めの疲憊の結果と思はざるを得ない。

## 一二

平田秃木君は『文學界』での花形の一人であつた。藝術の技巧の微細な點にまで感觸が及ぶのであつた。鋭敏な感覺の持主であつた秃木君の、當時の文壇の諸作品に對する批評は、文界の注意をひくことが少くなかつた。『西洋料理と日本料理とを一緒に食つてヘドを吐いたやうなものだ』と云つた尾崎紅葉氏の評は『文學界』全體にあてたものだから、秃木君の評論をさして云つたものだから、今は記憶しないが、『三人妻』か『隣の女』であつたか、何か新刊を評してくれといふ手紙をわざ／＼秃木君のところへよこしたことがあつた。

柿色の太い線で縁を取つた大きい封筒——確に半紙の幅より少し長い位の豎で、横幅も四寸位はあつたらうと思ふ——であつたのだが、あとになつて、その話を川上眉山君にしたら、尾崎氏は原稿を豎に折つたのみで封じることが出来るやうにといふので、そんな大型の封筒をこしらへたといふのであつた。

硯友社の人々は、皆並みの半紙の下へ野を引いた紙を入れて書くのであつて、野線のある原稿紙は用ゐなかつた。勿論、原稿紙は一般に半紙若くは唐紙に野線を印刷したものであつたのだから、皆毛筆で書いたことはいふまでもないであらう。

樋口一葉君が『文學界』に作を載せ始めたのは、二十六年の二月の『雪の日』からであつた。一葉君の處女作は二十五年の春に、半井桃水氏主宰の雑誌『武藏野』に載つたといふのだが、僕の見たい一葉君の作は、二十五年の秋頃に『都の花』に出たと思ふ『埋れ木』であつた。その次ぎが同じ雑誌に出た『曉月夜』であつた。

『雪の日』も、その後で出た『琴の音』もさして、文壇の注目に値する程のものではなかつたのだが、二十七年になつてから『文學界』へ載り始めた『やみ夜』か



らは、一葉君の筆が可なりに自在に動き始めた。『花ごもり』にも、後の名作の光となつたやうな鋭い筆つきがところ／＼見えだして來てゐたのだが、その作風の大體が本當にきまつたのは、二十七年の暮に出た『大つごもり』からである。

二十六年の夏から翌二十七年の春位までは、一葉君の大音寺前時代であつたのだ。一葉君が菊坂町の家を捨て、一時下谷龍泉寺町へ移つて、荒物駄菓子といふやうな小あきなひを始めたのは、自分の文學的才能に對する信念が更にできて居なかつた爲めであることは明である。僅に二年後位にあれ程までに優れた賦才を發揮し得た一葉君にさへ、己れを信じ得なかつた時代が直ぐその前にあつたといふのは、餘程面白いことだと思ふ。一つは、文學が職業になし難い時代であつた爲めもあるには相違ないのだが、前代の人の方は概して、今の人々よりも、己れを信ずることが薄かつたやうでもあるのだ。一葉君の傑作『たけくらべ』は二十八年の春頃から『文學界』へ載り始めたのだが、廣くそれが世に知られて、鷗外、露伴氏等から激稱さるゝに至つたのは、二十九年になつて全部が一遍に『文藝俱樂部』に再掲され

てからであつた。勿論、それは、一葉君の『にごりえ』と『十三夜』が前の年の秋に同じ『文藝俱樂部』に載つてから後のことであつた。

## 一三

二十六年の八月頃になると、その年の始めに東京を出たきりで、近江に滞在してゐた島崎藤村君が東歸することになつたので、透谷、秋骨、禿木君などが、東海道吉原まで出迎へに行つた。藤村君の『春』が其所から筆を起してあることは、人の知るところであらう。

一行は元箱根の青木といふ宿屋まで來て、其所へ藤村、秋骨の二君だけが残つて、月末近くまで滞在してゐた。高知の學校をやめて歸つた僕が兩君をたづねて行つたのは、その月の十日頃であつたらうかと思ふ。

兩君とも學校時代は極く眞面目であつて、うっかり女の話などをしやうものなら、顔をしかめられさうに思へた位であつたが、しばらく振りで元箱根で逢つてみると



いふと、さすがに猥談をするまでにはなつてゐなかつたけれども、平氣で『艶福』などといふやうな言葉を口にするまでに、兩君ともさばけてゐたので、一寸勝手がかはつて少し睦若たらざるを得なかつた。

『文學界』へ僕の作を載せて貰つたのは、二十六年の十一月號からで、それは『酒匂川』といふ極めて幼稚な長詩であつた。その次ぎには、『想海漫涉』といふ論文と感想文との合ひの子のやうなものを載せて貰らひ、翌年の一月號位には『片羽のをし』といふ小説めいたもの、續いて『流水日記』といふこれも先づ小説といふよりほかなかりさうなものといふ風に、續々拙劣を極めたものを載せて貰らつた。

けれども、二十六、七、八の三年間位は誰も彼れも、文壇へ足を踏み込んだ當座であつたので、とにかく熱心だけは十分にあつたのだ。不才僕の如きさへとにかく熱の籠つたものだけは書き得たのだ。その時分の作物を今日若し眼先きへ突きつけられたら、全體としてのその拙劣さに冷汗背をうるほすことになることは必せりだと思ふけれども部分的に云へば、今日ではとても書けぬやうなところが一二ヶ所位はどうもありさうな氣がするのだ。

まして、他の才分多き人々の當時の作などのうちには、沿革的の資料としては勿論のこと、作そのものゝ價值から云つても、保存に堪ゆるものが少くなからうと思ふ。全集のなかへも何も入らずじまひになるのは、如何にも惜しいと思ふのだ。

支那との戦争の後を受けた二十八年頃からは、文壇の勢がますます盛になつた、とにかく出版界だけでも、活氣を帯びて來た。

博文館が、『文藝俱樂部』と『太陽』を出し始めたのは、その頃からであつたであらう。前者の卷頭には、川上眉山君の『大盃』が乗り、後者の小説は紅葉氏の名で『取り梶』が出た。これは既に『豫備兵』と『義血俠血』の作者として、批評家の注目をひいてゐた泉鏡花君の作だと消息通人間には認められてゐた。

その前から『文學界』に加はつた上田敏君が、文科の選科へ入學した戸川秋骨と共に、大學の若い文士の間に勢力を持ちだしたのもこの頃からであつた。

もうその頃には、正岡子規氏の俳諧の結社ができてゐたらうと思ふ。その社中に



加はつた大野酒竹氏は、秋骨君の従弟であつたといふ關係で、『文學界』の同人のやうにもなつてゐたのであつた。

尾崎紅葉氏は『三人妻』の長篇から、『心の闇』、『隣の女』といふ風に續々尊重すべき作品を公にして、當時の大家たる實力を十分に示してゐた。

露伴氏の『新葉末集』は何うであつたか今一寸確言し得ないが、とにかく、氏の文壇の重鎮たる位地も動かしがたくなつてゐた。

森氏の『めざまし草』に集まつた人々は、露伴、綠雨、篁村の諸氏であつたのだが、何にしろ、當時は既に坪内氏と共に文壇の元老格の位地を占めてゐた鷗外氏の威力は偉大なるものがあつた。

年月などの不正確であることや、前後したところなどもありさうなことなどは、残念であるが、本も何も殆ど見ずに唯思ひ出す儘を書いてみるといふ此の回顧記のことであるのだから、さういふ不正確な點もまた一興かと思ふのだ。

5288  
6  
460

## 明治時代の閨秀作家

上

明治文壇への女作家の出現は大凡何時時分であつたらうか、手許には今何等の書類もないのだから、何とも云ひやうはないのだが、無論男の作家の出現よりは少し遅いことは確であつて、何うしても二十二年位から後のことだとは云つてよからうと思はれる。

年代は勿論確ではないが、木村曙女史などが早い方ではなかつたらうか。此の人は木村莊太、同莊五、同莊八君などの姉さんのやうに聞いて居る。尾崎紅葉君の門



下ではなかつたらうかと思ふのだが、何ういふ作物があつたのか、今一向に記憶がない。唯讀賣新聞などでその人に關する消息を読んだことだけは、臆氣ながら覚えて居る。此の人は若くして死んだらしい。莊五君などは覚えて居らぬやうだ。

その次ぎには、田邊花圃女史即ち今の三宅龍子君の名を聞いた。同君の『蕪鶯』が坪内大人の推薦的序文つきで發售されたのは、これもはつきり何時だかは記憶に止まつて居らぬが、二十四年頃でもあつたらうかと思ふ。

その次ぎには、小金井きみ子、若松賤子——前者は故鷗外大人の令妹で、醫學博士小金井精良氏の夫人、後者は、當時基督教會の名士で教育家であつた巖本善治氏の夫人——の兩君ぐらゐるな順にならうかと思ふけれども、世間では此の兩君に就ては、明治二十八年秋の文藝俱樂部の『閨秀小説號』なるものが出るまでは、餘り多くは知らなかつたらうと思ふ。兩君のものは大抵翻譯物であつたやうに思ふ。何か創作があつたかも知れぬが、僕などの記憶には止まつてゐない。前者の筆になつたものは『しがらみ草紙』に現はれ、後者のものは『女學雜誌』に現はれたと思ふ。

田澤稻舟女史の名を吾々が聞いたのは何時頃であつたらうか。大抵明治二十六七年頃であらう。山田美妙齋氏に結婚しないうちに既に幾分の名聲はあつたのではなからうかと思ふ。前記の『閨秀小説號』であつたと思ふのだが、稻舟女史の『白薇薈』とか何とかいふ作が出てゐた。今はその梗概さへ記憶しないが、唯そのなかに、男が女に對して魔睡劑を用ゐる條下があつたので、女作家としては、可なり大膽なことを書いたものだといふので、當時の人々の噂に上ぼつたことだけは記憶してゐる。けれども、小説そのものは、當時の標準から見ても、餘り藝術的に完備したものではなかつたやうに覺えて居る。無論そんなにくわしい寫實的なものでもなかつた。

稻舟女史はもうその時は、美妙氏とは別れて居つたのではなからうかと思ふ。此の人は、秋田か何處かのお醫者の娘さんであつたといふ話であつた。自殺したのは、その『白薔薇』とか何とかいふ小説が出てから間もなくであつたらうと思ふ。

當時の世評では、美妙が稻舟女史との別れ方が無情であつたといふのであつて、



これが爲めに、美妙の人氣はすっかり落ちてしまった。大橋乙羽の話では、美妙齋のものを載せると承知しないぞといったやうな脅迫状が博文館あたりへは盛んに舞ひ込んだので、雑誌へ美妙氏のものを載せるわけにかなかつたといふのであつた。

當時の『早稲田文學』には——ほかの雑誌も無論さうであつたが——美妙の不徳なるものを大に攻撃した短評のやうなものが出た。平田秀木がそれに對して、『わけ知りの坪内さんもいらつしやることだし、さうまで美妙をやつつけなくてもよからうぢやないか』といふやうなことを『文學界』の月評欄へ書いたところが、早速翌月號で、『文學界のやつ等はけしからんことをいふ。あゝいふ不徳が見のがせるか。あれを何とも思はぬやうでは、文學界派の者どもの道念の存在が疑はしい』といった意味のお叱りを蒙つて、一同大に閉口した。

それから少しあとになつてからだと思ふのだが、川上眉山君から、山田氏のおつかさんといふのは、なか／＼行儀作法のことなどのやかましい人で、山田氏の朝寢などにも小言をいふのださうだといふ話を聞いた。山田氏と田澤女史との絶縁は實際已むを得なかつたのであらう。

僕等は事情を——唯世間話で聞いただけで——直接何も知らなかつたので、何もいへなかつただけであつたのだ。

北田薄氷女史の作も前記の『閨秀小説號』に出て居つたと思ふ。此の人は日本橋の辯護士北田正董氏の娘さんで、紅葉門下であつたと聞いて居つた。後に畫家梶田半古氏に嫁したのも、紅葉氏などの媒酌ではなかつたかと思ふ。

大塚楠緒子——文學博士大塚保治夫人——の作も何か『閨秀小説號』に出て居つたらうかと思ふ。此の人は明治女學校へ通つて、透谷、藤村、秋骨などの人々の講義を聞いたのではないかと思ふ。

北田女史は餘り作を遺さず天折したけれども、大塚女史の方は割合にあとまで生きて居つたためもあるのだらうが、可なりな量の作品を遺して居ると思ふ。大塚女史の逝いたのは、或は大正へ入つてからではなかつたらうが。明治四十一年の頃、一度夏目漱石君のところの新年會で見かけたことがある。



『閨秀小説號』では、若松賤子女史の『小公子』が大分評判であつた。小金井女史のものも可なり長い翻譯ものであつたやうに思ふ。

中

以上、まことに取り留めもない話で、こんなことなら、今日多念たんねんに當時の新聞、雑誌などを調らべられる人々の方が、よつほど確なことを書かれることゝ思ふのだが、僕としてはこんなこと位しきや知らないのだから、しかたがない。

樋口一葉女史以外の古い女作家のことで、僕の今端的に思ひ出せるものはこんなものであるのだが、一葉女史のことになれば、可なり詳細に書き得る。それは、女史はなか／＼くはしい日記を遺して居るのだから、女史のこと——殊に作家となつてからのこと——を書くには、あの日記を抜き書きさへすればいゝからなのだ。

此頃の何處かの雑誌に『文學人國記』といふやうなものが出て居つて、それには樋口一葉は甲州の人だと書いてあつた。けれども、樋口女史は明治五年に麴町區山

下町したまちで生れたのみならず、一度も甲州へは行つたことがなかつたらうと思はれる。

樋口女史の父母は甲州の鹽山みんざんから一里程山の方へ入つた大藤村おほふぢむらの人であつたが、侍になる積りで夫婦一緒に安政年間に江戸へ出て、お父さんの方は旗本菊池家、お母さんの方は同じく稲葉家へ奉公して、間もなく與力よりきの株を買つて、八丁堀衆に加はり、幕臣となり、維新後東京府の役人となつて、前記の山下町の官舎に居て、其所で一葉女史が生れたのだと聞いて居る。だから、齋藤綠雨が全集の巻頭に序したやうに一葉女史は東京の人なりと云ふ方が宜しからうと思ふ。昔は三代住まはなければ江戸ツ子ではないと云つたさうなんだが、東京になつてからは、二代位で東京ツ子でよからうではないか。

第一、『人國記』などゝ云つて、唯生れた場所ばかりで、同じ日本の人間を一様に分類することが何の意味があるのであらうか、現に僕などは土佐人といふことになつて居るのだが、土佐で生れたには相違ないにしても、土佐を出たのは十歳の時で、東京の生活の方は何うしても四十年以上になる。その四十年の方へは何等の考



慮も拂つてくれずに、十歳までしきや暮らして居らなかつた土地の方ばかりを重い關係に見られるのは、ヘンなものであると思ふ。さういふ例は外にも幾らもある。戸川秋骨君なども肥後人となつて居るのだが、これは、父祖からして定府じやうふで、唯維新後一寸藩地へ引き拂つて、其所で秋骨君が生れ、その後直きに東京へ定住してしまつたのだから、殆ど東京人と云つていゝ位である。

さて、話を戻して、一葉女史のことをいふことにするが、女史は若い時分に父を失ひ、兄を失つて、戸主になつた。それは女史の十八の時であるといふのだ。教育といふのは、それまでに、小學校——池いけの端はた仲なかつ町ちやう文ぶん海かい小學校——揚げ出しの筋向う位の池に面したところにあつた私立小學校であつたと思ふ——を先づ卒業したと云つて宜しいのであらう。

日記に據ると、明治十九年八月に、小石川安藤坂あんどうざかの歌人うた中島歌子なかじまうたの門に入つた。だから、一葉女史の教育は國文教育を受けたと云つていゝのである。今全集に入つてゐる女史の日記は、二十四年の四月十一日から始まつてゐる。さうすると、それ

は一葉女史の二十歳の時であるのだが、それにしては、雅語の驅使などいかにも自由で、可なりに馴れた文體である。教育の具合も無論ちがひはするが、今の二十歳位な女の人などにあれだけの文章——雅文——の書ける人は全く絶無であらう。當時でも何うであつたらうか。兎に角所謂眞の才媛であつたにちがひない。

それまでに、一葉女史は文化、文政からしての徳川期の和かい文學、當時の新聞、單行本などで小説といふやうな讀書は可なりやつて居たのであらう。

生活の爲めといふ意味もあり、また學問的の仕事に就くといふ意味もあつたであらうが、一葉女史はその時分から小説を書き習ひはじめようと思ひ立つた。野々宮きく子といふ友達が、半井桃水氏を知つて居つて、紹介してくれたので、一葉女史が四月十五日に始めて、桃水氏を芝南佐久間町の寓居に訪問して、入門したことは、日記にくわしく書いてある。その時は、女史は書いて持つて行つた小説一回分を批評を請ふため置いて來た。

同じ月の二十一日のところには、桃水氏に見て貰らうために、前の小説の續稿を



五回書いたとある。此の小説は今全集のなかに收められて居る題のない小説らしいのである。二十二日には、その小説を持つて半井氏のところへ行つたところが、半井氏から左の如く云はれたといふのだ——

『先の日の小説の一回新聞にのせんには少し長文なるが上に、餘り和文めかしき所多かり、今少し俗調にと教へ給ふ』

一葉女史の筆になれるものは、始の方のもの、即ち『おほつごもり』——二十七年十一月頃の作——以前のものは、小説でも隨筆でも皆此の和文めかしきところ即ち雅文調が勝つて居ることは人の知るところである。殊に、『曉月夜』、『五月雨』、『經机』といふやうな作は、著しく雅文脈のものである。日記でさへ、二十七年位までのところは、雅文調が強くなつて居るやうに思ふ。

四月二十五日には、桃水氏から小説のことで相談があるから、表神保町の俵屋といふ下宿屋へ来てくれといふ手紙が來たので、一葉女史は二十六日の午前に、震災前まで南明俱樂部のあつたところの裏あたりの下宿屋に桃水氏を訪問した。日記に

洽集館とあるのは、南明俱樂部になる前の勸工場である。後にその勸工場は焼けて、その跡へ南明俱樂部が建つたのだと思ふ。

五月十二日に桃水氏は麴町區平河町へ轉居したので、一葉女史は翌十三日に桃水氏を訪うて居る。

さういふ風にして、半井氏との交際が親密になつて、二十五年の二月四日には、雪の日に半井氏を平河町に訪うて、長く談話した。明治二十六年の一月頃になつて書いた『雪の日』——『文學界』所載——はその時の氣分を材にして書いたものらしく思はるゝ。

同じ月の十三、十四日のところには、一葉女史が小説を書いたことが出て居る。これは多分、女史の作ではじめて活版になつた『關櫻』のことであらう。

三月七日には、一葉女史は半井氏を訪問して、半井氏等の同人雑誌『武藏野』創刊の前景氣の話などを聞いてゐる。このあたりの記述の調子は今から見ると、如何にも古風で、當時の文學者——謂はば舊派の人々——の口調などがよく出てゐて、



甚だ面白いと思ふ。

一葉女史の日記の二十四、五年のところには、圖書館へ通つたことが度々出てゐる。その時分は上野より外に公開の圖書館はなかつた。一葉女史は圖書館へ通つて勉強してゐた。圖書館へ女はめつたに行かない時分であつた。

三月二十八日にも小説を書いてゐる。これは半井氏の紹介で、當時あつた『改進黨新聞』といふのへ出さうといふのであつたらしい。これは『玉だすき』で、淺香のぬま子といふ名で出たものださうだ。

六月頃になると、半井氏との交際に關し、知人間で飛んでもない噂が始まつたので、中島氏とも相談の上で、一葉女史は桃水氏との交際を斷つてしまつた。此の時分には、半井氏が左の如く云つて――

『君が小説のことよ、さまざまに案じもしつるが、到底繪入の新聞などには向き難くや侍らん、さるつてをやう／＼に見付けて、尾崎紅葉に君を引合せんとす、かれに依りて讀賣などにも筆とらなばとく多かるべし、又月々極めての収入なく

ば經濟のことなど心配多からんとて、是をもよく／＼計らはんとす……』

さういふ風に一葉女史を紅葉氏に紹介する筈になつてゐたのだが、右の絶交のため、一葉女史の方から紹介を斷はり、又外のつてからも尾崎氏へ行くのは、半井氏に對して義理が悪い譯であつたのだから、そのまゝになつてしまつて、一葉女史は紅葉氏には逢はずにしまつたのであるが、此の時尾崎氏に逢つて居つたならば、一葉女史はもつと早く文名が出たらうと思はれる。

### 下ノ一

更に又日記を参照すると、一葉女史は九月十五日に小説『うもれ木』を脱稿して、田邊龍子氏のもとまで持つて行つた。これは、龍子氏の紹介で小さい本にしようといふ積りで本町三丁目ほんちやうの金港堂へ送らうといふのであつた。此の小説は陶器畫工の妹を主人公にしたものであるのだが、日記の二十四年の九月分あたりのところを見ると、花瓶の圖様を書き留めたものがある。一葉女史の二番目の兄さん虎之助氏――



が陶器畫工であつたので、それから聞いて書きとめたものに違ひないと思ふのだが、『うもれ木』のなかにはその圖様及び焼きつけ方がすつかり使つてある。

同じ月の二十三日に甲州の『甲陽日報』といふのへ小説を書いてやることにしたといふ記入がある。脱稿したのは二十四日頃らしい。これは『經机』なのであらう。十月二日のところに左の如くある。

『田邊君よりはがき來る。うもれ木一と先都の花にのせ度よし金港堂より申來りたるよし、原稿料は一葉二十五錢とのこと、異存ありや否やとなり、直ちに承知の返事を出す』

日記には何も書いてないやうであるが、大凡十月ちう位に小説をもう一つ書いたらしく思はるゝ。これは二十六年になつて『都の花』に出た『曉月夜』である。

十月から暮へかけて、金のことでひどく頭を悩ませて、原稿料のとゞくのを鶴首して待つてゐる有りさまが、日記の諸所で窺はれる。殊に十二月二十七、八日あたりの、『曉月夜』の原稿料を受け取るあたりが甚だ面白い。其所の記述には後年の

『濁り江』の材料になつたかと思はれる一節がある。それは稻葉こう子の貧居を訪うた記述である。『濁り江』の源七佗住居のくだりと併せ讀むべきものであらう。

二十九、三十兩日は『必死と小説に従事す』とあり、二十六年の一月二十日のところには『小説雪の日したゝめ終る』とある。

一葉女史のその後の生活は所謂る生活難に對する悩みであつて、直接文學に關することは餘り日記には表はれ居らぬやうである。

二十六年七月になつてからは、一葉女史の一家は小あきなひを始めることに相談をきめて、十五日から家さがしをやりだした。方々見て廻はつた末に、十七日に至つて、大音寺前——下谷區龍泉寺町三百六十八番地といふのに家を見つけた。それは、日記によれば、間口二間、奥行六間ばかり造作はなかつたが、店は六疊で、五疊と三疊の座敷があり、敷金は三圓で、家賃は月壹圓五拾錢であつたといふのだが、今日の相場からいふと、全く嘘のやうな話である。場末であつたにしても、何しろ安いものであつたと云はなければなるまい。



樋口家の人々がその家へ引き移つたのは、同じ月の二十日である。龍泉寺町が吉原遊廓の裏手であることはこゝにいふまでもなからうと思うのだが、念の爲めにここに附記して置く。商なひでは荒物及び小兒のおもちや、駄菓子といふやうなものであつたので、一葉女史自身神田多町（たおやうと讀んで頂きたし）へ買ひ出しに行つた。

日記のこの邊の記述によると、當時の細民の生活状態、物價等の一斑が窺ひ得られて如何にも面白い。

樋口家の人々は二十七年四月一杯まで龍泉寺町に住まつてゐたのであるが、その時分の作物は二十六年十一月頃に出來た『琴の音』——『文學界』への寄稿——と二十七年の二月十八、十九日に四回分二十枚ばかり書いたといふ『花ごもり』——同上——だけであつたやうだ、尤も此の『花ごもり』の原稿は龍泉寺町に居る間書き續けたらしく思はれるのだが、それが何時のことだか、日記では分らない。

樋口家の人々の本郷丸山福山町四番地へ引き移つたのは、二十七年五月一日であ

つた。『家は本郷の丸山福山町とて、阿部邸の山にそひて、さゝやかなる池の上にてたたるがありけり、守喜もりきといひしうなぎやの離れ座敷なりしとて、さのみ古くもあらず、家賃は月三圓也、たかけれどもこゝとさだむ』とある。六疊二間に四疊半があつて、池があり、庭があつて、月三圓、それでも少し高いのであつたといふ時代なんだから、當時の物價の大體は窺ひ得られやうと思ふ。

此の家が一葉女史終焉の家である。しかし、家そのものは、明治四十三年の秋隣の山の崖が崩れてこわれてしまつたので、今は存在して居らぬ。

一葉女史が福山町へ越してから、最初に書いたのは、小説『やみ夜』らしい。これも『文學界』へ出たものであるが、書き始めは何時であつたのか、日記にはない。唯七月十九日のところに『小説やみ夜の續稿いまだまとまらず、編輯の期近づきぬれば心あわたゞし、此夜馬場孤蝶子のもとにふみつかはし、明日の編輯を明後日までにのばし給はらずやと頼む』とあるのみである。二十二日のところには『今朝やみ夜の續稿郵送』とある。



二十七年七月二十三日以後の日記がないのであるから、何時だか分らないが、とにかく十月頃に『おほつごもり』を書いたらしい。一葉女史の文體も考想もこの作で一轉機を來たし、要するに、驚くべきほどよくなつたのであるが、これは次第に筆が熟してさうなつて來たのが主因であるには違ひないのだが、一つは、その夏頃から一葉女史が西鶴の好色本などを可なり丁寧に讀み始めたことは、それ等の文體等の變化に餘程の影響のあつたことだと云つてもよからうと思ふ。

一葉女史の傑作『たけくらべ』が何時起稿されたものだが、日記が前記の通りなのだから、確なことは分らないのだが、二十七年の十一月か、十二月に起稿したには違ひないのだ。あの作は人の知る通り、材を大音寺前あたりの子どもの生活に取つたもので、吉原の裏手といふ極めて特殊な場所の人生を描寫した點に於て、記憶すべきものがあるのだが、あゝいふものを書いてみようといふ考は、大音寺前居住の時代にも起つたものとは推定し得られやうと思はるゝに拘らず、それに關することは日記のなかにもなければ何等の記録も樋口家には遺つて居ない。尤も、一葉

女史は作に關する思ひつきとか材料といふやうなものを手帳とか紙ぎれとかいふものに、心覺えに書きとめて置くといふのではなかつたやうであるのだから、『たけくらべ』に就ても日記のなかにそれに關して書いたところが以上、外に記録がないのは敢て怪しむに足らざることである。但し、『たけくらべ』のなかの或る章句などに就ては、その材料が大音寺前時代の日記のなかにあることは、誰でも氣づくことであらうと思ふ。

唯、あの作の始めの方の三枚ばかりのところの下書きが樋口家に遺つて居る。そのことに就ては、眞筆版『たけくらべ』の末の方へ僕が書いて置いたが、題は『雛鶏』といふやうになつて居つたかと思ふ。文章はあの作の始めとさう違つては居らぬ。

『たけくらべ』は『文學界』の一月號位から十月か、十一月號位までで完結したと思つて居る。『文藝俱樂部』へ出たのは、その翌年の一月頃である。



## 下ノ二

二十八年頃になつての一葉女史の作は『太陽』へ出た『ゆく雲』であるが、これに就ては日記のなかに何も記載はないけれども、三月頃に書いたものであらうと思ふ。

『濁り江』は同年の九月の『文藝俱樂部』へ出たのだが、日記六月十日のところに、『小説著作に従事す、全篇十五回七十五枚ばかりのものを作らんとす、いまだ筆おもふまゝに動かで……』とあるのだが、これが或は『濁り江』になつたのではなからうか。これは、福山町の一葉女史の住居の近邊は銘酒屋の巢窟であつたので、さういふ家に居た女の一人をモデルにして、あのあたりの人間の生活を描寫したものである。

その次ぎの作は『十三夜』で、これと『やみ夜』——此の方は二度の勤——とが、『文藝俱樂部』の『閨秀小説號』へ出たのであつた。その時には、既に『濁り江』で讀書界の注意を可なり喚起して居つたので、『十三夜』が出ると、一葉女史の名は可なり擧つたのだと思ふ。

二十八年ぢうでの作では、此の外に『軒もる月』——四月頃の作か——と『うつせみ』——八月頃の作か——とがあるのだが、『軒もる月』は、齋藤綠雨が讀賣に載せて居た『門三味線』を急に中止したので、一葉女史がそのあとを埋めるために大急ぎで徹夜で書いたものであつたと思ふ。『うつせみ』は、一葉女史の住居の隣りへ狂女が引越して來て、時々女史の家へなども飛び込んで來たさうであつたが、それからヒントを得て書いたものであつた。

一葉女史が博文館の通俗百科全書のなかの『女子書簡文』を書いたのは二十九年の始め頃であつたらうと思はるゝ。

日記の七月の十二日のところに『此ほど博文館の義捐小説中に隨筆やうのもの書けり、いとあわたゞしうてみぐるしかりしか』とあるのだが、此の隨筆やうのものといふのは、全集の隨筆中に入つて居る『ほとゝぎす』であらう。三陸地方に大海



嘯があつたので、その救恤のために、博文館が『文藝倶楽部』の義捐小説號なるものを出したのであつたやうに記憶して居る。同じ隨筆の『そゞろごと』は、二十八年の十月頃の作らしいのだが、これは『文學界』の連中で『うらわか草』とかいつた特別號のやうなものを出したので、それへ載つたのであつた。

書き洩らしたが、『われから』は二十八年の十二月頃の作らしいのだが、これは『文藝倶楽部』へ出た。あの作は、島田三郎氏の最初の夫人——その夫人とは一葉女史は中島歌子氏のところで同門であつた——のことからヒントを得たものであらうと思ふ。『わかれ道』も同じ頃の作である。これは翌年の『國民の友』へ出た。この作は『たけくらべ』と同じく材を大音寺前に得たものだと言ふ。傘屋の小僧はその當時實在してゐたといふ話である。

斯ういふ風で、二十九年へ入つてからは、一葉女史の筆を取つたのは、斷片の『うらむらさき』と、前記の『女子書簡文』だけであつたやうである。

その年の四月頃から、一葉の病が進みはじめて、八月になつてますます重くなり、遂に十一月二十三日になつて遠逝してしまつた。

丸山福山町へ引き移つてからの一葉女史の日記は『水の上日記』といふ名になつて居る。家の前も後も池であつたので、それが爲めに日記にさういふ名をつけたのであつた。この日記の二十七年の末あたりから終りへかけてが、實に面白い讀み物である。僕の見るところでは、あの部分には、一葉女史の勘違ひが随分多く表はれて居るやうであるのだが、人生記録としては、さういふところが非常に面白いと思ふ。終りの方の齋藤綠雨との交渉なども如何にも面白い。

綠雨も一葉の死後あの日記を見るまでは、一葉女史によつてあゝいふ風に綠雨自身書かれて居るやうとは思つて居らなかつたらしいのである。明治三十六年の秋頃、一葉女史のあの日記を公にしやうかといふ話が起つて、その時は、齋藤が鷗外氏に主として相談したのであつたが、その時嘗て『めざまし草』の連中へ一葉女史を加盟させようとする鷗外氏側の運動に對して綠雨がその裏へ廻つて一々ぶちこわして居る経緯が日記では餘りに明になつて居るので、日記を鷗外氏に見せるのは少しき



まりが悪ると、緑雨は苦笑して居た。

一葉女史の日記は、その後緑雨が預つて居つて、三十七年の三月、醫者から絶望状態であることを告げられると、僕を呼びに来て、僕が本所横綱ほんじよこたけの緑雨の寓居へ駆けつけると、緑雨は、自分の命が旦夕に迫つて居ることを告げてから、樋口家へ返して呉れと云つて、日記を僕に渡したのであつた。

一葉女史が死んでからは、もう既に四十年もたつて居る。緑雨が死んでからも三十年を少し越えて居る。考へてみれば可なり古いことだ。その後でも、文壇では可なり多くの人々が死んで居る。僕などは、平凡無能のお蔭か、はたまたその崇りか、何うにか今まで生き延びて來た。氣の利いた化物なら、もうとつくに引つ込む筈であるのだが、未だにまご／＼して居るなどは汗顔の外はないのだが、しかし、世のなか／＼新しくなつたり、古くなつたりするので、僕等のやうな立廻りのうすのろな者は引込みがなくなつてしまつたやうな氣もするのである。

拙稿は、一葉女史の日記を使つて、女史の實生活の方を示めたいのであつたが、筆を取つて見ると、それをやり出すと、なか／＼四十枚や五十枚の原稿では何うにもなりさうもないので、その方は思ひ切つて、こんなものを書いて、責を塞ぐことにした。

最後にいふ、本稿の『中』に、一葉女史が『改進新聞』へ書いた小説を『たまたすき』として置いたが、これは間違ひで、『別れ霜』である。『たま櫛』は『武藏野』へでも出たものではあるまいかと思ふ。

一葉女史のことを調べられる方は、全集中にある日記と、全集の末にある僕の跋と、それから眞筆版『たけくらべ』の後について居る諸家の一葉觀その他を一讀されんことを切望する。



## 北村透谷君

北村透谷君の處女作は「萊蓬曲」と云ふので、バイロン式の韻文戯曲であつた。同君が島崎藤村君と友達になつたのは、たしか二十五年頃だらうと思ふ。巖本善治氏の『女學雜誌』が、當時大分あたらしい派の文藝的作品を載せて居たので、其の雜誌に縁故の深かつた島崎君が、原稿のことか何かで、北村君と知り合ひになつたのであらうかと思ふ。二十五年の暮か二十六年の初めか、一寸覺えないが、島崎君が旅行に出る時に、其の時分同君がやつてゐた明治女學校の教師の後任に、北村君を推薦した。私は、二十六年の十月頃から翌年の春までに北村君と三四回會つたのみであつた。私は同君を何となく捌けない人だと思つた。妻もあり、子もある人と

しては、人生の智識などが割合に狭い人のやうに思つた。で、あんまり親しくもしなかつたし、眞面目な話もして見たことはなかつた。只其の時に氣が付いたのは、神経系統に幾らかの異狀があるに違ひないといふことであつた。で、二十七年の夏かと思ふが、北村君が死んだといふ知らせを得た時に、直に自殺ではなからうかと思つて、『病氣ですか』と殊更に聞いたくらゐであつた。北村君の死んだのは、思想上の原因もあらう。又、生活上及び家庭の關係もあらうが、單に自殺と云ふ行爲だけを引き離して見れば、肉體上、即ち健康上の異狀といふことを重なる原因と見做さなければなるまい。私の知つて居る人で、自殺をした人は外に二人程あるが、それ等の人々は皆前から神経に異狀を來して居たらしく思はれる。神経に異狀のある人は皆自殺すると云ふ議論は成り立たないのであらうが、神経に異狀がなければ、大抵は自殺はしないと云へやうかと思はれる。尤も刑罰を受けるのを厭うて自殺する人の場合は特例であらうけれども。

斯う云つたところで、私は、詩人とか、思想家とか云ふ人々の自殺を、馬鹿なこ



とだとか、笑ふ可きことだとか云ふのでは、決してない。さう云ふ悲しむべき行爲に達するまでの徑路、さう云ふ行爲を實行する當時の心持には同情も表するし、或る場合には羨ましくも思へることがないではない。只しかし、事實として言へば透谷君の最後の如きは、どうも其の原因が神経系の病氣に關係があると思ふと云ふまでである。

北村君は小田原の生れだといふ。之れは全く傳聞であるが、北村君のお母さんは、同君の生母ではなかつたさうである。數寄屋橋外の四つ角のところに、小さい煙草屋が今もあるが、其處が同君の家であつた。私は其處へ一二度行つて、二階で北村君に會つたことがあるが、お母さんは小柄な品のない並の町家の内儀さんと云ふやうな人であつた。同君の細君の父親と云ふのは、自由黨の政治家であつたが、同君が其の細君と一緒になつたのには、いろ／＼込み入つた事情があつたやうに聞いて居る。それで同君が生家の人々と別居してゐるのも變であるし、同居して居ても又うまく行かぬといふやうな有様であつた上に、當時は原稿生活の未だ困難な時代で

あつたので、同君のやうなブライドのある、神経質な人には随分厭なことが多かつたらうかと察しられる。そんなことも、北村君の身體には随分應へたことであらう。要するに同君にとつては、時代も、境遇も、體質も皆不利なものであつたのだ。しかし、私は、前に云つた通り、北村君のことを餘り多くは知らない。島崎君の『春』の中の青木と云ふのが、北村君のことださうだが、私の傳聞したところでは大抵『春』に書いてあるところは事實に近いものゝやうに考へられる。

それから北村君の、文學上の事業であるが、同君が『文學界』へ物を書いた時分には、中々人氣があつた。同君の一種の理想主義、強みのある文體などが、其の頃の新思想を求めると云ふやうな若い人々の間には、大いに迎へられて居たやうであつた。一言にして云ふと、在來の文學に籠つて居た因襲的な道學的觀念を破壊した。それまでの人々が持つて居た淺薄な、文學即實用主義と云ふやうなものに打撃を與へた。と云ふのが北村君の功績の一つであらう。又一方から見れば、當時の状態では、文學は洒落者の仕事、寧ろ道樂のやうに考へられて居たのであるが、それが、



教育ある若い人の、眞面目な精神上の欲求を満たすに足るものであるといふことを、若き人々に明らかに示したのは北村君の功績であらう。要するに今日まで進んだ、新しき文學の爲めに道を開いた人、文學が今日まで渡つて來る道の飛石の一つになつた人であることは、疑ひがあるまい。

尙ほ其の上に、形式の方から云へば、北村君は明治文學に對して認むべき貢獻をしてゐる。それは、同君の書いた韻文戯曲の形式である。今日の自由な詩形から見れば何んでもないやうに見えるであらうが、當時ではあゝ云ふ試みでさへ、非常に新しい物であつた。韻文で長いことを敍するといふことは、極く僅少な人の試みたことであつて、北村君のやうに廣い大きい範圍にまで、韻文を使つて進まうとした人は、さうたんとない時代であつた。さう云ふ點に於ても、同君の開拓者としての功績は没すべからざるものであらう。

只、私どもの慾を云へば、北村君は淺薄な古い道學的觀念を破つたけれども、同君自身一種の道學的觀念に囚はれて居るやうなところがあつた。従つて文學者としては働くべき天地が狭くはなかつたか、生きてゐてもさう長く勢力を有し得る人であつたか、どうだか私には決し兼ねる。古い時代との間に立つ、情熱のある思想家と云ふのが、或は北村君の位地ではなかつたらうか。



## 上田敏君

僕が上田君に初めて會つたのは明治廿七年の初め位のことであつたと思ひます。後でもさうですが色々と變る人もありますが、見たところの上田君は餘り變らなかつた様です。若い時の上田君は勢のいゝ、洒落れた事を言ふ人でした。學問好きで、本好きで、よく色々なものを讀んでゐました。トルストイの『クロイツチエル・ソナタ』などを上田君が、馬場が面白がる馬場向きの本だと云つて、貸て呉れたこと等がありました。その時分には平田禿木、戸川秋骨の兩君が池之端七軒町の同じ下宿屋に下宿してゐましたので、上田君も、よく來て話をしました。

『文學界』の連中では、平田君が一番上田君と親しかつたやうで、たしか高等學校で同級だつたかと思ひます。之で上田君を仲間へ引き入れた譯なんです。上田君はひどく勢がよかつたと申しましたが、大變に上品で、若い内にも、餘り亂暴なことなどは云ひませんでした。大分一葉の日記の中にも出てゐますが、上品で落着いた、穩やかな人と書いてあります。

『帝國文學』などの出來だしたのはあれは三十年頃でしたらうか、その時分からか、その少し前からか、一體『文學界』に從來の關係者も吾々もあまり筆を執らないやうになつて、上田君は『帝國文學』の方へ多く筆を執りました。で、二十八年頃から私は地方へ出ましたから、その間の上田君は知りません。従つて上田君の處へは暫く行きませんでした。それから三十五年頃から又上田君に會つたりしました。それは上田君が僕より前に『明星』へ物を書き、僕も平田君に勧められて『明星』へ原稿を書く、そんなことで、又上田君と親しくなる様になりました。さうして三十七年頃からですか、よくあの西片町の上田君の許へ行つて夜中まで話したものです。

其時分森田草平、生田長江、栗原古城、中村古峽、川下江村、五島駿吉、辻村鑑



などの諸君が集まつて『花雲珠』と云ふ廻覽雑誌を出してゐたのでしたが、僕は偶然に諸君と親しくなつたのでした。その連中は上田君の教へを受けるやうになつたところから、皆一緒に集つて雑誌を出さうと云ふ事になり、銀座の細川芳之助君に島崎君が口を利いてくれて、金を出して貰ふことが出来たので、三十九年に出し初めました。それは、上田君と僕とが監督して、生田森田兩君が重に書くかたちでした。その雑誌は上田君が前にやつてゐたことのある『藝苑』の名を今一度使ふ事になつて、暫らくこれをやつてゐましたけれ共、その内に吾々どもが飽きてしまつて遂にやめました。

上田君が洋行して、やがて歸つて来るや、京都へ行つてしまひましたが、親切な人でよく訪ねては呉れましたので、僕も會へる機會を求めて會ひました。年に一二度で、而かも僅かしか會ひませんでした。それで最後に會つたのは大正四年九月頃で、色んな話をした末に頻りに東京へ歸住の事を話しましたところが、いづれさうする積りだと云つてゐました、が、一寸の間話したに過ぎませんでした。——何で

も九日の夜九時頃に、與謝野君が入澤博士から上田君が危篤だとの知らせがあつたからすぐ行くと言つて來たので、私も一緒に行きました。九日の三時に死んだのでしたから、死顔を見て引取つた様なわけです。どうも歸朝後身體が悪くなつた様です。三十四五年頃迄酒を飲んで、可成り強かつたらしいのです。尤も若い時分にはさして飲まなかつた様ですし、仲間に飲み手がありませんから、酔つたのを見ませんでした。病氣は膽石、黄疸、中耳炎、腎臓炎と色々あつたので、そんな病氣が重なつた結果であつたのでせう。六日に歸京して、八日の午前急に悪くなつて、それで知覺を失つて、その日に亡くなつたといふのです。

考へて見ると、どうも上田君は、所謂學者であつて、作家であるにはも少し、一體にだけてゐなくてはいけなかつた様です。どうも堅いところが少しあつて邪魔をしたものゝ様です。誰一人として、上田君の馬鹿々々しいことをやつてゐるところを見た人はありませんまいし、一緒に暴れて、後で馬鹿話をする様な友達が極めて——あつたかもしれません。——少かつたらうと思ひます。



話の面白い上手な人でありましたが、どうも人の話を聞き上手ではなかつたと思ひます。どんどん話して、聞き手は大變いゝが、此方の話をする機会がない、問へ口を挿むことができないといふ風に思つた人があるかも知れません。比較するのは面白くないが、夏目君の應待振りは實に巧いものです。自分から話を持ちかけて、相手に話をさせ乍ら、自分が、其間に口を入れて、相當に話すと云ふ遣り方です。色々と性格の上の関係其他もありますが、夏目君は練れた遣り方です。上田君にはまだ練れないところがありました。之れは年齢の相違や、色々なことから來てゐるでせうが。

上田君の文學界に於ける功勞は、まづ早い時分に新しい外國文學を紹介したにあるので、殊に三十八年に出したんでしたが『海潮音』は佛蘭西象徵派の詩人の譯詩集で、これは當時の詩人のいゝ教科書となり、當時の詩の傾向に大影響を與へ、随分あれのお蔭で自分達の作風をきめた人の多いのを認めます。文學界に影響の大きな點では著書中『海潮音』が一番注目すべきものだと思はれます。

今から思つて惜しいのは、色々な都合もあつたでせうが、京都へ行つたことです。自分でも餘程淋しかつたのではないかと思ひます。吾々は田舎者ですから、何處でもさほどの違ひはありませんが、上田君の様に、父祖傳來の東京人が、京都へ行つて、長く暮すのは、色々な趣味の上から、何だか、ひどく外の土地へ行つたと云ふ感じが強かつたらうと思はれます。若い時分に、まだ大學の時代や、卒業して早々の頃には旅行をしない方でした。田舎は嫌ひだと云つて、餘り出掛けませんでした。少し自分の趣味の上の負け惜みもあつたでせうが、兎に角嫌ひだと云つてゐました。其處から考へても、京都行きは随分嫌だつたらうと察します。それからどうも一寸彼方の人と趣味も調子も違ふから、上田君の様な人は、京都の文科にはえら過ぎたかも知れません。従つて學生等が、一寸上田君の面白いところを認め得なかつたのかと思はれます。謂はゞ上田君の様な洗練された氣取つた趣味は、上方の人には、どんなものでせうか。その感じが徹底しなかつたかと、どうもさう思はれます。私は行く時も氣の毒だと思ひましたし、會ふ度に、嘸不自由だらうと思つてゐたので



したが、最近には何だか轉任の出来さうな話を聞いて結構なことだと思ひましたのに、沙汰止みらしかったのです。とは云ふものゝ、遠からぬ將來には歸住ができるものとして待つてゐたのでした。吾々の中では一番若い方で、身體も壯健な人でありましたから、かう早くとは思ひませんでした。友人達誰も皆意外であつたことゝ思ひます。

今にして思ふと、上田君は淋しい生活を送つた人と云はねばなるまいと思ひます。外的に見れば、順境にも見えませんが、當人はどう思ひましたか知らん、も少し眞個に人間同士打突かる様な生活を送ると云ふ性格であつたらよかつたでせう。然し人各々生れつきがありますし、當人の心次第のもので、自分でも満足してゐたらいいのですが、我々他人が自分の心持からいふと、もつと、くだけた生活を上田君がやれたら、よかつただらうにと今でも思ひます。

上田君に就いては、幾ら考へても逸事と云つたやうなものが思ひ出せません。又大笑ひの種となる様な例を見ません。一つ二つはあつてもいいのでせうに、吾々は少しも知りません。そんな風ですから、若い人などは、どうも、その或る程度以上に、上田君に親しむやうなことが、あまりなかつた様です。何だか近來になつては、大分、自身でも淋しく思つてゐたのではないかと思はれる事があります。すると、淋しいとか心細いとかを餘り人に告げない人で、いつも勢よく見えたゞけ、それだけに尙ほ氣の毒だと思ひます。



## 鷗外大人の思出

故森鷗外大人の發病が何時時分であつたか、一向知らなかつた私どもに取つては、大人の遠逝の報を得た時には甚だ以て意外な感がした。あの何時見ても年寄染みたところの無い、率直な、勢の好かつた大人がもう亡き人であるとは、全く夢のやうな心持がする。

名高い、えらい人と親しくなる機會を持ち得無い私は、鷗外大人に拜面したことも矢張り度々とは云ひ得無い。一一數へては見無いが、全體で十回位なものであらうと思ふ。

故大人の警咳にはじめて接したのは、與謝野君の千駄ヶ谷のお宅で催された前期の『明星』の懇和會に於てであつた。それは明治三十八年の秋頃でもあつたらうかと思ふ。

『しがらみ草紙』以來、論陣を張つては、如何なる小敵をも看過し無い辛辣な論鋒を進められる鷗外漁史は、定めし人としても、強い鋭い人といふ感じを與へるのであらうと思つて居たのに、實際の鷗外大人が如何にも柔かな暖かな、率直な人であつたのは、私に取つては全く意外であつた。

その時は私は少し後れて行つたのかと思ふのだが、鷗外大人の話されたことを今は餘り記憶してゐない。

唯蒲原君かんげろであつたかと思ふのだが、私が讀書好きであるといふことを鷗外大人に話すといふと、大人は、如何にも快ささうに頷いてから、

『しかし、餘り多讀するのも善し悪しで、これも結構だ、これも又面白いといふやうになつて、趣味の中心を失ふ虞がある』

といふやうな意味のことを云はれた。それから續いて、大人は獨逸の象徴詩の話



を始められて、

「餘程不思議なものだ。劍を抜いてじつと見て居ると、それが忽ち女になるといふやうなのなどもある」

と、いふやうなことも話されたやうに記憶する。

夜になつて、話が大部分はづんで來た時分であつたと思ふのだが、私が、

「此度の戦争は實際日本が勝つたのですか」

と、聞くと、大人は、

「いや、大變なことを聞くぢやア無いか」

と、身じろぎするやうな身振りをして、快ささうに笑はれてから、可なり眞面目な顔になつて、

「兎に角、世間でいふやうな譯のもので無いだらうと思ふ。奉天の戦の時などは、陸軍の公報では「敵は潰亂せり」といふのであつたが、私はさうは思は無かつた。露軍は十分に退却の用意を整へて居たことは明かであつたんだ」

と、云はれた。

それから、金州城の攻圍の際にも、日本軍には砲撃の準備が不十分であつたが爲めに、殆んど苦戦であつたことを話され、

「城を陥れてみて、始めて防備の完全であつたことが分つて、日本軍の砲撃の効の無かつた譯が明かになつたのだ」

と云はれ、それから尙進んで、日本軍が有效な砲弾をば如何にして得たかといふことの説明を吾々に與へられた。

私が新聞の従軍記事なるものが、何れも此れも千遍一律の觀があつて、陳套を脱し得無いことを笑ふといふと、大人も顔を顰めて、

「いや、實に馬鹿な話で、彼等は實際にはさまざま特徴のある事を見るのだが、それを筆に上すことになると、忽ち陳言套語の行列になつて了ふのだ。例へば、滿洲では、氣候が寒いことから、土がすっかり凍つて了つて、ぼろぼろになつて、それが河の氷上などには、黒く吹き寄せられてゐて氷が見えぬ位になつて居る。一望皚



體たる眺などいふのはウソである。遼河の氷上などが矢張り黒土の吹き溜りであるんだ。所が、それが新聞の從軍記事では、全軍白雪を蹴立て、突進したとなつて居る。何處へ行つたつて、黒い白雪といふのがあるものか』

といふやうに答へられた。

その夜の歸りは、大人も吾々も一緒であつた。千駄ヶ谷の停車場までの路は可なり悪かつた。劍の柄を取つて、地に着かぬやうに引き上げて、足場をよつて、吾々と言葉をかはしながら歩いて來られた大人の穩かな體容が今も尙私の眼前にある心地がする。

大人は全く率直な人であつた。後進に對しては城壁を置くといふやうなところは少しも無いやうに見受けられた。殊に後進の秀才に對しては、自ら進んで親しくされたやうに傳へ聞いて居る。

故上田敏君などには、ひどく信頼して居られたやうに聞いて居る。

## 更に衰へざりし鷗外大人

一

故鷗外大人は、如何にも親しみ安い、暖な、率直な人であつた。誰に對しても同格でつきあふやうな態度で居られたのは、實に敬服で、吾々の企て及ばざるところであると同時に、又吾々の心して學ば無ければならぬところであると思ふ。

大人は何時までも若き人であつた。従つて、何時までも進んで已まざる人であつた。大人は享年六十三であつたといふ。年齢から云つても、さう高齢ではない。大人危篤との報に接した時には、大に前途ある人を失ふやうな氣がして残念で堪まら



無かつた。

更に又、吾々の若い自分から、文界に卓立して居られ、種々の意味で吾々の刺戟となつた大人の易養は、時代の推移を急に吾々の胸に響かすところの晩鐘の如き感があつて、甚しく哀愁の念に堪えなかつた。

『舞姫』に『うたかたの記』に、美しき熱情と、美しき文體とを以つて、當時の文壇のフロントを占めて居た硯友社その他の諸派の作風以外に、尙行くべき路の廣きことを吾々に示されたのは、もう四十餘年の昔である。

シュビンの『埋木』アンデルセンの『即興詩人』共に翻譯には相違無いのだが、その文字の自由にして、豊富流麗なる點より云へば、全然創作とも云ひ得られるものであつた。所謂翻譯文もあれまでの名文になれば、原文との關係如何のごときは全く顧慮するに足らざるものである。恐らくは吾々に取つては、原文より以上に面白く読み得らるゝ譯文であつたらうと思はるゝ。殊に『即興詩人』の如きは、文字の點より云へば、原文に優るとも云ひ得らるゝかも知れぬ。

明治三十八九年の頃だと思ふのだが、大人は、

『予の若い時分の翻譯は、所謂氣を負うて紙に臨む底のものであつたので、原文の各部分をそのまま傳へるといふ標準から之を判すれば、固より缺點のすくなからぬものであらう』

といふ意味のことを或る人に話されたと傳聞した。果してさうであるか何うか、吾々は知らぬがフィッツゼラルドの『ルバイヤット』が、原文を離れて獨立の價値を有するが如く、鷗外大人の『即興詩人』は全く獨立の價値を有する名文であることは疑ひが無い。

文學的評論に獨立の位置を與へたのも、鷗外大人であつた。端嚴なる文字を自在に驅使して、正確なる論歩を進むる大人の評論は、全く時流を抜いて居た。その時分よりして起りかけつゝあつた文學的評論の向ふべき路を指示したのは、大人の偉功と謂はなければならぬ。

要するに、三十代の鷗外大人が當時の青年に與へた指導は、その文體と精神とに



於てゝあつた。

一一六

二

クラシカルな精神とクラシカルな文體とで、當時の文壇に於て巨人の如き位置を占めて居られた鷗外大人が『そめちがへ』を公にせられたのは、全く人の意表に出でた觀があつた。その物語の仔細は記憶して居無いが、事は花柳界の人々の間に起つた可なり粹ひびなものであつたやうに思ふ。文體も後年の言文一致體と氣脈を同うする餘程碎けたものであつたやうに覺えて居る。

大人晩年の作では『雁』を甚だ面白いと思つた。大人の學生時代の無縁坂あたりの雰圍氣の豊に表れて居るのが、私には非常に興味が深かつたのだ。

既に定評ある大人の作品を此所に一々擧げるのも煩はしいのだから、それ等は此處では略することゝするが、吾々の敬服措く能はざる點は、大人の如何なる場合に於ても綽々として餘裕ある態度であつた。藝術は幾分現實の境地よりの擺脫より生

る。藝術は作家の心に於ける餘裕を基礎として生れるのだ。如何なる事件を描くに當つても、その事件の程度とプロポーションを見失は無いのは實に巨匠の心境である。

物に執すること無きは至人の心であるといふ。少くとも鷗外大人の晩年はそれに近いものであつたと云ひ得られるであらう。

所謂アンピの心持、人間の元氣も勇氣も其處に根ざしたものが本當のものである。少くとも、我國の如き國に於て心豊に住み得る心のブオヤンシイは此のアンピの心持から生ずると思ふ。

明治四十二年の頃でもあつたらうか、與謝野寛氏の外遊送別會の宴で、鷗外大人は隣席に居た私を顧みられて、その當時私が書いた二三の小説に就いて、

『君は背水の陣を布いてやつて居るのだから、大に宜しい』  
と、云はれてから、

『書かうと思ふものを三つ位書きかけて置いて、此方が倦きたらその次ぎ、その次ぎ

一一七



が倦きたら、又その次ぎのものといふやうに、あつちこつち少しづつ筆を着けて居るうちに、何時の間にか、同時に三つとも出来上るものだ。君もさうしてみ給へ」と、話された。

「それは大人にして始めて出来ることなのだ。僕などは書くことを一つ考へつのが、やつとなんだものを」と、私は心のうちで、思つて苦笑せざるを得無かつた。

## 三

鷗外大人は如何にも率直な、誰に對しても胸をうち開いて話をするやうに見受けられた人であつた。軍籍にあつた人でありながら、可なり遠慮の無い話をされる人であつた。

或る會合の食卓で、誰かが、日本人で外國人に對して心持の悪い程ルウドな言動をするものゝあることを痛嘆すると、大人はご自分の軍服の襟を引張るやうにして叩きながら、

「こ、これの連中がさういふことでは一番いけ無いんだ」

と、可なり力の籠つた口調で云はれたことがあつた。

率直なる鷗外大人は、可なり勢好くものを云はれる人であつて、自説を主張されるにも大分手強いところはあつたやうであるが、それでも無理やりに押しつけるといふところは無かつたのであらうと思はれる。

もう大正七、八年頃であつたかと思うのだが、東京日日新聞で國詩といふのを募つた時には、鷗外大人がおのづから委員長格になつてしまつて、選が了つてしまつた。ところが當選者中の誰かの詩のなかにあつた「……するよりし方がない」といふ句に至つて、大人は「よりし方が無い」といふのは正しい言葉で無く、謂はゞ下品な書生言葉であつて、「より外し方が無い」が正しい言葉であるのだから、さう改めるべきであると主張された。私はそれは鷗外大人の仰せの通りではあるが、「よ



りし方がない』も兎に角今日では慣用語になつて居るのだから、強て改めずとも宜しからうでは無いかといふ意を漏した。大人は矢張り『外し方がない』でなければウソであることを可なり熱心に説かれたので、私は何づれでも宜しいことなのでそのまゝ黙まつてしまつた。字句の添刪は鷗外大人ご自身で加筆されてゐたのだから、無論『よりし方がない』は『よりほかしかたがない』と直されたことゝ思つてゐたのであるが、後でその詩が印刷されて、校正が私の手もとへ廻つて來たのを見ると、矢張り『よりしかたがない』といふ元のまゝになつて居て、『ほか』の二字は加へてなかつた。綿密な鷗外大人が直し落しをされる氣遣ひはないので、それは何うしても、大人が私どもに對するご遠慮から、直さずに置かれたものだと思はざるを得無かつた。私はその時鷗外大人の遠慮深いのに敬服の念を抱かすには居られなかつた。

## 四

鷗外大人は三田の文科には關係の深いお方であつた。第一期の文科では美學の講師であつたと聞いて居る。

明治四十一年か二年かに、文科の擴張を行ひ、『三田文學』の創刊をするに當つては、外鷗大人は顧問として非常に盡力された。永井荷風氏を推薦したのは、大人が上田敏君と相談せられた上でのことであると傳聞する。

『三田文學』發刊の相談會には、慶應義塾の幹部數氏と鷗外大人、上田敏君、永井荷風氏の外に私は末席を汚したのである。具體的の案はその時は確定し無かつたのだが、『三田文學』の發刊は大體に於てその晩の相談できまつたのであつた。

鷗外大人は日本文壇の大家として尊敬すべき人であつたと共に、三田の文科及び『三田文學』に縁故を有する吾々には忘るゝことのできない恩人である。



## 漱石氏に關する感想及び印象

夏目漱石君は長者の風のある人、客扱ひのうまい人、人によつて話をせられる人であつた。雄辯の人は概して客には話させないものだが、夏目君は客にも話させ自分も話されるといふ方の人であつた。私は明治四十年、森田君の家でお遇ひしたのが初めであつた。私の宅へも二度ほど來られた。私も行つたがさう度々は行かなかつた。

七月（大正五年）中旬、上田敏氏の葬式の時式場の入口で一寸挨拶したきり、それから一度も會はなかつた。漱石君は實生活では複雑な變手古な生活をされなかつたが、あゝいふ人だから思想上ではいろ／＼の生活をせられた。實際當つた生活は割合に狭い。作物の上に肉あり血ありと云ふ部分で十分でないといふことがあるとすれば、それは實生活に觸れた點が餘り無かつた所に原因することゝ思ふ。

君が後期の作物を見て感服するのは、書いたところに抜目なく、此處にもう一句あつたらば好く分るだらうとか、此處にもう一行欲しいとかと云ふ感じの起らない點である。私どもは夏目君の注意力の廣く精密に油斷なく働いてゐるのを見て感服するばかりである。

夏目君は癩癪持ちだと聞いた事があるが、さう云へばさういふ所もあつたらうと思ふ。が、一方から言へば、多分腹の立つやうな心持ちになつて來ると、其の感情を抑へずにわざと口に出して見ることをやつてゐられたのではなからうかと思ふ。

頓才のすぐれて居られたのは誰でも氣のつく事であると思ふのだが、演説とか講演とかいふものを聞いた人は誰でも皆夏目君の當意即妙の頓才に感服したことゝ思ふ。門下の某君が自身の小説の中に『子を作るのは awful なことである。何となれば自分の傳へて居る一切のものが子に傳へられ、子は亦それを子に傳へ、その子



は亦その次の子に傳へるといふ風で、親が有つてゐる凡てのものが永遠に傳へられて行く。子を持つのはオーフルなことである」と書いたときに、夏目君がその某君に——「おれがクソをすると其のクソが野菜にかゝり野菜が育つて人に食はれ、人の血となり肉となる。で、その人は亦子を作ると云ふわけになる。故にクソの効果も永遠である。君の云ふ通りにすれば、クソをするのもオーフルだ」と言はれた。で、その某君が夏目君は他人の熱心を打ち消さうとするのに、戀愛のところへクソを持出したのは如何にもうまい、これにはひどく閉口したと話したことがある。

大正九年頃前かと思ふのだが、私は外濠線の電車で圖らずも夏目君と一緒になつて、少しの間話をしたことがある。その時夏目君は自分の口髭ひげと兩鬢びんとのしらがをさして『こんな面白くなりました。でも頭の真中は黒いのだが、この通り帽子を被ると肝心の黒いところは隠れて白いところばかり出ます』と言つて笑つて居られた。

人間五十頃になるといふと、あゝ云ふ夏目君のやうな理解力の豊かな人が知人の中からなくなると、甚だ淋しい心持がする。私が明治四十四年頃に、小説を少し書

いたことがあるが、三田文學に出た『屈辱』に就いては夏目君が好く其の作中の人物の心持を理解して門下の人々にも説明されたやうに聞いてゐる。間接にも直接にも、私に小説を書けと勧めてくれたのは夏目君が一番度々であつたやうに覺えてゐる。吾々の行かうと思ふ方面で教へを乞ふべき人であつた夏目君の長逝は吾々の如き所謂文壇の老朽者に取つては特に損失である。

これは私ばかりの感じではなからうかと思ふのだが、夏目君がもう少し若い時分から作者生活を始められなかつたのは残念な事であつた。一方に於てはなかく花やかな筆もあつたのであるし、感情に於ても決して乏しい人ではなかつたのであるから、その盛んに流露するやうな若い時代に於て筆を執り始められたのであつたら、もつと盛んな作物が出たらうかと思はれる。夏目君の作物の如何にも結構布置井然としてゐて、作者は何處までも冷靜であるといふところに何等かの不満を持つ人々があるとするれば、其の人々は私どもと同じやうに夏目君の若い時分に作を始められなかつた事を残念と思ふであらう。



然しそんな事は隴を得て蜀を望むといふのに過ぎないのであるから、我々は夏目君の興へられた丈けのもので満足すべきである。しかも十分満足すべき価値のあるものを夏目君が遺されたことには概ね何人も異存はあるまい。

要するに夏目君は人物として見ても作品から見ても全く特別な上等品である。手のこんだ念の入った品物である。出来合では決してない。随つてこれから先きも夏目君にひどく似たやうな人が出来やうとは思はれぬ。尤もそれには時代も考量する必要があるのであるが。

夏目君のことでは、思ひ出せば色々のことともあらうと思ふのだが、今さし當つてはさう細かなお話をするわけには行かない。で、私の著書の中に書いた夏目君の事を左に引用する――

△

先生に始めて拜顔の榮を得たのは、明治四十年の冬頃かと思ふ。場所は、その時分森田草平氏の居た本郷の丸山福山町四番地――故樋口一葉の住んだ家――であつ

た。

その時に僕が受けた印象は、先生の態度は、話し振り等に籠つて居る或る物が、故中江兆民、齋藤緑雨の態度、話し振り等に籠つて居た或る物と同じであるといふ印象であつた。二人の故人に共通であつたウイットとしての風趣、即ち何處か飄逸とでも云つて宜いやうな趣が漱石先生にもあるやうに感ぜられたのだ。が、その感じは、漱石先生に僕が始めて拜顔の榮を得た時の感じであつて今日ではさういふ感じは殆ど無くなつて居る。今日では漱石先生の寛大な、温藉な方面が、より多く私には感ぜられる。

△

漱石先生が帝國大學の學生で居られた時分には英文科の先生の組の學生といふのは先生一人きりであつた。所へブッフエツサア・ウードが英文科の教師として渡來せられた。ウード氏が始めて大學へ出席された日、漱石先生に教科書彼此れは相談の上極めるから旅宿の帝國ホテルへ來て呉れと云ふのであつた。で、漱石先生は外



國人を訪問するのだからといふので當時の日本人の考でできるだけハイカラに仕立て、帝國ホテルへ出掛けた。尤も當時ハイカラは今日の蠻からで、漱石先生其の日のおん出で立ちといふものはその時分流行つた縮の——節は夏である——折襟の前は紐で締めるやうになつて居る襯衣の上に直接にフランネルの金鈕附の制服を着して居られたのだ。所でホテルではボーイに案内されて行くとウッド氏の寢室へ連れて行かれた。奇異な所へ案内するものとは思つたものゝ、さういふ習慣もあるものかと思つて室へ入ると、ウッド氏は「フン」とか云つて一向に挨拶もせず室にある革靴に指をさした。漱石先生には一向何だか合點が行か無かつたが多分は革靴の中には書籍が入つて居るから開けて出せ、さうした上でいろ／＼相談しやうといふ意味であらうと推察したので、直ぐ立寄つて跪しゃがんで革靴の蓋を開けた。所が中には襯衣だの衣服の古いのなどが一杯入つて居るきりで書籍らしいものは影さへ無い。何うした事とも解らぬので、蓋を両手で押し上げたまゝでウッド氏の顔を凝眸と見あげて居ると、やがて氏は傍に來て蓋に手を掛けて元の通り蓋を爲やうとする

ので漱石先生は直ぐに元の通りに蓋を下おろした。と、ウッド氏は又蓋に手を掛け開けやうとするので漱石先生も一緒に蓋を持ちあげた。漱石先生には何の事やら一向に解らぬ。さういふ同じ事を二度三度繰り返した後で漱石先生は堪らへ兼ねて、これは一體何ういふ譯なのかと尋ねた。ウッド氏は「錠前が毀こはれて居る」と云ふ。漱石先生はますます解げせず、「錠前は成る程損じてゐるが、その錠前の損じて居ることと我輩との間に何等の關係があるのか」と斯う哲學的に尋ねた。するとウッド氏は「でも御前は錠前直しだらう」と云つた。漱石先生こゝに至つて憤然と立ち上つて「否」と答へた。所でその「No」なるものが如何にも激烈な調子で云ひ表はされたものなので、漱石先生がその如何に錠前直しと呼ばれたのを憤つてゐるかが明に知り得られたからウッド氏は少時呆れて漱石先生の顔を見て居た。がやがて「君はそれでは何ういふ人なのか」と尋ねた。「イヤ自分は文科大学の學生で、かう／＼いふ用向きで來たのだ」と漱石先生が説明するといふと、ウッド氏大に慌て、「ヤアそれは飛んでも無い間違ひであつた。實は錠前直しを待ち受けてゐた所へ入つて來



られたので、一圖にさう思つて誠に何うも失禮をした。疎忽の段は幾重にも勘辨せられ度い、I beg your thousand pardons』といふ様な事を云つて、改めて漱石先生を應接室へ通らせて書籍の相談をしたといふのである。一體ならば前日教場で差向ひで話をしたのであるからウッド氏は漱石先生の顔は覚えて居るべき筈であるが、ウッド氏は日本へ來たての西洋人に有勝な通り日本人の顔が皆同じに見えて區別が付かなかつたので、斯ういふ間違が起つたといふのである。漱石先生の云はるゝには、その後西洋へ行つてから考へて見ると、自分の當時の服装は西洋人の眼で見たら何うしても錠前直し相當のものであつたといふのだ。

この話は僕等のやうなウッド氏によし半面識でもあるものには特に面白い。あの人柄な訥辯なウッド氏が初め漱石先生を錠前直しと思つて扱かつた態度と、後の慌て方が何と無く眼前にチラ付くやうな氣がするのだ。

これは明治二十三年の秋かと覺えて居るが、本郷の若竹へ越路が掛かつた。漱石先生はその時、令兄より拜領の外套——中古であるが仕立のなか／＼良い——を着

せられて大分得意で聽いて居ると、傍に安座あんざをかい居たへんな男が『今日は休みか』と尋ねた。漱石先生は無論先方が此方を學生と認めてさうさく事と思つて『今日は休みだ』と答へた。それから先方がいろ／＼のことをさくので相當の返答をして居ると、段々話が喰ひ違つて來るやうになつて、これは少し異様いふふだと思つて居るうちに、到頭先方から判然と『お前は遣兵へ出るのか』ときいたといふのだ。この話は漱石先生が前の話ほど描寫的には話され無かつたので是れ切りしきや書けなかが何にしるいろ／＼な者に間違へられたものでは無いか。

これは明治四十年頃のこと、漱石先生の早稻田南町の家へしかも庭先へ入つて來て先生に逢ひ度いといふものがあつた。先生が出て見られると縁先に十四五の少年が立つて居る。『用は何だ』ときくと懐から英語讀本を出して『讀めぬ所があるから其處を伺ひ度いのだ』といふ。先生が『お前は俺の所へ來れば分かると思つて來たのか、それとも當て無しに來たのか』ときくと『多分分かるだらうと思つて來た』といふのだ。——この問答では漱石先生の方が負けだといふ評である——で又『こ



れから毎日きゝに來る積りか』と問ふと『いや今日だけで宜いのだ』といふのであつた。で少年を縁へ腰掛けさせて置いて英語讀本の鳥が木の實を啄つくといふやうな所を讀んで遣つた。前後を見ると一面に假名が付いて居る。鳥の所ばかりは假名無しであるので何處かで習つて居るのかときくと、何處か牛乳屋なんかに奉公して居て、大學生の所へ夜學へ行くのだが鳥の部分だけは缺席して抜けたのできゝに來たといふのであつた。少年は二三ヶ月前に田舎から出て來たものであつたさうだ。夏目氏の直話を聞いた時には非常に面白く思つたが僕の取次では何うも十分にその興味を傳へることのできないのは残念である。

## △

これは又聞きのお話であるのだが、漱石先生が帝國大學で教へて居られた時學生の中に一人何時も隻手かたてを懐にしたまゝで講義を聞いて居る者があるのに漱石先生は氣が付いた。一面に於て潔癖な几帳面な漱石先生は、その學生の姿勢が甚く癢に觸つたと見えて、或る日講義中に講壇を降りその學生の傍へ行つて『手をお出しなさい』と少し鋭とがつた聲で云つた。學生は顔を赤くしたのみで、何とも返答せず、又手

も出さ無い、漱石先生は更に強く『手をお出しなさい』と云つた。が、學生は一層赤くなり魚の如く黙して居るのみで、どうしても手を出さ無い。漱石先生は爲方が無いものだから講壇に戻つて如何にも不機嫌さうな様子で講義を終つた。

と、その後になつて何時も手を懐に入れて居た學生の友人が漱石先生の家へ行つた。そうして、その友人は、その手を出さ無かつた學生は手を怪我して居る男なので手を出さ無かつたのでは無くして手が出せ無かつたのだ。と、漱石先生に向つて説明した末に、その友人は『下世話げせわにも、無い袖は振られ無いと云ふではありませんか』と警句一番した積りで云つた。

眞面目な漱石先生はその學生に對して甚く氣の毒がした。が、重厚なる紳士漱石先生は唯まことに悪るかつた氣の毒なことをした、先方へ宜しく僕に代つて挨拶して呉れ給へ、と云ふやうな意味のことを云ふだけでは——普通の人がさういふ場合には大抵云ふやうなことを云ふだけでは——漱石先生自身氣が濟ま無かつた。漱石



先生は此の際自分をも笑つて了まひ度かつたのだらう——傳者はさう云つて居る——  
—漱石先生は濫い顔をして斯う云つた——

「僕等は無學問を出して講義をして居るのだ。……君も氣が利かんで無いか。  
無い手位出して呉れても宜いのに」

△

それからまた筆記のことでは、餘程面白い話がある。明治四十二、三年の秋あたりかと思ふが、夏目君の所へ行つて、雑談をして居るうちに、夏目君が「先日「文章世界」の記者が来て、談話を筆記して歸つたが、その載つた雑誌さへ送つて來ぬ。一體談話に對して報酬をせぬと云ふのが大分議論のあることなんだが、それは、まあ宜いとしても、その談話の載つた雑誌さへ送らぬと云ふのは、怪しからん」と云はるゝ。予は「それが怪しからんどころでは無い。僕に云はすと、全體談話に報酬をよこさんと云ふのが、第一怪しからん譯だ。或る雑誌などからは、立派にその雑誌記者だといふ名刺を持つてやつて來る人があるけれども、實際を聞いて見ると、そ

の人の報酬は、持つて行く談話筆記の量で極ると云ふんだ。で、左様いふ人に訪問せられた際には、此方は、ヨク／＼の場合で無ければ斷り兼ねる。われ／＼の談話で、或人が學資を得るとか、下宿料の補足でも得るとか云ふのであるのに、格別な差支も無くして、ムゲに斷はると云ふのは、少々スゲ無い譯だらうと思ふ。

で、大抵の人は少々厭な位なことは堪らへて談話をする。所で、その談話だつてもさう出鱈目ばかりもやれぬのであるから、考へるなり、調べるなり、相當の勞力はこれに費すのは勿論で、書くのと、話すのとでは、勞力の差はあらうが、決して、質の差は無い。その雑誌營業者が、談話筆者に對して、われわれの原稿に對すると同率の報酬をするのであれば、われ／＼には異存はないが、營業者は、大抵、談話筆者にはズット少い報酬を與へて居るやうだ。左様すると、其様な雑誌社のやり方は、極言すれば、世間には往々ある苦學會とか孤兒院とか云ふものゝうちの、苦學生とか孤兒とか稱へるものを賣子にして、割高に品物を賣り付ける金儲法と同じだ」と、予のことだから、無遠慮な説を持ち出すと、夏目君は莞爾しながら「一體



談話を載せると云ふことが、面白く無いね。文人の説を載せて貰ひ度ば、原稿を書かせることにしたら宜いでは無いか。不用意な所を襲つて、何か云はせて、それを麗々しく、一廉の意見かのやうに載せて居るのは、讀者を欺くに等しい」と云ふ。予は「イヤ、左様ばかりも云へ無いよ。例へば、夏目漱石先生のお説などには、談話筆記でも無ければ、滅多にお目にはかゝれぬし、不肖馬場孤蝶の説だつても、談話筆記が無かつたら、餘り世には出無い。のみならず、論文を書か無い文人の説などは、談話筆記より外に、得て來る方法はなからう」「併し、君だの僕だのやうな境遇の者は、文壇にさう多くは無い。論文を出さん人が多いのは、小説以外のものゝ原稿料が比較的安いからだらう。若し、小説以外のものに、長さの制限が今のやうに無く、報酬も小説同様だつたら、今少し論文を書く人が多くなる譯ぢやア無いか」「御道理。だが、論文を何うしても書かん人は尙且出來るね。談話の出るのはまア宜いぢや無いか。世間も面白がり、雑誌營業者も随つて喜び、筆記者も何等かの金を得ると云ふ譯なんだからさういふ善徳の爲なら、少々杜撰なことを云つて

も宜からう」と予が云ふと、夏目君は噴出して「夫れぢやア、談話料をウンと取るかね」「結局其處だ」と、予も聲を合せて笑つた。一寸斷つて置くが、夏目君と私と談話を爲ると、大抵、此様な風に結末が付く。即ち、予の方が、無暗に饒舌り立てるので、夏目君の方から、宜い頃合を見て、旨く切りあげて了まうのだ。

その時分は、前田夕暮君が「文章世界」の用で、屢く予の所へ來られるのであつたから、同君を捉まへて、散々間接射撃で「文章世界」の談話の扱方に關する不平を述べた。そのお蔭だか、何だか知らぬが、予の「ガルシンと其作物」に對しては、博文館から禮だとして四圓の爲替券を送つて來た。流石にさうなつて見ると、少々氣の毒のやうな氣もした。

△

その後、夏目君の家へ行つた時に「文章世界」はいよゝゝ來無かつたかと聞くと、夏目君は笑ひ出して「あれは飛んだ間違でね。實は雑誌は來て居た。森田（草平）が、僕に云はずに持つて行つてたんだ。あれから「文章世界」の記者が來たから散



散小言を云つたんだが、その時には、森田も居た。さうすると、二人とも歸つて了まつた後で、家の者が「雑誌は文章世界なんですか」と云ふから「左様だ」と云ふと「森田さんが見てお居でのやうでした」と云ふんでね。それから、その次に森田が來た時に「僕の家「文章世界」を持って行つたのは、あの雑誌の記者の來た前なのか、後なのか」と問くと、前なんだと云ふんだね。「そりやア、君、不可ぢや無いか。僕が、記者を叱つてる席に君は現に居ながら、その事を何とも僕に云つて呉れんと云ふ法は無い。君は、僕が、知らぬとは云へ、人をアンジャストに扱かつてるのを傍觀して居るのは、不親切極まる。第一、君は、僕に斷らずに、僕宛の雑誌などを、開封して見るといふのが怪しからん」と云ふと、大に恐縮して居たがね相更らず氣樂な漢だ」といふ話であつた。大分森田式の特調を發揮した話なので、予も噴飯さざるを得無かつた。

夫から、一週間程して、森田君が、私の所へ來たので「夏目君に「文章世界」のことで叱られたさうだね。何うも、自分の過失が原因で他人の叱られてるのを、平

氣で傍觀して居るなんて、君も大分惡漢になつたぢやア無いか」と云ふと、森田君は、頭を搔いて「イヤ何うも大失敗。夏目先生に合槌を打つて、散々記者を叱責め付けたんだからね。これ位惡黨になつたまへば世話はありません」と云つて、笑ひ出した。それから、森田君は「此の間も「煤煙」のことで、酷くやつつけられました」と云ふ「さうかね。君「煤煙」が拙いとても云ふのかね」ときくと「否。左様云ふんぢやありません。行くといふと「君は「煤煙」で見ると、僕の用を頼んだ時分にやア、女と歩いてばかりゐたんだね。だから、僕の用がちつとも片付か無かつたんだ」と云ふやうな藝術とは一向關係の無い方面から、まるで滅茶苦茶に叱かられたんです。多分、誰かゝ行つて「森田は「煤煙」の評判が宜いから、大分得意のやうだ」とでも云つたので、先生「夫りやア生意氣だ。來たら一つやつつけて遣れ」といふんで、手ぐすね引いて待ち構まへて居る所へ行つたといふ譯なんで、何うも頭ごなしに立つ足も無くやつつけられたんです。で、私は「先生、それは無理です。「煤煙」では、一日の出來事が九日も續いて出るので、一寸見ると、其様なことを



九日も續けてやつてゐたやうに見えませうが、實際は唯だ一日の出來事なんです。だから、「煤煙」のやうなことを一日やつちやア、先生の仕事を二日やると云ふ風にしてゐたんで、先生の仕事を全然放棄ほうちやつといた譯ちやア決してありません』と、云ひました』

斯う書いたばかりでは、森田君が夏目君に何時も凹こまされてばかり居るやうだが、實際は、森田君は、夏目君の舌戦の相手としては、時になか／＼手強てこいことがある。夏目君もこの漢、語るに足ると云ふ態度で森田君に對するので、種々な話が傳はる譯である。

### 齋藤綠雨君

齋藤綠雨と云ふ人は、つまり明治の文學者として誠に勝れた人の一人であらうと思ひます。勿論或る人々のやうに絶代の偉人とか明治文界唯一の巨人であるとかまでは私は考へては居らぬが、兎に角に明治の時代が産出した文學者の中の勝れた人の一人であると吾々は信じて居ります。殊に吾々のやうな東京の事情に通じない者、また書物許りで世の中の事を知ると云ふ人間から見れば、齋藤君のやうな自分の身は東京に生れて、どちらかと言へば中以下の生活を送つて居つた人で、年齢の割合には善く世情に通じて居るといふ人で、一言して云ふと江戸式即ち東京式の文學者が無くなつてしまつたと云ふ事は心細く感ぜられる事です。あの人が嘗て一葉女史



の事を評して、『一葉と云ふ人は天才のあつた事は疑ひもないが、然しそれがよくあれだけにその才を發展させた」と云ふ事は何ういふ譯かと云ふと、自分の家へは東京生れの老人などで出入する人が多かつたので、またさう云ふ人々は見聞のなかなか廣いもので、よく世情に通じて居るのであるから、さう云ふ人の話をきくのは作物の爲めになる事が甚だ多い。それで一葉と云ふ人の作物を見、一葉の天才を評するのには東京、江戸と云ふ事を離れては駄目だ』といったことがあるのですが、同じ事を移して齋藤君の上にも言へやうと思ひます。齋藤君の生れたのは慶應三年の末頃で、伊勢の神戸かんべで生れて、其後本所の緑町みどりちょうへ出て来てからは、地方には餘り出られなかつた人です。それで家の暮し向きも無論東京向きでやつて居つたのですから、飽くまでも、あの人の作品は東京式で出来て居ります。近來の文學者は大抵皆書物の上でのみ智識を得ると云ふやうになつて居るので、私ども始めさうなのですが、外國の書物を見、日本近代の書物、明治の初めの諸大家の書物を見て、小説は斯う云ふもの、文學は斯う云ふものと云ふ事を心得て、それから、筆を執つて文學

を作ると云ふ事が多いのであります。さう云ふ處で綠雨君、紅葉君と云ふやうな、東京で生れて東京の事情に通じて居て、實地の觀察を基礎として文學を作る東京式の文學者がなくなつてしまふと云ふ事は、甚だ残念な事で、吾々に取つてはさう云ふ人がまことに貴いのであります。その中にも齋藤君などは餘程東京式の作家として觀察が深かつた。その人の死ぬと云ふ事は吾々が東京と云ふ事を研究する一つの道の榮が無くなつたやうにも思ふので、大變に残念な次第です。——私は齋藤君の人物に就いて一應辨じて置きたいと思ひます。世間では如何にも冷酷な人であつたとか、如何にも意地の悪い人であつたとか思つて居るらしい。これはどつちかと云ふと、書物許り讀んでゐる今日の若い文學者の人々から見れば、あの氣のきいた、如何にも皮肉な文章の調子を見て、あきれてしまつて、斯う云ふ文章を書く人ならば、定めし意地の悪い人だらう、冷酷な人だらうと思つて、且つ亦逸話として世間に傳つて居る一寸とした缺點から人物を判斷して、齋藤と云ふ人はいかにも惡黨でもあるかのやうに判斷してしまつたのでありませうが、決して悪い人ではない。



隨分面と向つて人をヒヤカスやうな事もあつたが、私の目から見れば、思慮の綿密な人で、面と向つて話をして居る時は餘程容赦をして、人の感情を損ふやうな言葉は用ゐないやうにして、婉曲に話をする人で、また人に對しても察しの深い、情に厚い所があつたやうに思はれるのです。それですから、極く親しい友達間では人の事を批評もするが、あの人はこれ／＼の缺點があると云ふやうな事も言ふが、その言ひ方は、聽いた人から先方の批評された人に向つて機會でもあつたならば忠告でもしよと云ふやうに言ふので、只だその人を陰で罵つて快とするといふやうな事は無かつた人であります。一言すれば情に厚い人で、思慮の綿密な人です。作品を見れば分りませうが、細かい所まで思慮が行届いて居つた人であつたのであります。一例を擧げて言へば、齋藤君は自分が死ぬと云ふ事を知ると同時に、手控とか手紙などは皆焼いてしまつたのです。あの人は自分の筆跡を人に見せる事を嫌つて居つたものですから、それ等の物を悉く焼いてしまつたのだが、兼ねて一葉女史の歌を集める事を托せられて居つて、尤も詠草はあつたが、その詠草以外のもので齋藤君

が手控に書き集めてあつた歌が中々多かつたのですが、それだけは残してあつたのです。死ぬ事が分つてから、兼ねて預かつてゐた一葉の遺稿を一纏にして遺族に渡してくれと云つた。私は氣もつかないで持つて行つた處が、樋口家では詠草に載つて居ない歌を齋藤君は書いて置いて下さつたのが添つてゐたと云つて喜んで禮を云ひました。これには、私は非常に感服したのです。自分の手跡は残して置くのが厭やだといふので皆焼いてしまつたに關はらず、同じく自分の手跡でも、自分が死んで他人の事が散逸して分らないといふ物だけは、残して置いて向ふの人に渡すといふのは、感服せざるを得無い事で、平常ならば兎に角に、今夜にも知れない生命だと云ふ時に、その人が自分の筆跡は皆焼いてしまつてもそれだけは残して置く、跡に残して置かなければならないと思ふ友人の遺物だけは残して置くといふのは、思慮の極めて綿密であつた事と情に厚かつたと云ふ事を見る事が出来やうと思ひます。人物は先づさう云ふ風であつたが、容貌を言ふと、脊の高い人で、日本人としては、身の丈が五尺五寸と云ふのだから、餘程高い方で、私どもよりは一寸五分許り



高い瘦せた人で、面も長い方で、極く鋭いと言つて決して悪相ではないが、如何にも利巧さうな顔であつたのです。平生から痩せて居つたからか知らないが、最後の場合までもさう衰弱が目立たぬやうでした。私が齋藤君を始めて見たときは、確か明治三十年の夏であつたと思ひます。その場所は本郷丸山福山町の一葉女史の家であつたのです。その時分には一葉女史は死んでもう居なかつたので、二十九年に一葉女史は死んでしまつたのだが、その家に一葉の母さんと妹さんの邦子さんが住んで居つた。所で或る夏の晩の事でしたが、私は用があつて一葉さんの家へ行つたが、その時客が来て居りました。その時には私が行くと、その客は挨拶をして、すぐ歸つてしまつたが、跡で家の人に聞いたら、あれは齋藤君であると云ふ事であつた。その前から一葉女史の死んだ時に齋藤君が色々世話をしてくれたと云ふ事を、戸川秋骨君から聽いて居つた。齋藤君から鷗外さんの所へ話をして青山さんに一葉女史が診察して貰つたとか、遺稿の事は幸田さんに話をして世話をして貰つたとか云ふ事であつた。一葉女史との交りは吾々より淺いにも拘はらず、親切に世話をし

てくれたと云ふ事をきいて、兼々謝意を表して居つたのですが、然しその晩は齋藤君も急いで居つたので挨拶もロクにしないで別れましたが、その年の暮に島崎藤村君が本郷森川町もりがはちやうに或家の座敷を借りて居つて、その家は本多神社の後ろでしたが、齋藤君は丸山新町の或る下宿屋に居りましたので、よく藤村君の所へ遊びに来る、私も遊びに行くものですから、そこで心安くなつてしまひました。その後その年の暮であつたか、その翌年であつたか、島崎君、戸川君、齋藤君、私とかう四人で一所に、淺草の方へ出かけて、向島の土手を歩いて、千住せんじゆまで行つて車に乗つて淺草公園へ歸つて、仲見世を通つて雷門かみなりもんの方へ向かつて右の方へ曲つた所で、名は忘れだが有名な鳥屋かねだ(金田)がありました。そこへはいつて晩食を共にしました。その時飲んだり食つたりして、それから大變心安くなつて、度々來たり行つたりして、いつもその宿になる處は戸川君の宿で、戸川君は臺町だいまちの坂上の岡田良平と云ふ下宿屋に居たのですが、そこへ皆集つて、そこへは上田敏君も來る、島崎君も來ると云ふ事であつた。皆そこへよつてワアワアと言つて話をして居りました。その時の話



は「あられ酒」の中にも齋藤君が書いて居るのですが、私が厚い毛の洋服を着てごんで居ると、戸川君が、『かうやつて居れば君も可愛いね』と言つて背中を撫でました。その時私は『己れを熊の子だとも思ふのか』と言つたら、齋藤君が『何に猪の弟だ』と言つて大笑ひになりました。さう云ふ事で頻りに交際して居りましたが、確かあれは三十一年の初めかと思ふのですが、森川町に岡埜と云ふ菓子屋があります、その裏手の簾藤といふ下宿屋に齋藤君が移りました。その時分から萬朝報に出て居りましたのです。その家は今は青雲館と云ふ家になつてゐるさうですが、その家へは私は度々行きました。そこには大野洒竹が同じく下宿して居つたし津山の學校に居た田岡嶺雲君も遊びに来て皆集りました。或る時などは三人で一所に道を夜歩いた事もありました。齋藤君は非常に東京の事情には通じてゐたものですから色々私の知らない事をきかして貰ひ、斯う云ふ事は斯うだと言つて教へて貰ひました。その年の暮であつたか、一人で淺草の方まで行つて見やうと云ふので、その時には駒形こまかたまで行つて、あすこまへに前川と云ふ鰻屋があるのですが、そこへ行つ

て二人で晩食をしました。その日は寒い暗やみの晩で風が少し吹いて居りました。齋藤君も酒は飲まない方だが、その時は少しは飲みました。その歸りに二人で歩きながら色々話をしたのです。齋藤君はその頃は、シメリ勝ちで餘り人に話をする事も無かつたが、その時には特に意氣銷沈の有様で話かけました。その話は『今日まで自分は十分の學問も出来なかつた。それは何ういふ譯であるかと言ふと、自分には弟が二人あるので、自分が學問をして高等の學校へまで行かうとすれば、その二人の弟に學問を廢させなければならなかつたから、自分は二十歳前で學問はやめてしまつた。また自分が小さい時分には家が困窮であつたと見えて、まだ自分が小さい時分に母さんに色鉛筆を買つてくれと言つた處が、母さんは宜しいと言つて引受けは引受けだが、然しよく／＼金がなかつたものと見えて、頭の物か何か、當時母さんは銀の平うちか何かの頭の物を賣つた容子だつた。母さんは観音様へ行くと云つて出て行つて、色鉛筆を買つてくれたのは買つてくれたのであるが、見ればいつもさしてゐた簪が無くなつて居つた。母が親の遺物であると言つて居た物を賣つて鉛筆



を買つて呉れたと云ふ有様であるから、私は學問をやめて弟共に修行させました。それで自分は毎月幾日かを記念の日として觀音堂に詣るのであるが、それが丁度今日なんだから觀音様へ行く積りだ。今夜は寒いけれども一所につきあはないか」と云ふので觀音堂へ行つて、二人で話をして、その晩家に歸つて來たのでした。

私はそれぎりにして餘り齋藤君の身の上に就いて聴きませんでした。唯だ齋藤君の事に就いて度々餘人から聽いて居つた事は、三十三銀行の河村傳衛と云ふ人の世話に齋藤君はなつて居つたことがあつたといふことで、その人は商界の豪傑であつたやうだが、その人が破産をしてしまつたので、齋藤君の身の上には不便が生じたのであるといふことです。それから後は私も暫く色々の事に妨げられて交通をしないで居りましたが、その中に齋藤君は森川町の下宿を引拂つて、向柳原に齋藤君の妹さんが嫁入つて居られる處がありますが、齋藤君はそこへ行つて居られたやうです。それは三十二年中の事であると思ひます。その間手紙であちらからも何か言つて來た事もありましたし、友達なども尋ねて行つた事もありましたが、下宿屋とも

違つて邪魔にもならうかと思つて行かずに居りました。その年も暮れて三十三年の暮になつてから、齋藤君は鶴沼へ轉地をして東屋あづまやと云ふ家に居つたやうでしたが、そこから十二月二十日の便で手紙が來て居る。その手紙は今も手許にあります。轉地療養をしたから遊びに來いと云ふ事でありました。併し私も東京に用事があつたものですから、一寸も訪問をしなかつたのでした。その家には齋藤君は大分長く居つたのでしたが、三十四年の四月になつて小田原の緑新道へ引越して家を持つたと云ふ通知が來ました。私は丁度その時分に小田原に用があつて參りましたが、急ぎの用であつた爲めに齋藤君も尋ねずに歸つて來ました。それから丁度三十四年の暮に澁谷の與謝野君の所へ行つた處が、(その時分は私が原稿を上げ始めた時分です。)與謝野君の奥さんと門口で話をして居る人がある。向ふは笑つて居るが、こちらは近眼の爲めに分らないのであつたが、側へ寄つて見ると、齋藤君でした。その時は與謝野君が留守であつたから、二人で新橋まで汽車で來て、天金てんぎんで飯を喰つて、それから馬車に乗つて日本橋を下りて、歩るきながら神田の大時計の所まで



來て、あすこで別れました。その後翌三十五年の一月に旅行しやうと思つて、小田原へ行つて私の姉の家へ行つて、一月一日の晩に齋藤君の家を尋ねて色々話をして私は翌日伊豆の方へ行つたのです。その後これは二月の初めであると思ひますが、梅を見に行かうと思つて、齋藤君の所へ尋ねて行つて、梅の面白い所を案内して貰つて見て、その晩東京へ歸つて來ました。その時にも齋藤君は『どうかして東京へ歸り度い。山や海では自分には仕様がな。やはり東京の市中で塵を吸つて居て、外を「ネッテナコトオツシャイマシタカネ」と云ふやうな唄でも唄ひながら歩く人の通る所に居なければ、自分には仕様がなから、なりたけ早く東京に出たい』と云つて居ました。私も尤もな事と思つて『身體の工合さへよければ東京へ行つた方がよからう』と言つて、その時にはそれで別れたのです。それから暫くして夏になる前、即ち三十五年の春でしたか、小田原の十字町へ引越したと云ふ手紙をよこしました。三十五年の夏の海嘯の時もどうかと思つて見舞状を出した處が、別段危険は無かつたと云つて來ました。それから三十五年の秋かと思ひますが、その時分齋

藤君は東京へ出て來ました。その年の十二月の二十三日であつたが、淺草の須賀町に家を借りましたと云ふ通知狀が來て居ります。その時にはすぐ行かなかつたが、正月になつてから身體が悪い、熱で弱つて居ると云ふ事であつたが、此方も急いそがしかつたし、殊に齋藤君の悪いと云ふ事は屢々きくのだが、いつもぢき直るものだから、やはりぢき直るだらうと思つて行かなかつた。それでも二月であつたか行つて須賀町の家で話をして來ました。その家と云ふのは明治病院へ這入つて行く所で、家の前はあした死ぬかも知れないと云ふ病人が擔はれて通るし、出て行くものは屍に成つて通るものなども少く無いので、それを見て居るのは餘り氣持がよくないと云ふ事でありました。尤もその時には餘程病氣もよくなつて、床の上で起き直つて居りました。その時には、これはどつかへ引越さなければならぬと云ふ事を云つて居りました。それから暫くなつて、三十六年五月一日に、千駄木林町二百三十番地、丁度大觀音から團子坂の方へ行つた處をズット左へ横町を這入つた所です。今はあすこに日本淑女學校と云ふ學校がありますが、その奥の方に家を借りたのでした。



そこへも、私は色々用事があつたものですから度々行きました。その時齋藤君は随分衰弱してゐるやうであつたが、別にひどく悪いと云ふ程でもなかつたのです。そこに居つたのは僅かの間で、その年の十月十九日頃に少し話があるから来てくれと云ふので行つた所が『此處に居ると随分人が尋ねて来るし、自分も靜かに療養をして見たいと思ふので、全く客を避ける事の出来るやうな、人に分らないやうな所へ引込んでしまつた方が氣樂でよからうと思ふので、越す積りだ』と云ふのです。それで家はどこにすると云つたら、本所の横網に見付けて置いたと云ふ事でした。私はそれならばさうするがよからうと言つた處が、決して他の人には云つてくれるなと云ふことであつた。私は知つてゐて言はないと云ふ事はどうかと思つたが、さう云ふものだから承諾した。それで十月二十三日に横網町一丁目十七番地へ轉居しました。それから一遍暮の中に行つたやうに覺えて居ります。それから一月に成つてからでしたか一回行つた處が、どうも身體がよくない、夜中になると咳が出るし、熱も出て非常に困る。モルヒネを飲んだ所が、餘りきゝ過ぎるので身體が苦しい。

『或る夜中などは愈々どうも黒粹になるかと思つて、さうなれば頼んで置かなければならない事もあるから、君と幸徳君カウタクに来て貰つて話を聽いて置いて貰はなければなるまいかと思つた事もあつた』と云つて笑つた事がありました。それから一寸經つて三月の初になつて私の所へ手紙が來た。それにはかう書いてある、『諸藥効を奏せずやゝ危険の状態に陥りたる事を御承知置き被下度候』と書いてありました。その書面には與謝野君の所へも此の旨を通じてくれと云ふ事を書き添へてありました。それですから與謝野さんの所へ手紙を出して置いて、その翌日行つて見た所が、熱が非常に出て困ると言つてひどく弱つて、此の勢ひでは、どうなるか分らないと言つて、ひどく心細い事を言つて居ました。少し友達とも話合つて置きたい都合もありましたから、齋藤君の病氣の氣遣はしいと云ふ事をその晩或る人の所へ通じて歸つて來たのでありました。それから二三日たつて呼びに來たから行つて見た所が、此の時は晝間であつたが、頓服藥を飲んだものだから熱も落ちて居つて、非常に勢がよくなつて、色々話をして別れました。それから四五日たつて、また手紙をくれま



したが、それは、すぐ行かすともよいと云ふやうな事でもあつたし、齋藤君が熱が出て苦しんでゐると云ふ事は幾度もある事で、いつもそれは恢復するのですから、今度も恢復するであらう、或は六月頃までは大丈夫だらう、若くは暮あたりまでは大丈夫かと思つて居たのです。さう思つて無沙汰をして居た處が、四月十一日の五時過ぎであつたが、齋藤君の所から使の人が来て、全く病氣が危篤である、今晚にも分らない位である、言葉も聴きとれぬ位であるから一時でも早く来て跡々の事をきゝ置いてくれといふ事であつた。まだそこまではなつて居まいと思つてゐたのでしたから、私は甚だしく意外に思つて、急いで行つた處が、向ふへ著いたのは六時過ぎで、燈火のつく時分で、丁度その時は醫師が来て居つて、私が行くと醫者は歸つて行く。その時齋藤君は非常に衰弱して居つたが『よく来てくれた、もう愈々いかぬ、先程醫者を頼むで注射をして貰つたが、注射は一回より一回と效力を減ずるから、二三回もやれば注射もきくまいと思ふ。もうこれが自分の最後である、かうやつて居るのは随分情無いもので、自分で起きやうと思つても起きる事は出来な

い、人に起して貰つても息がつかまつて呼吸が絶えてしまふ。最早牛乳も喉に通らない、僅かに氷を飲んで居るだけである。愈々お別れた、ながくどうも御世話になつてありがたかつた。少し頼みたい事があるから』といつて、家の人に言付けて古い文庫を取出して、その中から一葉女史の遺稿の預つてあつたのを出して、これを返してくれと云つた。これは私と齋藤君と相談して纏める積りであつたが、齋藤君はかうなつては仕やうがないからと云つて私に引受けて、跡で出来るものならばどうかしてくれといふ事であつた。また『戸川秋骨君から原稿を預つて居るから、之れも返して貰ひたい、もうこれぎり頼む事はない、愈々お別れである、もう話はない、君の来るまでは何か話もあるやうに思つて居たが、かうなつては話はない』とかう云ふのです。私はそこで、確かに受合つたと言つて、暫時黙つて居つた處が暫くして氣の毒だが筆を執つてくれぬかと云ふのです。そこで筆を家の人に出して貰つて何だと言つたら、例の新聞に出た廣告文で『僕本月本日を目出度死去致候間此段謹告仕候也四月日綠雨齋藤賢』といふのを書いて置いて呉れといふのでした。



『既に幸徳秋水を電報で呼んで居るが、多分は今夜来てくれるかとは思ふが、行き違ふといかぬから、念の爲に之れを懐に入れて居つて、僕が死んだと云ふ通知が行つたならば、この廣告文を幸徳に托して「二六」「萬朝」位でいゝから出してくれ』といふのです。よしと言つて受合ふと、『念の爲めに、もう一枚書いてくれ。幸徳が今夜来れば直接に頼むことにするから』と云ふから又一枚同じ事を書いた處が、大變禮を云つて床の下に入れた。家の人も私と齋藤君の間に何か内密な話もあらうかと思つて、そこを避けて居たものだから、枕許に在る氷を飲まうとする時などはそれを取つてやり、また家の者に硝子の管は無いかと聞いた所が、私の心持ちは硝子の管で飲んだ方がよいかと思つてきいたのだが、家の人管よりも盃で飲んだ方がよいと云ふから、之れで飲まますのでと云つた。暫くすると、齋藤君が家の人に管を持つて来いと言ひ付けました。これを見ても私は齋藤君が萬事に行涉つた人であつた事を感じざるを得ないので。私が注意をしたものですから、家の人に管を持つて来させて、私の面前で飲んで見せて、友人の注意を空しくしないと云ふ事を示

したものと思ひます。死の目前に迫つて居る人の所業としては如何にも餘裕のあることで、通例の人の中々出来ない事であらうと思はるゝのです。それから暫くすると、『愈々今夜當りは家の者を寄せて、所謂裏家の葬式の順序立てをする積りだ』と言つて寂しく笑つた。私は何でも話せ、腹藏なく話すがよろしい。書き留むべき事は書き留めて置くから、遠慮なく云へと言つた處が、此の期に及んで何も言ふべき事はない、たゞ死あるのみであると云つた。其時家の人も来て介抱して居つた。私はそれから暫く枕許に控へて居た處が、齋藤君が『どうせいつまで居た所が名残りは盡きないから、もう思ひ切つて手短く別れてしまおふではないか、文筆を執る人が枕許に居て呉れるのは心強く思ふべき筈だが、今ではそれらの事が反つて厭はしくなつて居るから、何うか歸つてくれる』といふのです。それで、私は至極尤もだ、善く解つたと云つたら『君は僕の言ふ事が解つてくれたか』と喜ばしきうに云つたのです。その事に就いては私は斯う考へたのです。齋藤君は文學者としても、又一個人の俗人としても色々計畫して居つた事もあるだらう、身體が壯健であるなら



ば、あゝも、かうもと思つて居たであらうが、この計畫が悉く外れて、自分の思つただけの作物を出す事も出来ずに、今此の如く所謂陋巷の一小屋裡に斃れる場合になつては、總べてさう云ふ事業の失敗とか半生の不遇とかいふやうな念を全く離れて、唯だの一人の市井の民と成つて、學問から離れて、只の裏屋の主人となつて死にたいと云ふ考を持つて居たのではないかと思ふ。然るになまなか文筆の人が枕許に居て、君が計畫の齟齬した事を思ひ出させるのはよくないと思つたから、頼まれた事だけは確かに引受けたと云つて歸つて來ました。その歸り途に樋口一葉さんの妹さんの所へ寄つて、此の事を話した處が、妹さんは車を飛ばして、その晩行つたさうです。翌日も朝行かうと思つた處が用があつたので晩方行つた處が、別に病狀に變りはないが今夜にも分らない容子であると云ふ事であつた。向ふで逢はうと言つたらば逢はうと思つたが、『逢つた所が口もきかれないので、唯だ苦みを見せるだけの事であるから、名残は盡き無いけれども逢ふまい』といふ事を病床から家の人が取次いだものですから、その晩は歸つて來ました。翌朝十時過ぎであつたかと

思ふのですが、私の親戚の野崎左文のびさきさぶんから電話が懸かつて來たから、何用であるかと思つたら、齋藤君が今息を引取つたから都合して來られるなら來てくれと云ふ事でした。時間は十一時過ぎで有つたと思ふのですが、横網町へ急いで行つた處が、スツカリ家の片付けは出來て居つたのです。家の人は當人が『葬式など華々しくないやうに、人にも餘り來て貰ひたくないから、世間へは成るべく發表して貰ひたくない』と遺言してあるといふのでしたが、友人としてはさういふ譯にも行かないので、他の友人の所へは當人の死んだ事だけは報知しなければなるまいと云つて居る處へ、野崎君が電話をかけに行つてゐたのが戻つて來る。與謝野君も幸徳君も博文館の内山君も來られた。それから幸田君も程無く來られて、五人寄つて報知を出すとか、何とか友人のすべき事をしました。

また家の人に臨終の有様をきくと、如何にも落付いて居つたさうで、齋藤君の從兄の若江と云ふ人が坂本に酒屋をして居るのですが、その人の妻になる人で、四十四五の人があるのだが、これはシツカリした人で、齋藤君の病が重つたと云ふので、



前々から世話をして居つたが、十一日に醫者が齋藤君の病がいよいよ危篤になつたのを見て『此の人は家の人と違つて學問の人である、商賣人とか職人などは違つてそれ等とは全く生活を異にしてゐる人だから、此のまゝで終らせるのは反つて不親切には當りはせぬか、當人の覺悟もあるだらうから、望みのない事を知らせたくはあるが、どうも言兼ねる事だから、それとなく望みのない事を知らせる方法はないだらうか』と言つた處が、それでは私が言はうと云つて、その女の人が齋藤君にその望みのない事を言つたのです。そこで私の所へもどこへも使が來たのです。その人が世話をして遺言などをきいて、その人と金澤だけと云ふ人が居つて世話をし居つたのです。

齋藤君は死ぬ朝までも気分は確かであつたさうで、朝臺所でガタン／＼と音がした處が、あれは何の音かとさくから、水を汲んで來たのですと言つたら、新らしい水を飲ましてくれと言ふので、水を持つて來て出した處が、齋藤君は快く飲んで寢返りをさせて呉れといつたので、手傳つて寢返りをさせると、皆次の間へ行つて居て

くれと云ふ事であつた。それでほんの一寸の間家の人は次の間へ避けて居て、二分たつて皆引返して來た處が、モウ息が絶えて居つたさうです。齋藤君は兼ねて世を罵ることの烈しかつた人であつたから、死ぬ時にも定めて恐しい事を言つて死んだであらう、生れ代つて來てエライ文章を書かうといふやうな大言壯語を吐いて死ふ事は、あの人の勝れた人であつたといふ事を現はす證據の一つであると私共は思ひます。不遇でも、短命でも一生は一生である。何も萬事の終である死期に及んで怨がましいことをいふにも及ぶまいと思ふのです。此點に於て、齋藤君の死期の静穩であつたことは、同君に對する我々の敬意を益々深かうする譯であるのです。翌朝になりますと本人の遺言通り朝早く火葬すると云ふ事になりました。外の諸君へは一寸も通知をしないで置いたのですから、その供をしたのは、幸田君與謝野君私と友人で三人、親戚の男の人が四人で、朝五時に横綱を出棺して隅田川の岸を傳つて、厩橋へでて、あれから眞直ぐに西行し、本願寺の方へ曲がり日暮里の方へ行つ



たのですが、その道で色々の事を考へたのです。文壇に同じく名を馳せた人で、病が危篤だと言へば、各新聞にその事を書立てられ、その死するや知るも知らぬも打寄つて立派に行列を整へて葬ひを送つたと云ふ人も少くはないのに、之れ等の人に才も作も劣る所のない人で、今此の如く僅かの人數で遺骸を送つて行く、またその人の身の上を見れば、年齢も既に三十八と云ふのであるのに、妻もなく子もなく、一人で寂しく此の世を送つて、今屍を送るに當つても極く近い親類といふのは極少なく、寂しい葬ひの行列を整へて行くと云ふのは、餘程その相違が異様であると色々の事を考へて行つた。然し此の考へは幸田君も與謝野君もさうであつたらう、餘程沈んで歩いて居られた。天の模様は雨を含んで居り、草は露を含んで居る、その中を分けて吾々が寂しい柩を護つて行くのは、あたりの景色のハデヤカなのに相對して、吾々どもには寂しい何とも言へぬ感じがしました。かねて幸田君に法諱をつけてくれと云ふ事を吾々から頼んで置きましたが、道々幸田君が考へて、丁度淺草の榮久町あたりであつたか、幸田君が『どうだ春曉院縁雨醒客としては、居士も何も

なく、それだけの事にしてしまつては、さうすると春の曉に對して醒客の醒めると云ふ字がきいてよくはないか』と云ふので私どもも至極よいからそれに極めやうと言つた。幸田君も故人の事を話をしながら日暮里へ行きました。日暮里へ行著いたのは七時頃と思ひますが、そこには野崎左文君が先きへ行つて居り、少し後れては鈴木友三郎君、堀内新泉君、内山正恕君などが出迎はれて、火屋とでも云ふのですか、焼く所へ屍を納めて歸つて來ました。その晩また集まつて方々へ通知を出しました。その翌日も友人のうち一人を頼んで悔みに來る人の應接をして貰ひました。越えて十六日には駒込東片町の大圓寺で午後一時から友人の人々に集つて貰つて、遺骨を葬る式を舉げました。その時は非常に天氣の悪かつたのにも拘はらず、大抵親しい人々は出席をして下すつたので、式も嚴肅に見苦しからぬやうに舉げる事を得たので、悲みの中にも喜ばしく思ひました。で、其日の式場では、幸田君は、友人を代表し、與謝野君は新詩社同人諸君を代表して弔辭を朗讀してくだすつたのです。あすこには齋藤君の祖父と兩親の墓があつて、臺灣で死んだ弟さんの理學士齋



藤讓と云ふ人の遺骨も其所へ納めてあるので、その中へ一所に齋藤君の遺骨も納めたのであります。

齋藤君の一生は考へて見れば實に寂しい一生である。齋藤君には一人の姉さんがあつて、それが伊勢に嫁入つて居られて、その娘さんが春江と云ふ人で東京に来て居られて、今度の葬式に出席しました。妹さんは柳原の商家に嫁入つて居られる。今一人残つて居られる弟さんは外へ養子に行つて小山田謙と言ふのですが、醫學士で軍醫になつて、戦争に行つて居るといふので、此の人は喪主となるべき人であるのですが來られなかつたのです。葬式の場合でも齋藤君の年齢ならば妻君があるとか、子供があるとかして、それが喪主の席に列ぶべきのが當り前であるのだが、さう云ふものもなく、見渡した所、先づ男の方にもあれ、女の方にもあれ、ひどく君に近い人といつては一人の妹さんと若江といふ従兄の人が會葬されたのみ、と云ふ有様でしたから、何となく涙がこぼれて仕方がなかつた。それは家族の方もさうであるが、また世間を見渡して見ても、随分色々誤解もあり、齋藤君の方でも自分は

さうは思はないでも、そこには全く已むを得ない事情もあつて、人の感情を害すると云ふ事が多かつたので、人によつては齋藤君を悪い人のやうに思ひ、感情を悪くして居る人もあるので、随分敵の多い生涯であつたやうです。

私は近頃齋藤君を知つたのみで分らない事であるが、外の友人諸君から聴くと、十五六年も前から肺病であつたさうです。さういふ大患を抱いて、殊に貧苦の一生を送られたのであるが、外の人は病氣は悪くなるとすぐ床につく者が多いのであるから、従つて人の同情を惹き起さすといふことも多いのだけれども、齋藤君の病氣はぢり／＼攻め寄せると云ふ風であつたのです。それであるから、世間からは病人としては見られずに、健全な人として待遇されて居つたから、餘程苦しい位地に立つた事が多かつただらうと思ひます。

『人は屢しばしばく、中江兆民はどうであつた、正岡子規はかうであつた、それなのに、お前はなぜ、もつと奮發して筆を執らないかといふやうなことを僕に向つて云ふけれども、それ等の人は、どうせ助からぬといふ事を知つて居た人である。しかるに、



僕のは、養生をすれば、少しは命の延びる事は疑がないので餘程事情が違ふのだから、同一の事を僕に責めらるゝのは甚だ無理では無いか』と齋藤君は話したことがあるのです。兎に角、あれだけの病氣があり、又あれだけの不便があるのにあれだけの作物、吾々の方から言ふと事業ですが、あれだけの事業を残すと云ふのは立派な事で、苦心の程も察すべき事であらうと思ひます。若し齋藤君の性行に幾分でもねぢれた所があるとしても、それは全く境遇の致す所で、決して齋藤君の罪ではなからうと思ふのです。文章に骨を折つた事は非常なもので、その苦心の容子は、私どもよりはもつと委しく知つてゐる方々がありませうが、『わすれ貝』のなかにある『朧夜』などは随分幾度書き直したか知れないものです。森川町に居た時に大野酒竹君が近頃の文人は文章を推敲することがないからいけないと言つた處が、齋藤君が文庫のなかゝら『朧夜』の原稿を出して、試たましに見てくれ、一枚でも、上に貼紙をして直してないところはないぞと言つて見せた。それを見ると貼り拔で出來たやうに貼つて直してあつた。一體齋藤君は一字一句念を入れて書いた人です。一字一

句殆んど動かない字を使つて文章を作つた人です。あの人がその上に幾度も紙を貼つて書き直したのだから餘程念を入れたものゝやうです。齋藤君はその時に『こゝに書いてあるだけの意味を少しも變へぬやうに此文章が、此上に直せるものなら、直して見るが宜い』といつて笑つたのです。西洋でも、佛蘭西のギユスタブ・フロオベルといふ人などは、苦吟に苦吟を重ねて文章を作る人であつて、『一の意味に適して居る言葉は唯だ一しか無いものである、それで、その言葉に行當るまでは、決して止まるな、稍それに近い位の言葉を得た位で安心しては駄目である』といつて居るし、又『自分が石が青いと書けば、其場合に適する字はその外には決して無い、讀者は、宜しく、安心して、さう信すべきである』と云つて居るのですが、我齋藤君の如きは確にフロオベル流の人であると思はれます。それから記憶のまことに善かつた人で、人の番地などは皆空で覚えて居りました。決して宿所録などを作る事はしなかつた。話をしながら覚え帳の材料を思ひ出したと云つては、ランプの笠に三角を書いたり、點を打つたりして心覚えをして置くやうだつたが、近年は手



帳を拵へて置いて書きつけたのでは無いかと思はるゝのです。ですから三十一二年頃は三角四角を書いて心覚えにして置いてそれを見ては『日用帳』『覚え帳』を書いたやうです。それ等は固より皆齋藤君の見聞にかゝる短い色々の話なのですが、毎回の書出し工合がどうもむつかしいといつて居ました。始めに書き出す話は機關車のやうなものにして、全體を之でもつて引出させるやうにするのであるから、それが一番骨が折れると言つて居つた。それから一段一段の短い話を切つて行く結末の句が同じやうな句では面白くない、初めの結句に『なり』とあつて、また次の話の結句が『なり』と來ては面白くない、同じ物を使はぬやうにするには餘程骨が折れるといつて居たのですが、出來あがつた君の文章を見ると、溢つた跡などは少しもない。君の文才のあつたことはこれでも分るのです。君の文章の中には、齋藤君をそのまゝ見るやうな文章が幾等もあります。一體齋藤君は口數は少なかつたがそれでゐて話の甘い人で、『覚え帳』其の他の作品の中にあるやうな句調でやられたのです。それだから作品を見ると齋藤君の容貌なり、調子なりが、彷彿として眼前に浮び來るやうに思はるゝのです。

世間は齋藤君の事を評論家として、正直正太夫で皮肉な評をした所ばかりを重んじて居るやうであるが、併しながら私共は齋藤君を評論の方よりは創作の方に重んずべき所があるかと思ふ。犬蓼、見切帳、朧夜、門三味線、朝寢髪、油地獄、かくれんぼ、などを見たならば、創作の力が分ります。世間では、まだ正直正太夫と言つて讀賣新聞に色々の話を書いて居た時分の評論だの、『金剛杵』『霹靂車』のやうな一寸洒落のめしたやうなものの方を貴んで居るので、非常に苦心をした創作の方は重んじて居ぬと思ふ。

私どもから見ると、念を入れた物はそれ丈重んずべき所があつて、齋藤君の價値は寧ろ創作の方に在ると思ひます。それから、これは上田敏君の説だが『世間には齋藤君の文章を舊式だと言ふ人もあるが、あれは新しいので、西洋式で新式の文章である。唯今の西洋式の文とか新式の文章とか云ふものはその作家が日本語を十分知らないから、思ふやうに書いて居ないのだが、齋藤君は思想は新式で、これに合



せるに日本語を十分心得て居たから、西洋式の諸君が言ひ得ぬ所に筆を著ける、それで式が古いやうに見えるので、思想は勿論、文章も全く西洋式といつて宜いのである』これは上田敏君の話ですが、至極適切な評論だと思ふのです。又一面から見ると齋藤君は西洋の事をさう委しく調べた人でもなく、漢文でも和文でも正式に勉強した人でもない。單に學識と云ふ點から言ふと、齋藤君の外に文學者中には齋藤君より學問の出来る人々は幾等もあるものであらうが、併し齋藤君の知つて居るだけの學問を以てして、あれだけ十分世の中の事を解して細かに觀察をして文章を書いて、多數の文學者間にあつて拔群の觀をなして居ると云ふ事は餘程齋藤君の天才のある事を現はす證據になるであらうと思ひます。吾々どもは外國語とか漢文とか和文とか云ふ方で、何かさう云ふ眼鏡をかけなければ、物を見る事が出来ないのだが、齋藤君に至つてはそんな媒介物を經ずして、直ちに肉眼を以つて人世の眞相を見る事の出来た人であつた。眼力の強かつた事は明かなもので、吾々のやうに學問といふ何度かの眼鏡をかけなければ世の中の事を見る事の出来ないといふ近眼者流では

無かつたのであります。此の頃『露蔭車』や『金剛杵』を見てゐると、當時の『帝國文學』や『青年文集』の人々の物の分らなかつた事は今更驚かれる程です。とても齋藤君の敵ではなかつたと思ひます。文章の點から見ても、物を判斷して行く點、物を委しく論じ、且つ事の要領をつかんで行く點は、とても齋藤君の敵ではなかつたと思ふ。外の連中はワイ／＼連だから喧嘩にもなつたが、所謂當時の青年批評家諸君がもつと落付いて居られたならば、齋藤君の打撃には随分閉口したらうと思ひます。これで、大體齋藤君に就て私の知つて居る所だけは終りましたが、唯だ一つ齋藤君から聞いた事で僕の心の中に残つて居る事があります。これは齋藤君が千駄木を引拂らふときに色々な話をして『知合ひの人々に何も言はずに、かうやつて引越して行くのは、まるで夜逃げをするやうなものだがそれに就いて面白い話がある。夜逃げの跡を引受けたと云ふ話がある。それは舊幕臣で、その人が零落してどうも仕様がなから、夜逃をしなければならぬと言つて居つた所が、丁度その時その家のよかつた時に世話になつたことのある人がやつて來た。その男にかう／＼云ふ



譯で夜逃げをしなければならぬと話した處が、よし、己れが引受けたからと云ふので、家の人々は皆出て行つてしまつた。處が跡を引受けた先生で、豆ランプかなんかをつけて、ドテラを着て寝て居たが、その中に外へ出て行つた。夜逃げをする位だから、素より近邊の商家などには少しも信用もなかつたのであらうが、その男はそれをどう説き付けたものか、酒屋から酒を一升持つて來させて、更にまたその酒屋の小僧に言ひ付けて、鰻のドンブリを注文にやつた。鰻のドンブリと考へたのはその人のエライ所で、蕎麥屋にしる鮎屋にしるその日の中に容れ物を取りに來るが、鰻屋に限つてはその晩の中には取りに來ない。必ず翌日取りに來るのである。所がその男は十分世情に通じてゐるものだから、鰻のドンブリを持つて來させたのでせう。その晩はそれ等の物を飲食して、夜具も無く空屋に寝て、翌朝になつて起きたのが、朝九時か十時頃だらうか、その前を屑屋が通つた。すると屑屋を呼び止めて、オイ此の家は引越して出て行つた跡だが、今押入を探した所が、こんな物があつた、買つて行かないかと言つて、出したのは前夜食つたり飲んだりした徳利と

ドンブリとであつた。それを賣つた錢を懐にして飄然として出て行つてしまひました。並の人ならば酒を飲み倒しドンブリを喰ひ倒すまではやるであらうが、容れ物を賣り飛ばすまでに至つたのは極めて面白いやり方で、残る方なき仕方だ。その人が後には守田勘彌の參謀になつて債權者との折衝、金策の方法等を講じたと云ふ事であるから、ます／＼面白いのだ。その人は、或る時には空屋に轉がつて居つたこともあらうし、或る時は千金を懐にして豪遊したこともあらうし、餘程面白い生活であつたと思ふ。此の人は年四十許りで死んだと云ふが、餘程面白い人間ではないか』と言つて、齋藤君が私に話した。私のやうな辯の悪いものが話したのでは少しも面白くはないが、齋藤君は例の覚え帳式のやり方で話されたのだから、餘程面白かつたのです。その外齋藤君は色々の事を話されましたが、急には思ひ出せませぬ。また『明星』にゆつくり書くなり話すなり致しませう。

齋藤君はまた手紙の面白かつた人で、方々集めれば面白い手紙もありませうが、齋藤君は極く簡單で面白い手紙をよこす人でした。一つ見本を御覽に入れてもよい